

長野県埋蔵文化財センター一年報11

1994

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



更埴市屋代遺跡群出土木簡



1. 小諸市郷土遺跡703号土坑土器出土状況



2. 浅科村砂原遺跡周堤帯を残す住居跡



3. 上田市大日ノ木遺跡全景



4. 上田市国分寺周辺遺跡群③地区全景



5. 更埴市屋代遺跡群飛鳥時代湧水地点の施設（木樋）



6. 長野市篠ノ井遺跡群A・B地区の弥生時代後期の墓域

序

財団法人長野県埋蔵文化財センターは、昭和57年発足以来、ここに13年目を迎えました。

本年度も昨年度同様に、長野・佐久・上田・中野の四調査事務所体制で、事業の推進を図ってまいりました。なお、昭和61年に開設し、佐久地方の上信越自動車道および北陸新幹線に関連した調査に携わった佐久調査事務所が、所期の目的を達成し、3月末をもって閉所することとなりました。長い間のご支援、ご協力を感謝いたします。

発掘調査は、上信越自動車道関連、北陸新幹線関連を中心に実施しました。詳しい内容は本文に譲るとして、いくつか目だった調査を取り上げてみたいと思います。上信越自動車道関連では、更埴市屋代遺跡群の溝より多数の木簡が発見されました。県内はもちろんのこと、東日本でも有数の量であります。内容を見ましても、日本で最初の発見である国符木簡をはじめとして、郡符木簡など、当地方のみならず日本の古代史の内容を大きく書き換えるものとして注目されております。また、信濃町の貫ノ木・日向林B遺跡で、旧石器時代の環状ブロックが多数発見されました。遺物としては、磨製石斧が多数発見され、脂肪酸分析の結果、その中の一つがナウマンゾウの解体に使われた可能性があることがわかりました。北陸新幹線関連では、長野市浅川扇状地遺跡群で、当センターとしてははじめての経験となる本格的な市街地での調査を実施しました。振動、騒音、ほこり問題などさまざまな市街地特有の困難に直面しましたが、多くのご支援、ご指導をいただき、本年度予定した調査を終了することができました。整理作業も、昨年度までに調査が終了した遺跡について、継続して実施しております。

次に事業のもう一つの重要な柱である普及啓発活動も、遺跡ごとの現地説明会や速報展を通して実施してきました。埋蔵文化財に対する関心の高まりからか、毎回多数の方々に参加していただきました。また今後当センターの調査研究の拠点となる県立歴史館の開館に際し、善光寺平の弥生文化をテーマとして、開館記念企画展「赤い土器のクニ」を開催しました。多くの方々の注目を集め、2万人を越える入場者を記録しました。

本書は、平成6年度に実施した発掘調査・整理作業・普及公開事業等について、その概要を掲載したものです。ぜひご一読いただき当センターの内容についてご理解を賜わり、事業の推進に益々ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

終わりにあたり、日頃より当センターの発掘調査をはじめとした諸事業に、ご協力、ご指導をいただいております関係各位に対し、厚くお礼申し上げますとともに、今後の変わらぬご指導とご支援をお願いいたします次第です。

平成7年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤善處

目次

口絵 カラー

更埴市屋代遺跡群出土木簡

写真

- 1・小諸市郷土遺跡703号土坑土器出土状況
- 2・浅科村砂原遺跡周堤帯を残す住居跡
- 3・上田市大日ノ木遺跡全景
- 4・上田市国分寺周辺遺跡群③地区全景
- 5・更埴市屋代遺跡群飛鳥時代湧水地点の施設（木樋）
- 6・長野市篠ノ井遺跡群A・B地区の弥生時代後期の墓域

序

目次

5	細田遺跡	23
6	山の越遺跡	23
7	大日ノ木遺跡	24
8	宮平遺跡	26
9	染谷台条里遺跡	28
10	山崎遺跡	28
11	東平古墳群（砥沢古墳）	29
	=北陸新幹線関連=	
12	国分寺周辺遺跡群	30
13	上田城跡	32
(3)	長野調査事務所	33
	1) 発掘調査の概要	33
	=上信越自動車道関連=	
1	屋代遺跡群	35
2	窪河原遺跡	40
	=北陸新幹線関連=	
3	更埴条里遺跡	41
4	屋代遺跡群	42
5	篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡	44
6	築地遺跡	48
7	川中島遺跡	49
8	於下遺跡	50
9	浅川扇状地遺跡群	51
10	三才遺跡	61
I	発掘調査及び整理作業の概要	1
1	概要	1
2	各調査事務所の事業	3
(1)	佐久調査事務所	3
	=上信越自動車道関連=	
1	芝宮遺跡群	5
2	郷土遺跡	5
	=北陸新幹線関連=	
3	池尻遺跡	9
4	中金井遺跡	9
5	長土呂遺跡群	9
6	常田居屋敷遺跡群	9
7	前田遺跡群	10
8	砂原遺跡	11
9	中平・田中島遺跡	14
(2)	上田調査事務所	17
	=上信越自動車道関連=	
1	中田遺跡	19
2	真行寺遺跡	20
3	森下遺跡	22
4	東原地遺跡	23

=オリンピック道路関連=		11 裏の山遺跡……………74
11	西光寺遺跡……………62	12 東裏遺跡……………76
	2) 整理作業の概要……………63	13 上ノ原遺跡……………77
(4)	中野調査事務所……………64	=上信越自動車道・
=上信越自動車道関連=		妙高野尻バイパス関連=
1	牛出遺跡……………66	14 貫ノ木遺跡……………78
2	韭山遺跡……………66	15 西岡A遺跡……………81
3	風呂屋遺跡……………67	II 普及・公開活動の概要……………83
4	飛山遺跡……………68	1 現地説明会・展示会……………83
5	大谷地遺跡……………69	2 指導・研究会・学習会……………88
6	八号堤遺跡……………69	3 刊行物……………88
7	七ツ栗遺跡……………70	III 機構・事業の概要……………89
8	日向林B遺跡……………71	1 機構……………89
9	大平B遺跡……………72	2 事業……………89
10	針ノ木遺跡……………73	平成6年度の役員及び職員……………95

I 発掘調査及び整理作業の概要

1. 概要

平成6年度の発掘調査は、前年度から継続している上信越自動車道関連・北陸新幹線関連・国道バイパス関連・オリンピックに関係した県道関連の遺跡を対象に実施した。整理作業は、昨年度までに調査を終了した長野自動車道・上信越自動車道関連遺跡の一部を対象とした。詳細は事務所ごとに報告し、概要を以下の一覧表に示す。

(1) 発掘調査

上信越自動車道関連

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査回数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	調査事務所
佐久市	芝宮	15,000	1,500	1,500	1,500	6.4.11～6.6.10	3	終了	古墳時代後期～平安時代竪穴住居跡5 竪立柱建物跡3、溝1、土坑55	土師器 須恵器	0	佐久
小湯市	縣土	8,000	2,300	2,300	2,300	6.4.11～6.12.22	5	7年継続	縄文時代中期～後期竪穴住居跡70 土坑600、屋外埋戻5、溝1 古墳1、平安時代竪穴住居跡2	縄文土器 土器 石神 石臼 石斧 石錐 三角環状土製品 土師器 須恵器	200	*
東都町	東原地	800	800	800	800	6.11.7～6.11.11	1	終了	—なし		0	上田
*	中田	6,400	6,400	6,400	6,400	6.8.18～6.11.14	3	終了	平安時代の集落跡 竪穴住居跡12（平安）、竪立柱建物跡1 土坑50、埋没河川1	縄文（土器・石器） 平安～中世（土師器・須恵器・垂書土器・刺釜・内耳鍋・羽口・鉄製品）	0	*
*	真行寺	13,000	10,700	10,700	10,700	6.5.9～6.8.31	3	7年継続	縄文・古墳時代～中世集落跡 竪穴住居跡25（縄文、古墳、平安、中世） 竪立柱建物跡4、土坑330、小土坑100 汲路・溝5	縄文（土器・石器） 古墳～中世（土師器・須恵器・灰輪陶器・青磁・中世陶器・石器・鉄製品・古銭）	2,300	*
*	組田	1,000	1,000	1,000	1,000	6.4.11～6.4.27	3	終了	—なし	縄文・土師器	0	*
*	森下	34,800	34,800	34,800	34,800	6.4.20～6.5.18 6.6.13～6.10.7	3	終了	縄文・古墳～平安時代の集落跡 竪穴住居跡24（縄文、古墳、平安） 土坑50、溝・埋没河川5	縄文（土器・石器） 古墳～平安（土師器・須恵器・灰輪陶器・ミニチュア土器・石器・古銭・鉄製品）	0	*
*	山の越	14,000	1,700	1,700	1,700	6.4.11～6.5.11	3	終了	平安時代の集落跡 竪穴住居跡1（平安） 土坑4、溝・汲路	縄文～中世（土器・石器）	0	*
上田市	大目ノ木	9,500	5,600	5,600	5,600	6.4.11～6.8.25 6.11.8～6.11.25	3	7年継続	弥生前期～古墳～平安時代の集落跡 竪穴住居跡20（縄文、弥生、古墳、平安） 竪立柱建物跡2、土坑30、遺物を包含する汲路2	縄文（中・晩期、土器・石器） 弥生～平安（土器・石器・銅器・鉄製品・古銭・炭化材）	900	*
*	染谷台茶里	12,000	800	800	800	6.8.1～6.11.24	1	終了	—なし		0	*
*	宮平	13,000	13,000	13,000	13,000	6.4.11～6.12.16	5	7年継続	古墳～中世の集落跡 竪穴住居跡66（古墳、奈良、平安） 竪立柱建物跡70、土坑1,039、溝3	古墳～中世（土師器・須恵器・山内陶器・石器・鉄製品・帯金具・古銭・骨）	400	*
坂城町	山崎	2,000	650	650	650	6.11.10～6.11.11	3	終了	—なし		0	*
*	東平古墳群	1,000	1,000	1,000	1,000	6.4.11～6.6.24	3	終了	古墳1基（中期・円墳） 炭灰壟	土師器、鉄鏡	0	*
東城市	屋代	46,000	3,000	21,000	21,000	6.4.11～6.12.28	8	終了	縄文時代 竪穴住居跡21、溝13、地土47 土塚280 古墳時代～中・近世 竪穴住居跡2、溝120、土塚50、水田8面以上	土器、石器、土偶、人骨 土師器、木簡、漆木、木炭、炭骨 子持均毛	0	長野
*	窪河原	20,000	5,000	13,000	13,000	6.10.3～6.11.18	2	終了	中世 墓1、水田3面、畑1面	内耳土器、土師器、火葬骨	0	*
中野市	生田	5,500	3,500	3,500	3,500	6.9.12～6.10.31	2	7年継続	中世 竪立柱建物跡11、井戸12	中世陶器、縄文土器、土師器	2,000	中野
豊田村	野山	2,000	2,000	2,000	2,000	6.4.11～6.4.15	3	終了	—なし	縄文土器、土師器	0	*
*	風呂屋	4,000	4,000	4,000	4,000	6.6.22～6.9.30	3	終了	平安時代 竪穴住居跡1 古墳時代後期 古墳1	縄文中期土器・石器 平安時代土器	0	*
*	飛山古墳	1,000	1,000	1,000	1,000	6.10.3～6.12.15	2	終了	中世 塚1	中世土器、鉄	0	*
*	大谷地	4,800	4,800	4,800	4,800	6.4.18～6.6.21	2	終了	—なし	縄文中期土器・石器、 平安時代土器	0	*
*	八号塚	3,000	3,000	3,000	3,000	6.4.18～6.6.21	1	終了	—なし	平安時代土器	0	*
信濃町	七ツ栗	4,900	700	700	700	6.10.3～6.10.31	1	7年継続	旧石器時代 ブロック2、礎群1 縄文時代 土坑12	後期旧石器時代石器 縄文時代早期・中期土器・石器	2,500	*
*	日向林田	10,500	5,000	5,000	5,000	6.6.20～6.12.9	3	7年継続	旧石器時代 ブロック5 縄文時代 土坑115、礎群10	後期旧石器時代石器 縄文時代早期・中期土器・石器	500	*
*	太平B	4,000	4,000	4,000	4,000	6.4.18～6.6.17	3	終了	旧石器時代 ブロック7、礎群1	後期旧石器時代石器 縄文時代早期土器・石器	0	*
*	針ノ木	4,000	4,000	4,000	4,000	6.10.3～6.11.4	1	終了	平安時代 竪穴住居跡4、土坑4	平安時代土器	0	*
*	我の山	8,500	8,500	8,500	8,500	6.4.18～6.11.11	3	終了	旧石器時代 ブロック30、礎群10	後期旧石器時代石器 縄文早期土器	0	*
*	家裏	44,000	4,000	4,000	4,000	6.11.14～6.12.13	2	7年継続	平安時代 竪穴住居跡4	平安時代土器 縄文時代早期土器	4,000	*

石段町	上ノ原	7,500	3,500	1	3,500	6.10.24~6.12.9	3	7年連続	旧石器時代 縄文時代	ブロック5、礎群1 土坑12	後期旧石器時代石器 縄文時代前期土器	4,000	中野
〃	貫ノ木	41,000	25,000	1~2	37,500	6.4.21~6.12.9	5	7年連続	旧石器時代 縄文時代	ブロック20以上、礎群41 土坑35	後期旧石器時代石器 縄文時代早期土器	6,000	〃
〃	西岡A	16,500	3,500	1	3,500	6.4.21~6.10.31	2	7年連続	旧石器時代	ブロック10以上、礎群16	後期旧石器時代石器 縄文時代早期土器	13,000	〃

北陸新幹線関連

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査日数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	調査箇所
御代田町	池尻	15,100	1,400	1	1,400	6.10.20~6.11.8	2	終了	平安時代竪穴住居跡1	土師器	0	佐久
佐久市	中金井	10,000	100	1	100	6.4.11	1	終了	なし	なし	0	〃
〃	長土呂	1,900	400	1	400	6.4.11	1	終了	なし	弥生土器 土師器 須恵器	0	〃
〃	常田居屋敷	6,100	2,300	1	2,300	6.6.13~6.7.8	3	終了	中世または近世水田跡	五輪塔 青磁	0	〃
〃	南田	15,600	6,200	1	6,200	6.7.5~6.8.4	3	7年連続	古墳時代前期竪穴住居跡1、溝2、土坑3 中世竪穴状遺構5、土坑5	土師器 内耳土器 彌の須口 鉄棒 古銭(宋銭)	3,000	〃
法科村	杉原	7,300	7,300	2	14,600	6.4.11~6.8.25 6.11.16~6.12.2	3	終了	古墳~平安時代竪穴住居跡42 竪穴住居跡6、土坑60 水田、畑	縄文中期土器 土師器、須恵器 打製石斧、白土、刀子	0	〃
〃	中平・田中島	7,200	6,200	1	6,200	6.5.25~6.9.28	2	終了	縄文時代 土坑2 古墳時代 竪穴住居跡6、方形周溝墓4、土坑13 平安時代 竪穴住居跡5	縄文~中期土器 古墳時代土師器 平安時代土師器、須恵器	0	〃
上田市	因分寺岡辺	(2,470)7,650	(1,840)6,750	1	(1,840)6,750	6.9.1~7.1.31	14	7年連続	弥生・古墳~平安時代の集落跡(古墳後期主体) 竪穴住居跡200(弥生後期・古墳・奈良・平安) 竪穴住居跡跡15、土坑700、溝20	縄文(土器・石器) 弥生(後期土器) 古墳~平安(土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・和銅開拓・古瓦・帯金具・耳環・白土・管玉・勾玉・仿鍍車)	(バイパス)630	上田
〃	上田城	4,600	700	1	700	6.5.26~6.9.19	1	終了	—なし—	なし	0	〃
更埴市	更埴桑里	9,500	3,600	1	3,600	6.11.1~7.1.18	4	終了	奈良時代~中世 竪穴住居跡5、竪穴住居跡跡6、溝40 井15、土壇500、畑1面	土師器、須恵器、馬骨	0	長野
〃	堀代	13,200	4,400	3	11,000	6.4.18~6.11.2	4	終了	古墳時代~中世 竪穴住居跡94、 竪穴住居跡跡4、溝50、井17、土壇250 水田2面、畑1面	土師器、須恵器、奈良三彩、灰釉陶器 銅鏡、玉環	0	〃
長野市	藤ノ井	7,300	2,800	3	7,000	6.4.11~6.9.22	4	7年連続	弥生時代 竪穴住居跡42、溝10、円形周溝墓40 土壇50 古墳時代 竪穴住居跡77、竪穴住居跡跡20、溝30 ~中世 土壇280、水田1面	土器、人骨、鉄鋼、銅鏡、銅線、卜骨、玉環 土師器、須恵器、瓦葺	500	〃
〃	石川桑里	10,300	3,500	1	3,500	6.8.30~6.9.22	2	7年連続	平安時代 水田1面	土師器	1,000	〃
〃	築地 終下 川中島	20,650	4,600	1	(440)4,600	6.4.11~6.7.13	3	終了	平安時代~中世 竪穴住居跡35、竪穴住居跡跡2、溝50 土壇750、井110	土師器、須恵器	0	〃
			1,500	1	(460)1,500	6.11.21~6.12.22	2	終了	中世 竪穴住居跡9、溝10、土壇60 水田跡1	内耳、陶器、人骨	0	〃
			310	1	310	6.6.24~6.6.25	2	終了	—なし—	なし	0	〃
〃	浅川扇状地	71,867	26,447	2	(4,734)44,782	6.4.11~7.1.31	18	7年連続	縄文時代~中・近世 竪穴住居跡116、竪穴住居跡跡34 溝170、井160、墓20、土壇2,000	土器、石器、土師器、須恵器、陶器、鉄貨、磁石、木製農具、儀仗、鉄網	2,500	〃
〃	三才	14,000	340	1	340	6.8.3~6.8.12	2	終了	—なし—	なし	0	〃

国道18号野尻バイパス関連

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査日数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	調査箇所	
信濃町	貫ノ木	7,600	1,600	1~2	2,400	6.7.13~6.11.30	3	7年連続	旧石器時代 縄文時代	ブロック5以上、礎群10 土坑5	後期旧石器時代石器 縄文時代早期土器	6,000	中野
〃	西岡A	9,000	9,000	1	9,000	6.8.9~12.9	2	終了	旧石器時代	ブロック1、礎群1	後期旧石器時代石器	0	〃

県道バイパス関連

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査日数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	調査箇所
小川村	西光寺	200	200	1	200	6.4.13~6.4.20	5	終了	縄文時代 土壇3	土器、石器、内耳土器	0	長野

(2) 整理作業

所在地	遺跡名	調査対象面積	契約面積	調査面積	調査面積	調査期間	調査日数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積	調査箇所	
長野自動車道関連	長野市	石川桑里遺跡		遺物実測・図版作成、遺物分類等									
		藤ノ井遺跡		遺物実測・図版作成、遺物分類等									
上信越自動車道関連	中野市	松原遺跡		図面整理、遺物の洗浄・注記									
		清水山古窯跡		遺物実測									
		池田端古窯跡		遺物実測									

2 各調査事務所の事業

(1) 佐久調査事務所

発掘調査の概要

調査遺跡数 9遺跡 35,000㎡

調査面積 上信越自動車道関係 佐久市芝宮遺跡群 (1,500㎡)・郷土遺跡 (2,300㎡)

北陸新幹線関係 御代田町池尻遺跡 (1,400㎡), 佐久市中金井遺跡群 (100㎡)

長土呂遺跡群 (400㎡—試掘)・常田居屋敷遺跡群 (2,300㎡)・前田遺跡群

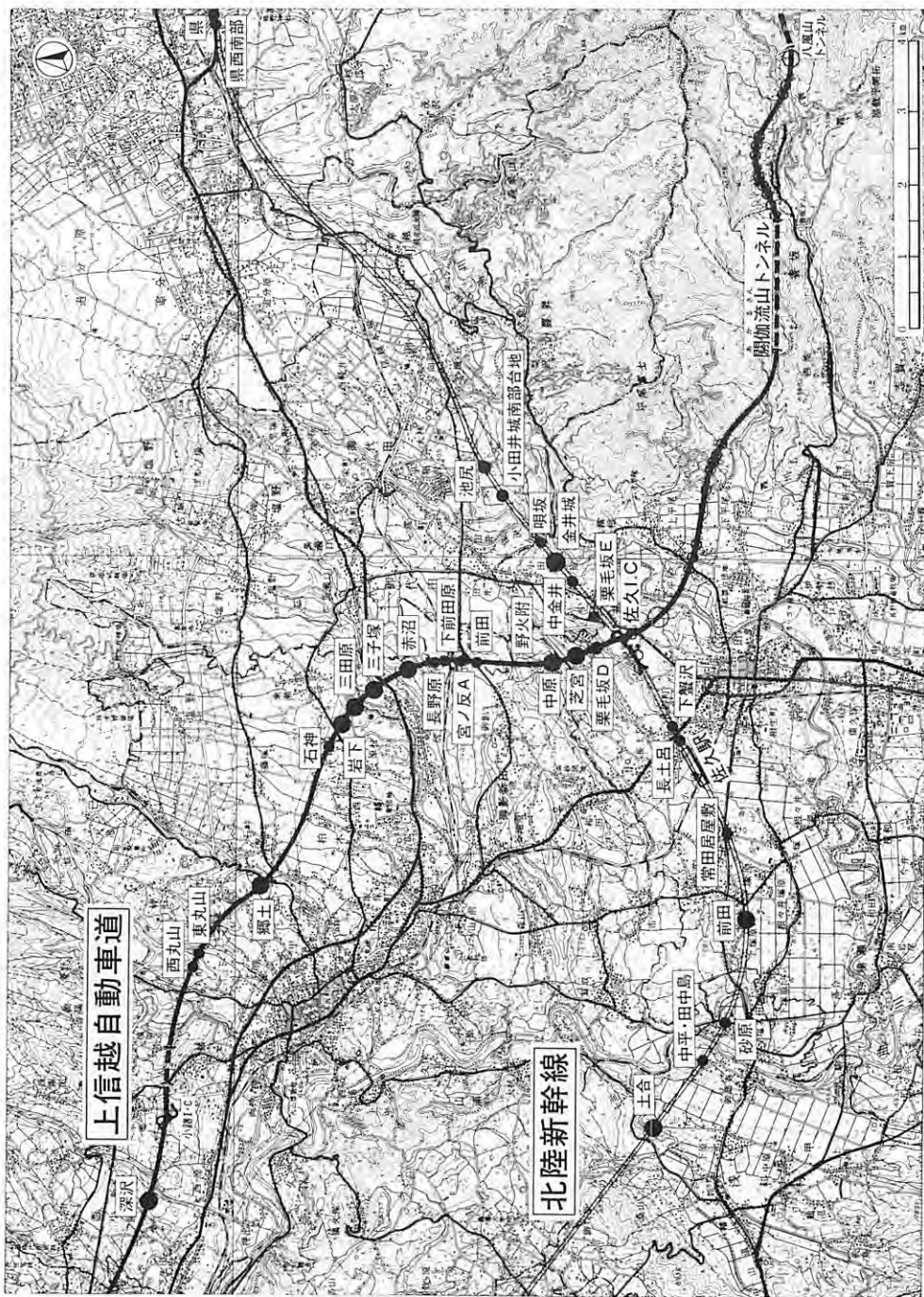
(6,200㎡) 浅科村砂原遺跡 (14,600㎡)・中平・田中島遺跡 (6,200㎡)

調査期間 平成6年4月11日～平成6年12月22日

上信越自動車道関係では、一昨年より継続調査されている芝宮遺跡群と郷土遺跡の調査を行った。両遺跡とも今年度ではほぼ全ての調査を終了した。芝宮遺跡群は3年間にわたる調査の結果、大規模な古代集落跡であることが判明した。田切りを隔てて北接する中原遺跡群と同時期に営まれた集落と考えられることから、佐久平北部の古代集落のあり方を解明していく上で貴重な調査となった。郷土遺跡は200㎡を用地との関係で来年度へ残さざるを得なかったが、縄文時代中期後半を中心とする集落跡が検出された。出土する遺物も多く、他の地域との関連を知る上で貴重な土器も出土している。遺構数、遺物量とも浅間山麓有数の遺跡であることが判明しつつあり、今後の浅間山麓における縄文集落の解明に多くの資料を提供できた。

北陸新幹線関係の調査は、御代田町1・佐久市4・浅科村2遺跡で行った。御代田町・佐久市内の遺跡は、遺構が全くないか、あってもごく僅かであったが、浅科村の2遺跡から興味深い遺構が検出されている。砂原遺跡からは、厚さ2mに及ぶ千曲川の洪水砂にバックされ、古墳時代前期～平安時代の集落、平安時代の耕作地が検出された。中でも平安時代の遺構は、小区画の水田、畑地、そして畑地の一角に1軒ではあるが竪穴住居が構えられ、用水路・あぜ道・小川も見られる等、地形をうまく利用した当時の農村の風景がそのまま残されていた。県下初の発見となったが、竪穴の周囲には幅約2m、高さ20cmの周堤が巡らされており、住居が廃棄されてすぐに洪水に遭った様子がうかがえた。中平・田中島遺跡からは、古墳時代前期と平安時代の集落跡が検出された。古墳時代前期初頭の集落はこの周辺では初めての発見であり、住居跡より若干後に造られた4基の方形周溝墓の存在とともに、佐久地方が弥生時代から古墳時代へと転換していく時期を考える上で貴重な資料であると考えられる。

昭和61年10月に開所してから8年6ヶ月、上信越自動車道、北陸新幹線用地内にかかる遺跡発掘調査を実施してきた佐久調査事務所はその業務を今年度で終り、3月末閉所することとなった。開所以来、高速道関係41遺跡・約40万㎡、新幹線関係15遺跡・約8万㎡の発掘調査と、県境から佐久インターチェンジ間23遺跡の発掘調査報告書2冊を刊行してきた。残る遺跡の整理・報告書作成は次年度から上田調査事務所へ継続されるが、これまで佐久調査事務所に寄せられたご支援、ご指導にこの場をお借りし感謝申し上げます。



地図1 佐久調査事務所関係調査遺跡 (1 : 100 000)

上信越自動車道関連

1 ^{しばみや}芝宮遺跡群

所在地：佐久市大字小田井字下曾根35番地ほか 調査期間：平成6年4月11日～6月10日

調査担当者：藤原直人 白鳥喜一郎 征矢野安政 調査面積：1,500㎡

遺跡の立地：浅間山麓南斜面末端部の田切りに挟まれた台地上

時代と時期：古墳時代後期～平安時代 遺跡の特徴：古墳時代後期～平安時代の集落

主な出土遺物：古墳時代後期～平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、鉄鍬、釘など

調査の概要：芝宮遺跡群は佐久市の北部、浅間山麓南斜面の末端部に位置し田切りに挟まれた台地上、標高745～749mに位置する。現在の芝宮遺跡群付近は上信越自動車道の開通に伴い周辺の開発は著しく発掘調査の数も急増している。栗毛坂遺跡群・長土呂遺跡群・中原遺跡群・周防畑遺跡群など特に遺跡群の密集している地域であり、佐久平北部の古代を解明するための貴重な資料を提供しつつある。今年度をもって3年間にわたった調査は終了した。調査の結果、延べ面積は15,990㎡、遺構の総数は竪穴住居跡250軒・掘立柱建物跡100棟以上・溝状遺構9条・土坑1550基などである。昨年度までの調査では遺構の密度のかなり濃厚な地点の調査が主体となったが、本年度は調査区のほぼ中央部でありながら遺構の希薄な地区を調査することになった。大溝が緩やかに湾曲し、さらには墓跡と考えられる土坑が確認されていることから、集落のあり方を考える上で興味深い資料を得た。

2 ^{ごうど}郷土遺跡

所在地：小諸市大字甲字中郷土4146番地ほか 調査担当者：桜井秀雄 依田謙一

調査期間：平成6年4月11日～12月22日

上沼由彦 山岡一英

調査面積：2300㎡

白鳥喜一郎

遺跡の立地：浅間山南裾部、標高約830mの緩傾斜面上

征矢野安政

時代と時期：縄文時代前期～後期

遺跡の特徴：縄文時代の集落

主な検出遺構：縄文時代住居跡57軒、土坑約800基、平安時代住居跡2軒、煙燻古墳1基

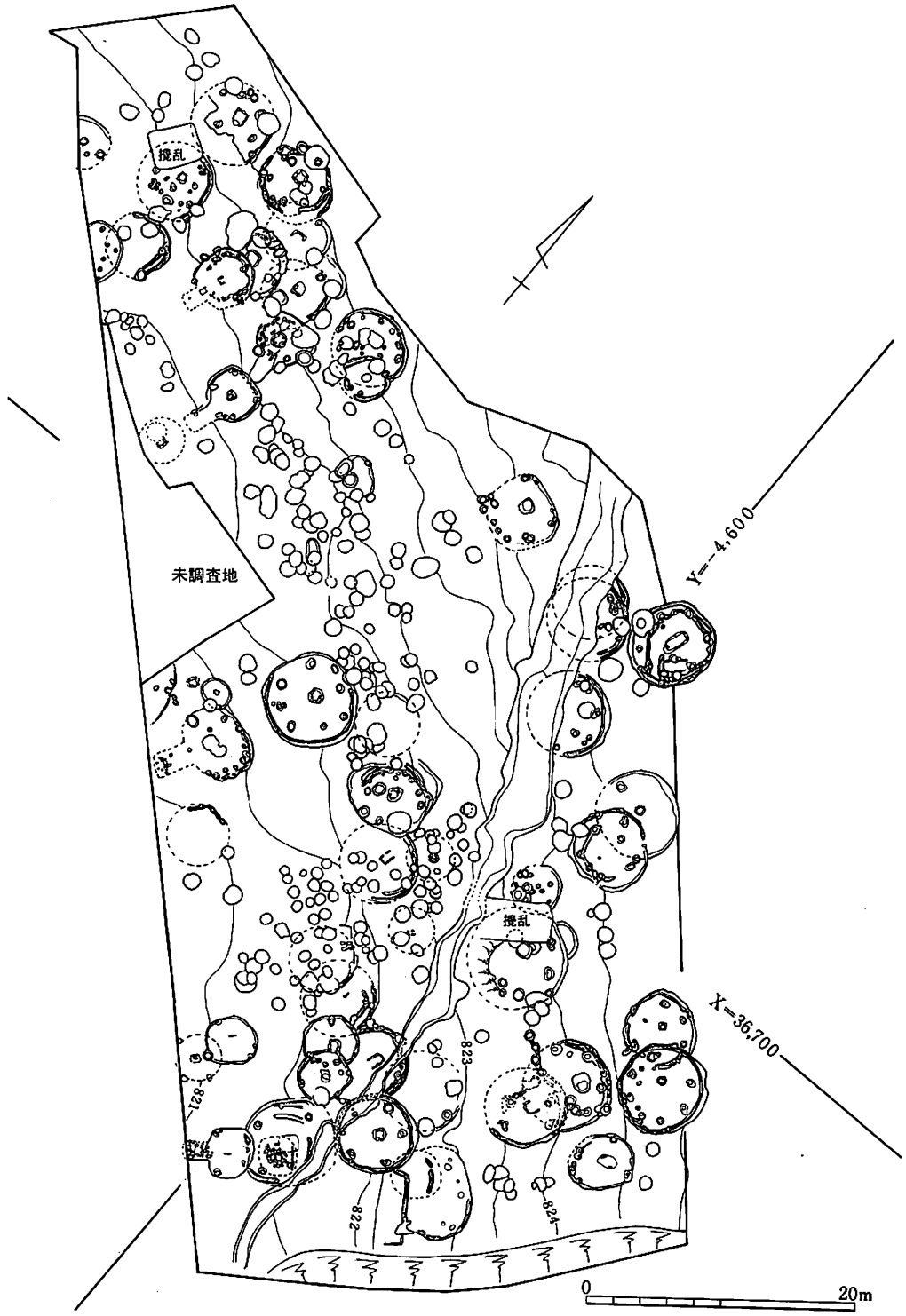
主な出土遺物：土器：縄文土器、土師器、須恵器、石器：石鍬、打製石斧、磨製石斧、石匙、



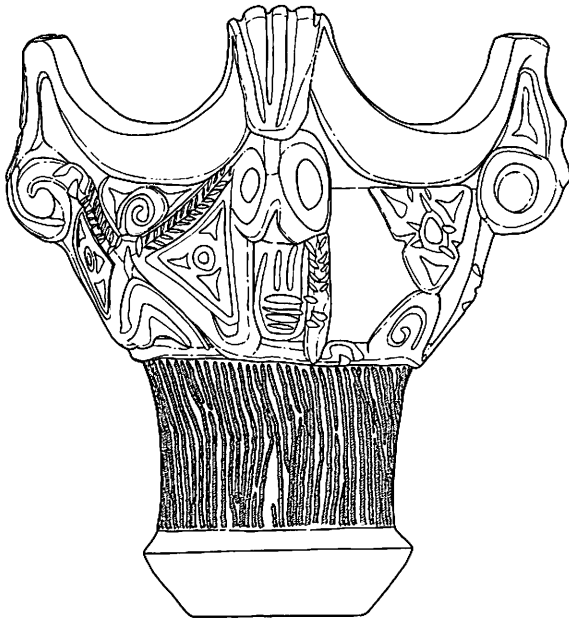
第1図 83号住居跡



第2図 83号住居跡柄鏡部分



第3図 郷土遺跡全体図 (1 : 500)



第4図 703号土坑出土土器

後葉、後期初頭と認められるが、最も盛行したのは中期後半であり、この時期の遺跡としては、浅間山麓では今までに例をみない規模を誇るものである。敷石住居跡も確認されているだけで10軒を超えている。このうち83号住居跡は柄鏡形で比較的遺存状態が良好であり、柄部には石積みをも有する。石積みをも有する柄鏡形敷石住居跡の発見は近年になって相次いでおり、もはや特殊なものとはいえないようである。石棒が3点出土しているのも興味深い。

炉は遺存状態の良いものが多く、石組炉が大半を占めている。炉の石材は安山岩系のものが多いが、軽石を用いる場合も少なくはない。

今年度の調査で注目されるのが、動物とおぼしき骨類を伴う縄文時代の土坑の存在である。(骨類の種類同定については現在鑑定依頼中である。)このような骨類を伴う土坑は100基以上も認められたがその規模及び出土状態はさまざまであった。細かい焼骨が土坑内に散らばるような状態で出土する例が多いが、中には鹿角のみが土坑内にあらかも埋納されたような状態で出土する例もみられる。いずれもなんらかの祭祀的性格が考えられるものであるが、これらの土坑の性格等については今後の課題としたい。

また703号土坑(口絵写真1)には、勝板式に併行する時期に比定される完形土器が埋納されていた。石棒や石皿などを出土する土坑も数例みられる。

石製品：石棒、石皿、軽石製品、土製品：三角罫状土製品、土偶

郷土遺跡の発掘調査も3年目をむかえた。今年度は2500㎡が調査予定面積であったが、用地問題の解決が難航したため、計13回にも及ぶ断続的な調査を余儀なくされた。そして最終的には200㎡を来年度に残さざるをえない状況となってしまった。

さて未調査地が残ってはいらぬものの、この3ヶ年の発掘調査によって郷土遺跡はほぼその全貌をあらわしたものといえよう。

縄文時代の住居跡は現在までに125軒を検出した。時期的には前期初頭、中期中葉・

土坑の中には、上記のほかに墓坑と考えられるものも相当数検出されている。過去2ヶ年の調査では墓坑の存在は認められなかっただけに、今後、本遺跡の集落構造を解明していくうえで貴重な資料を提供してくれるものと期待できる。

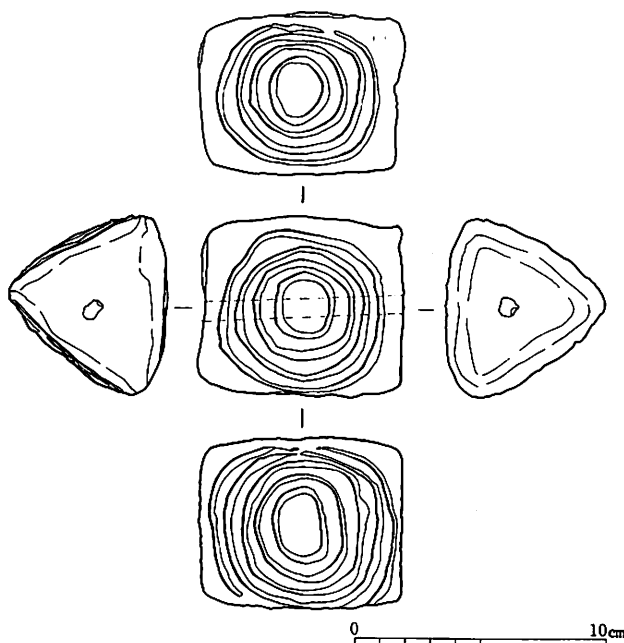
遺物は土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃などが大量に出土している。特記遺物として、101号住居跡から出土した三角罎状土製品があげられよう。床面直上からの出土であり、長軸方向に一孔が貫通し、3面にはいずれも沈線による同心円状の文様が描かれている。重さ369gの完形品である。また、軽石製品も多種多様なものがみつまっている。

ところで今年度の調査では煙滅古墳が1基みつかった。『小諸市誌』によると、郷土古墳群の5基の存在が認められており、この煙滅古墳もそのなかの1基である可能性が高い。遺存状態は悪く、床石の一部が残存する程度ではあったが、被葬者と思われる人骨が比較的まとまって出土している。他の遺物としては完形の須恵器杯がみつまっている。周溝は確認できなかった。須恵器杯から判断すれば、8世紀代に比定されよう。

また2軒ではあるが、平安時代の住居跡も確認された。昭和40年の調査でも1軒みつまっている。当該期にもこの地に小規模ながら集落が営まれていたことが理解できる。

なお、遺構外ではあるが、和同開珎が出土した。

近年、浅間山麓では縄文中期文化の良好な資料が次第に蓄積されてきている。本遺跡はそんななかでも特筆すべき遺跡である。来年度からの本格的な整理作業を通じて、郷土遺跡はもとより浅間山麓における縄文中期文化の実像を捉えていきたい。



第5図 101号住居跡出土三角罎状土製品

北陸新幹線関連

3 池尻遺跡

所在地：北佐久郡御代田町大字御代田字池尻3635-1番地ほか 調査期間：平成6年10月20日～11月8日 調査担当者：尾台昇 白田武正 調査面積：1,400㎡ 遺跡の立地：浅間山裾部の尾根及び谷部 調査地点は追分火砕流（1108年）の末端部に当り、厚さ30～160cmに及ぶ火砕流堆積物によって覆われている。調査の結果、尾根の西斜面で平安時代後期の竪穴住居跡が1軒発見され、住居廃棄後の埋没途中で火砕流によって覆われたことが覆土の堆積状況から明らかとなった。遺物は住居カマド部分から土師器の小型甕と羽釜が出土したのみである。

4 中金井遺跡群

所在地：佐久市大字小田井字中金井797番地 調査担当者：宇賀神誠司 調査面積：100㎡ 調査期間：平成6年4月11日 遺跡の立地：湯川右岸の高位段丘 検出遺構・出土遺物：なし

5 長土呂遺跡群

所在地：佐久市大字長土呂字柳原352番地ほか 調査担当者：藤原直人 面積：400㎡ 期間：平成6年4月11日 遺跡の立地：田切り台地末端 検出遺構：なし 遺物は自然流路内堆積層から弥生土器・土師器・須恵器の破片が若干出土したにとどまった。

6 常田居屋敷遺跡群

所在地：佐久市大字塚原字赤岩464-2番地ほか 調査期間：平成6年6月13日～7月4日 調査担当者：藤原直人 白鳥喜一郎 征矢野安政 調査面積：2,300㎡ 遺跡の立地：浅間山南麓末端部の台地上 主な出土遺物：青磁片・五輪塔（火輪） 遺跡の特徴：近世の水田

浅間山南麓の第一軽石流に覆われた塚原泥流を基盤とする緩斜面台地の末端、標高690mを測る台地上に位置する。遺跡の西3kmには千曲川が北流し、南1.7kmには湯川が西流する。この付近には塚原泥流の残した高さ数メートルの墳丘を思わせる、い

わゆる「泥流丘」が点在する。本遺跡から東に約70mの地点を佐久市教育委員会が調査（濁り遺跡：平成4年）した結果、



第6図 常田居屋敷遺跡全景



第7図 水田遺構

平安期以降の水田3面を確認している。

本遺跡で検出された遺構は近世以降と思われる水田遺構で、数条の畦畔により区画されておりおよそ5区画分の水田を検出した。水田面は、本遺跡の東約400mを流れる濁川の氾濫によりもたらされたものと考えられる、ややきめの粗い洪水砂に覆われた状態で確認された。ただし、濁川から離れるほど砂の量が減るため、西端の調査区では水田面を確認することができなかった。なお遺物は耕土・鉄床より下層で出土したことから考え、検出された水田の時期は中世（戦国期）を遡ることはない。

7 まえだ 前田遺跡

所在地：佐久市大字塚原字上塚原1652-2番地ほか 調査担当者：藤原 直人

調査期間：平成6年7月5日～8月4日 白鳥喜一郎

調査面積：6,200㎡ 征矢野安政

遺跡の立地：浅間山南麓末端部の台地上

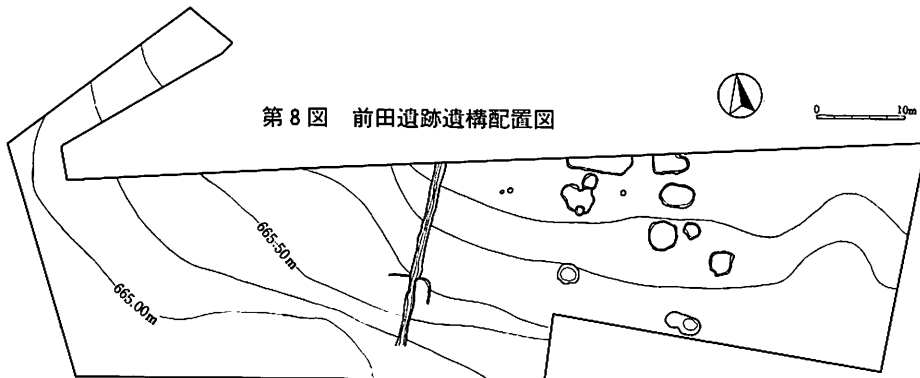
主な検出遺構：古墳時代初頭の竪穴住居跡1軒・土坑2基、中世の竪穴状遺構5基・土坑5基
溝状遺構1基

主な出土遺物：内耳土器・古銭（宋銭）・鞆の羽口・鉄滓・陶器など

佐久市北部の西端で浅科村との村境近くに当たり、浅間山南麓の第一軽石流に覆われた塚原泥流を基盤とする緩斜面の末端、標高690mの台地上に位置する。遺跡の西1.2kmには千曲川が北流し、南1.5kmには湯川が西流する。この付近には前項の常田居屋敷遺跡群と同様に、いわゆる「泥流丘」が点在する。遺跡の北約400mの地点には藤塚古墳群がある。

中世では遺構の密度は希薄であるが竪穴状の遺構と土坑が確認された。5号土坑は鉄滓・鞆の羽口や若干の焼土などが出土し、鍛冶跡の存在が考えられる。7号土坑は銭を蓄えるため（いわゆる備蓄銭）の土坑で、開元通宝（唐）・皇宋通宝（北宋）・紹熙元宝（南宋）・永樂通宝（明）など24種類150枚（北宋銭が主体）が出土した。2号土坑は北宋銭4枚と共に人骨片が検出され中世の土壙墓と考えられる。

古墳時代前期の2号住居跡では上部をかなり削平され、竪穴住居跡の全貌はつかめなかった。6号土坑は焼土を伴う土器を用いた埋甕炉であるが、床面まで削平され柱穴が認められないものの竪穴住居跡の炉であった可能性が高い。



8 ^{すなほら} 砂原遺跡

所在地：北佐久郡浅科村大字塩名田字砂原397番地ほか 調査担当者：宇賀神誠司
 調査期間：平成6年4月11日～8月25日，11月16日～12月2日 山岡 一英
 調査面積：7,300㎡ 尾台 昇

遺跡の立地：千曲川右岸の低位段丘

時代と時期：縄文時代中期，古墳時代前期～平安時代前期，近世

遺跡の特徴：縄文時代中期の生業域，古墳時代～平安時代の集落，平安時代の耕作地

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	その他
縄文					遺物包含層
古墳～平安		42	6	約60	水田・畑跡
近世					墓跡5基

土器：縄文時代中期の土器，古墳時代～平安時代の土師器・須恵器
 石器：打製石斧，磨石，砥石，コモ編み石
 石・土・金属製品：白玉，土錘，刀子，銭貨

東南北の三方を急崖によって囲まれた，千曲川東岸の低位段丘上に営まれた遺跡である。広く「コ」の字状に広がるこの段丘面は，佐久平の中央部を貫流する濁川が東縁を流下し，またおそらくここでは古東山道とルートを共にするであろう中山道が南端部を通過するなど，住環境にも，農業経営にも適した地といえる。新幹線は段丘の北辺を通過することとなり，総延長約900mに及ぶ調査を実施した。

広く平らな低位段丘内における砂原地籍部分は，文字通り砂の荒原と化した土地である。ふたつの河川に挟まれ，しかも最も低平な土地柄であるために，洪水被害に見舞われやすい場所であったのだろう。今回の調査によって，一帯を埋め尽くした砂の由来は，ある一時の千曲川の大洪水がもたらしたものであることが判明したのである。最も厚いところでは，2mを超える純粋砂の堆積がみられ，想像を絶する大水害であったことが窺い知れる。

しかしながらこの大被害は，皮肉にも当時の遺構を保存よくバックする最適の条件であり，砂を退けることによって災害直前の様子をまざまざとみることができた。

砂の下には，調査区全面に平安時代の農村の姿が極めて良好に残されていた。濁川近くの低地には，緩傾斜をうまく利用した小区画水田が営まれ，わずか小高い部分には高くしかも幅広に畝立てされた畑が耕作されていた。しかも，わずか1軒だが，畑地の合間を縫うようにして竪穴住居が構えられていた。その他，大畦畔に挟まれた用水路や，単純に言えば畦道，その傍らを流れる小川までもが確認でき，まさに当時の情景そのままである。

ここで確認された竪穴住居跡は，平安時代前期，凡そ9世紀代後半の所産である。竪穴の周りには，幅2m前後，高さ約20cmの周堤帯が巡らされ，長野県初の周堤帯付住居跡の発見ということで話題を呼んだ（口絵写真2参照）。住居内は洪水砂が充満していたが，わずか壁際のみ壁崩落土が堆積しており，また一般に執り行われる住居移転に際するカマドの意図的破壊，および土器の充墳も認められ，被災する以前に廃棄された住居と考えられる。しかし，覆土の堆積状況からして，被災直前の廃棄であったことは明らかであり，洪水被害に遇った時期をお

ぼろげながら察することが可能であろう。また、水田には、牛耕を指し示す牛の足跡が残されており、規則的な歩行痕の列を印す箇所も少なくなかった。田植え直前の代掻の季節が想定できようか。当時の被災記録としては、仁和4年、西暦888年の5月8日に起きた、信濃国の6郡を流没させた「仁和の水害」が著名だが、時期・季節ともにこれと凡そ合致している点、興味深いものがある。



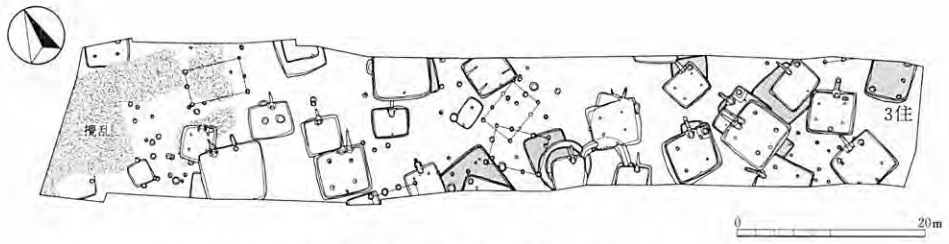
第9図 洪水砂層直下の畑跡

自然堤防的な高まりをみせる調査区西端では、平安時代の耕地直下から古墳時代前期初頭～中葉・古墳時代後期末・平安時代前期の各段階の集落が認められた(第10図)。古墳時代前期では、在来の土器群を保有する集落に混じり、胎土こそ違うが伊勢湾沿岸域の土器と瓜二つなものを集中的に遺存させる住居跡が存在し(第12図)、彼の地からの移住者がここに居を構えたことを裏付ける貴重な資料となった。なお、北陸地方東北部の土器も何点か確認されている。古墳時代後期末の集落は、律令初期に行われた集落の再編および土地の再開発により発生したものであろうが、住居軒数が際立って多いながらも、極めて短期的で、しかも佐久平の高燥地帯に突如現れた律令期の大集落群に一步先行するものであり、当時の政治情勢を考える上で好材料が得られた。また、平安時代初期の集落については、洪水砂で覆われた耕地の耕作期間をかなりのところまで限定することを可能にさせた点、重要な発見といえる。

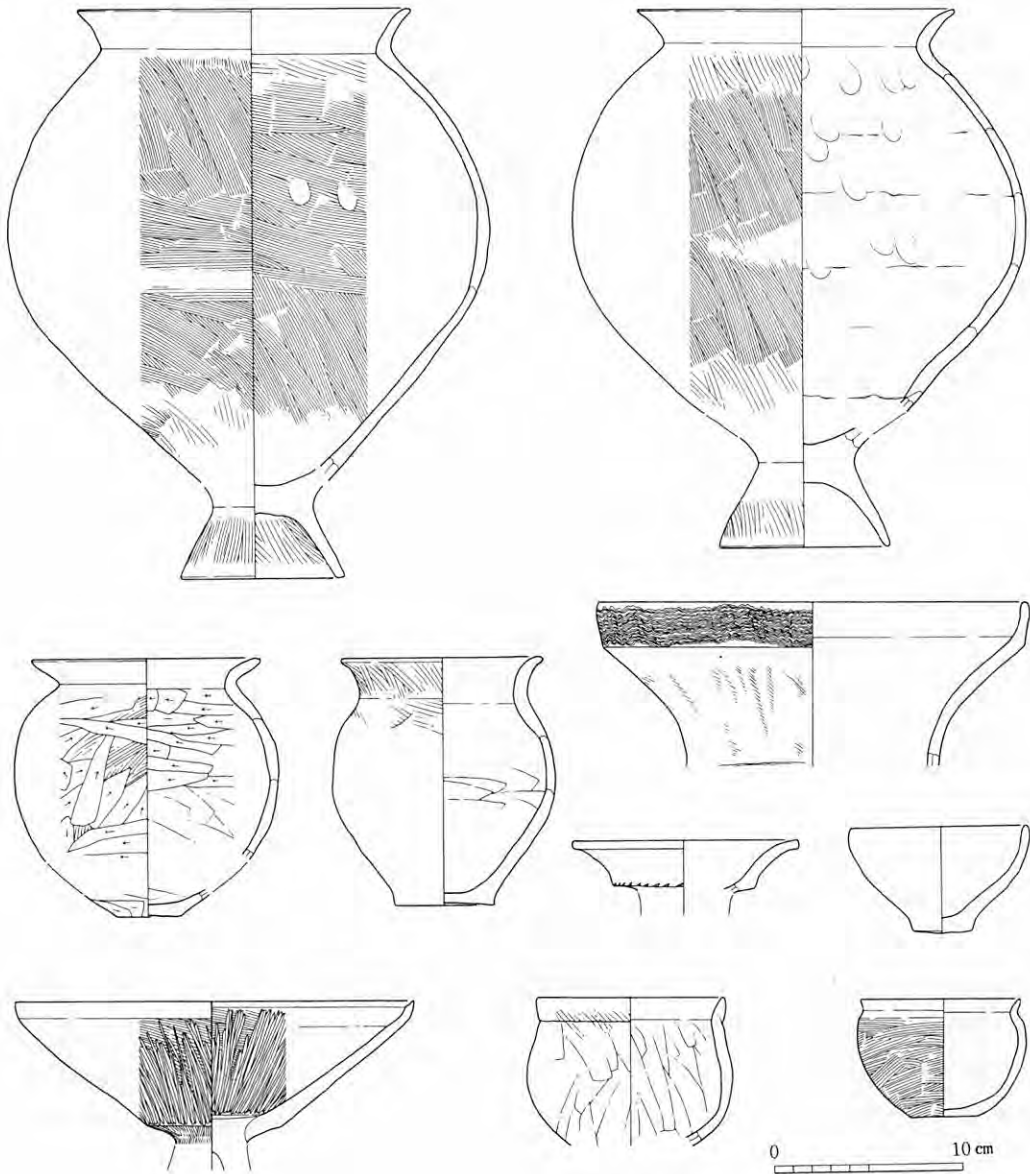
調査区中央からは、縄文時代中期の遺物包含層が認められた。千曲川が河床を下げて、この地がようやく陸地化した時のものである。遺物量は比較的豊富であったが、石器組成は磨石類に偏り、打製石斧の製作跡も確認されている。居住空間とは異なる生業活動の場であったことが窺える。



第10図 洪水砂層に埋もれた平安時代の農村



第11図 西端部の古代集落（アミは古墳時代前期）（1：800）



第12図 3号住居跡出土土器実測図（1：4）

9 なかだいら たなかじま
中平・田中島遺跡

所在地：北佐久郡浅科村大字御馬寄字中平1247番地ほか

調査担当者：宇賀神誠司

調査期間：平成6年5月25日～9月28日

尾台 昇

調査面積：6,200㎡

遺跡の立地：千曲川左岸の第2・第3段丘

時代と時期：縄文時代前期～中期，古墳時代前期，平安時代前期

遺跡の特徴：縄文時代前期～中期の遺物包含層，古墳時代前期と平安時代前期の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居跡	土坑	その他
縄文			2	遺物包含層
古墳		6	13	方形周溝墓4基
平安		5		

土器：縄文時代前期～中期の土器，古墳時代前期の土師器，平安時代前期の土師器・須恵器

石器：磨・打製石斧，磨石，石鏃，石皿，ハチの渠石
砥石

千曲川西岸の河岸段丘上に営まれた遺跡であり，位置的には前項の砂原遺跡の対岸に当たる。当地点周辺は，千曲川の段階的な浸食が幾重にも及んでおり，四つの段丘が形成されている。中平・田中島遺跡は，それらの内の第2・第3段丘上に営まれたものである。なお，地元浅科村の遺跡地図では第2段丘面が中平遺跡，第3段丘面が田中島遺跡とそれぞれ別個に登録されているが，ここではこれを一括している。

昨年度行った，最も千曲川寄りの第2段丘東端部，1,000㎡程の調査に引き続いての調査である。前回の調査では，古墳時代前期初頭と平安時代の竪穴住居跡がそれぞれ1軒確認されている。本年度は，第2段丘の奥まった部分と第3段丘面が調査の対象となった。

調査の結果，第2段丘面では，新たに平安時代の竪穴住居跡1軒と，第3段丘沿いに厚く堆積する黒色土中から縄文時代前期～中期の遺物包含層を確認した。また第3段丘面では，縄文時代中期の土坑・古墳時代前期初頭の竪穴住居跡5軒・同方形周溝墓4基・平安時代前期の竪穴住居跡3軒その他がみついている。なお，第3段丘面の外縁に位置する遺構は，後世における土砂流出のために半壊してしまったものも認められ，完全に失われた遺構も少なくないのではないかと考えられる。

第2段丘に認められた縄文時代の遺物包含層は，中期末葉がその大半を占め，それと混在するような状態で中期中葉，あるいは前期末葉のものがわずかに拾えるといった内容であった。層厚・遺物量ともに第3段丘側へ寄るにしたがい顕著となるため，上段から放り込まれた，もしくは流入してきたと考えるのが自然であろう。含まれる遺物量からすれば相当規模の該期集落の存在が第3段丘面に予想されるが，土坑数基を確認したにとどまった。現段階では調査対象範囲の外にそれを求めるしかないが，先のことからすると，本来存在した第3段丘縁辺の住居跡や包含層そのものが流出した結果とも取れる。その判断には，さらに広域に及ぶ発掘調査を必要としよう。

兩段丘面に営まれた古墳時代前期初頭の集落は、極めて単発的で、古墳時代の幕開けと同時に成立したものである。周辺域では初の発見例であり、これまでこうしたムラの存在をこの地に予想していなかった。ところが、前項で紹介した砂原遺跡でも同様の集落が認められ、古東山道がこの傍らを通過していたと目されるこの地、そして佐久の平野部に差し掛かろうとする直前のこの場所にこうしたムラが突如出現していたことが判明したのである。伊

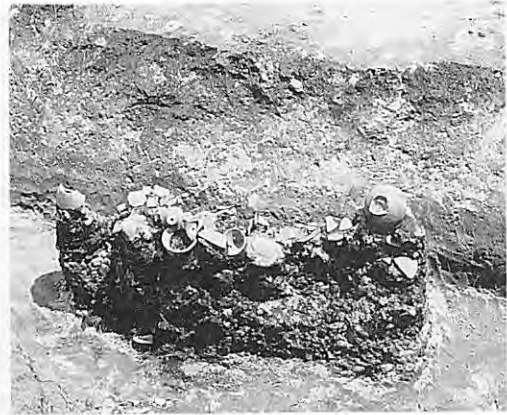


第13図 3号住居跡

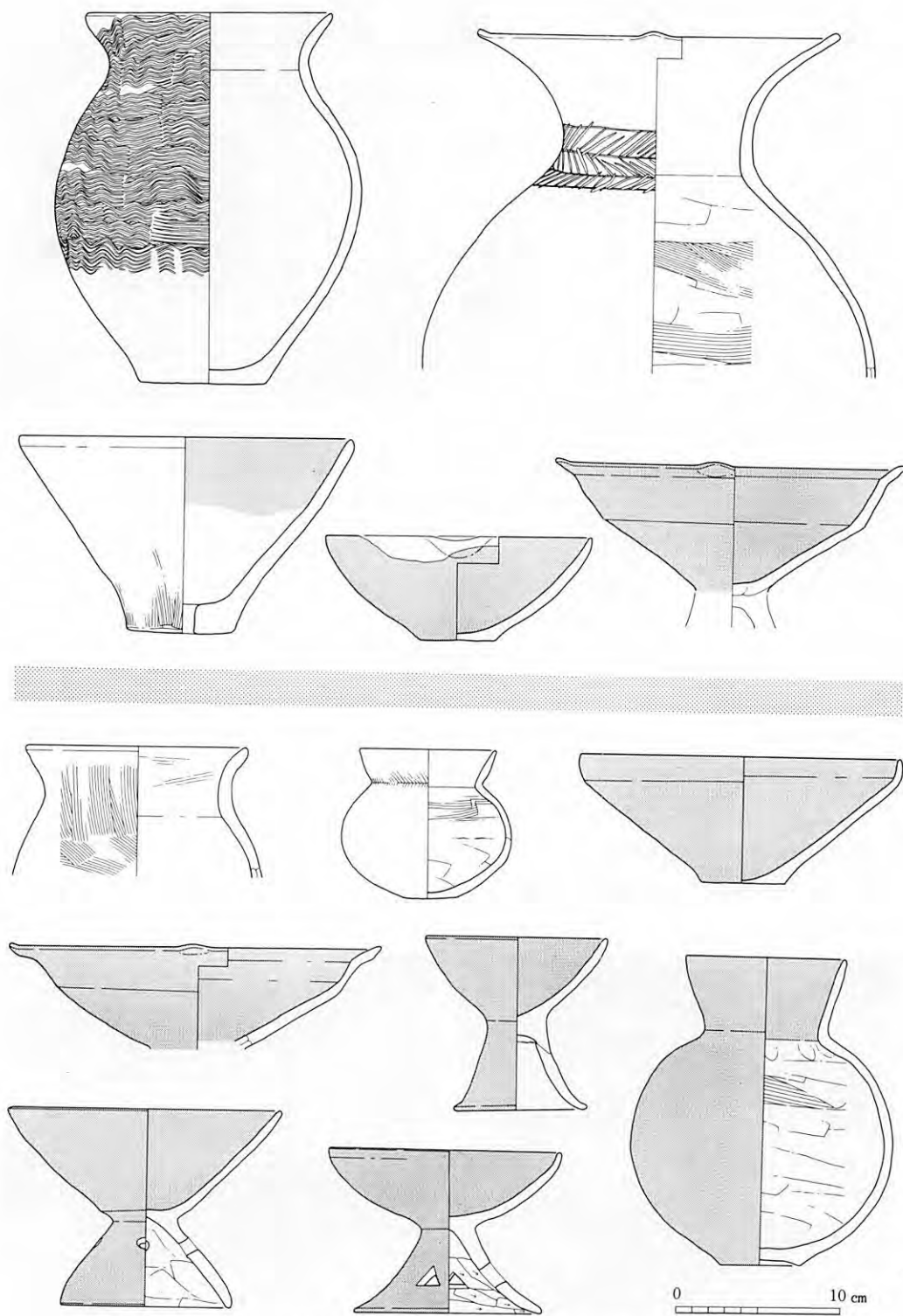
勢湾沿岸域とのつながりが色濃い砂原遺跡の状況とあわせて、佐久地方が弥生時代から古墳時代へと転換していく様を考える上で貴重な資料を提供することになった。

方形周溝墓群は、供献された土器群からすると、これも比較的短期の内に形成された公算が大きい。ただし、同期の住居跡を壊して造られたケースが2か所で確認されたため、既存の集落を第2あるいは第1段丘に移動させた後の所産と考えられる。いずれにしても集落と一体となるもので、該期造墓活動研究にとっては重要な資料となるだろう。

なお、重複関係をもつ3号住居跡(古)と1号方形周溝墓(新)からは、それぞれ良好な一括資料が得られている(第15図)。3号住居跡は床面一括、1号方形周溝墓は覆土上層のある1か所に集中していたものである。異なる性格の遺構であるから、単純に比較することは危険だが、微差ながらも型式において新旧関係を明確に表現しているといえよう。ほかの遺構出土土器やさらに砂原遺跡を加えれば、これまで佐久地方においては不鮮明であった前期初頭から前半の土器変遷の実体が、地域的にも時間的にもかなりマイクロなところまで推察し得る資料となるに違いない。



第14図 1号方形周溝墓と周溝内土器出土状態



第15图 3号住居跡出土土器(上)・1号方形周溝墓出土土器(下)実測図(1:4)

(2) 上田調査事務所

発掘調査の概要

調査遺跡：13遺跡 83,140㎡

調査面積：上信越自動車道関係：東部町東原地遺跡（900㎡）・中田遺跡（6,400㎡）・真行寺遺跡（10,700㎡）・細田遺跡（1,000㎡）・森下遺跡（34,800㎡）・山の越遺跡（1,700㎡）・上田市大日ノ木遺跡（2,900㎡）・染谷台条里遺跡（800㎡）・宮平遺跡（13,000㎡）・坂城町山崎遺跡（650㎡）・東平古墳群（1,000㎡）

北陸新幹線関係：上田市国分寺周辺遺跡群（8,590㎡）・上田城跡（700㎡）

調査期間 平成6年4月11日～平成7年1月31日

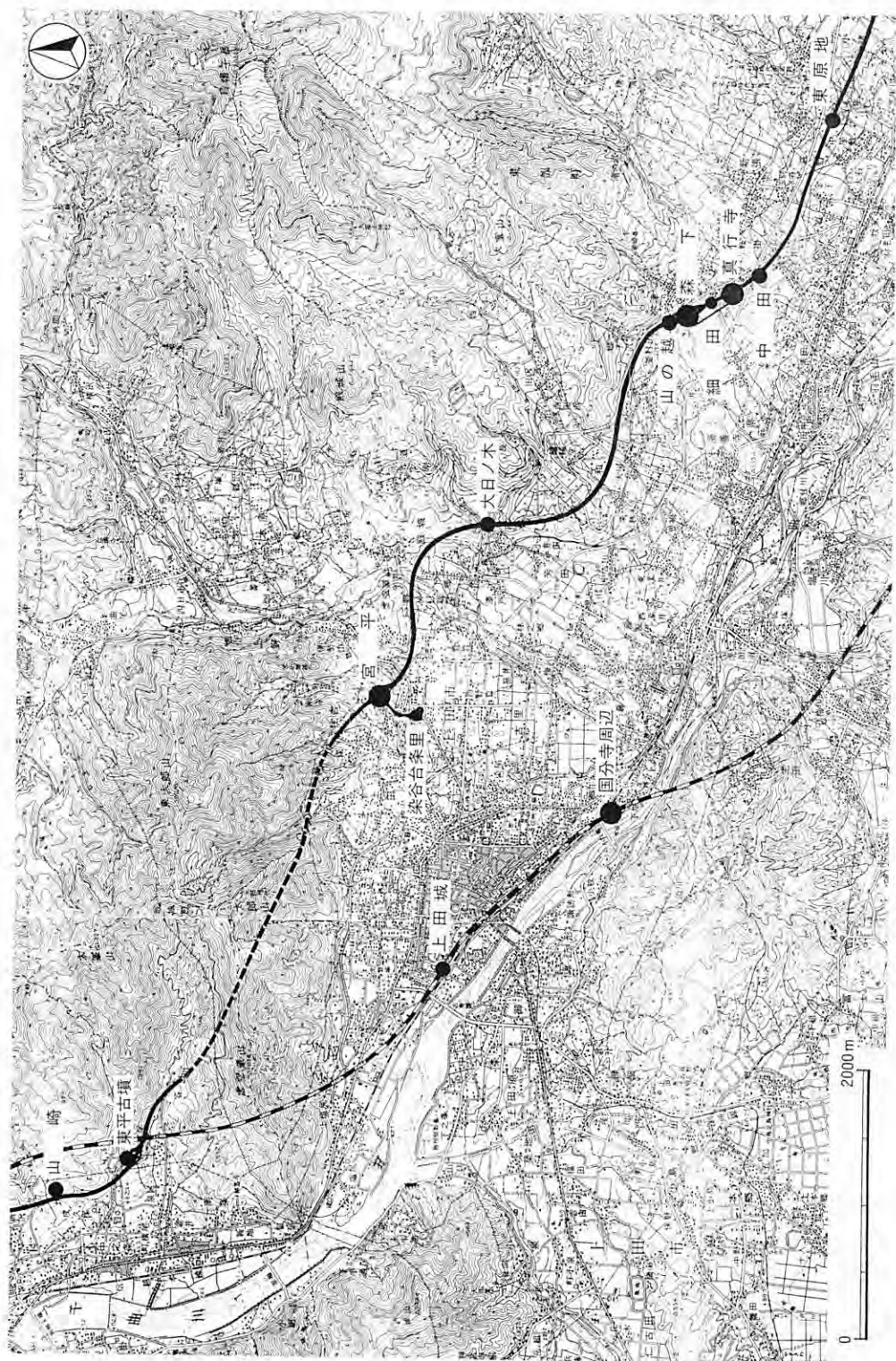
今年度は4月当初から上信越自動車道関係の各遺跡で調査に入り、秋以降の後半に北陸新幹線関係の国分寺周辺遺跡群の調査を行った。国分寺周辺遺跡群は用地買収の遅れ・工事工程の変更などがあり計画通りの調査を行えず、又、住居跡等の遺構密度が非常に高いという状況の中、平成7年1月末に調査を終了した。

上信越自動車道関係であるが、東部町の各遺跡は祢津地区の複合扇状地に立地する。中田遺跡は所沢川左岸に形成された古代の小規模集落で、鍛冶関連の施設や遺物を有する住居跡が数軒あり、集落内における生業体制が示唆される。真行寺遺跡は昨年調査した桜畑遺跡や山の越遺跡と状況が類似し、縄文時代から中世に至る各時期の遺構が発見された。特に中世関係は大小二種類の土坑群がまとまって検出され、覆土や出土遺物などから土壙墓に対応しそうである。一方近接する森下遺跡では明確な中世の遺構がなく、遺跡の在り方など今後の検討課題である。

上田市大日ノ木遺跡は高位段丘に立地する弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした集落で、昨年と合わせ20軒程の住居跡が検出された。焼失家屋の床面や埋没流路などから出土した多くの土器群は上小地域の当該期を研究するうえで基本資料となろう。宮平遺跡も継続調査で今年は遺跡主要部が調査された。竪穴住居と掘立柱建物からなる古墳時代後期を主体とした集落が検出され、完形の円面硯が出土したことで注目された。

坂城町東平古墳群は昨年の2基に続き残りの1基（砥沢古墳）が調査された。直径15m程の円墳で主体部は盗掘にあったが、葺石を施し山側に周溝をめぐらした墳丘の状況が明らかとなった。遺物は少なく時期決定が困難であるが、昨年の2基の古墳に相前後して構築された古墳といえよう。

北陸新幹線関係では国分寺周辺遺跡群が調査された。隣接する市道バイパスも合わせた調査で上田市職員の派遣を受け共同調査となった。遺跡は信濃国分寺跡の西方500m程にあり、一段下位の段丘に立地する。遺跡は弥生時代後期から平安時代にかけての密度の高い集落跡で、200軒弱の住居跡や掘立柱建物跡などが検出された。その主体は国分寺建立以前の古墳時代後期である。平安時代では国分寺瓦をカマド構築材に転用した住居跡もある。上田市内3例目となる和銅開珎も出土した。信濃国分寺跡周辺での大規模調査は今回が初めてで、国分寺建立以前や衰退期の一端が明らかになった。今後の整理作業を通じてより詳細な検討が加えられよう。



地図2 上田調査事務所関係調査遺跡 (1 : 100 000)

上信越自動車道関連

1 ^{なかだ} 中田遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字中田361

調査担当者：柳澤 亮

調査期間：平成6年8月18日～11月14日

寺沢政俊

調査面積：6,400m²

藤森俊彦

遺跡の立地：千曲川右岸，烏帽子岳南麓の所沢川左岸の扇状地 標高638～645m

時代と時期：縄文時代，平安時代

遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	埋没 河川	沼地
平安時代	12	1	44	1	1
その他			6		

土器：縄文時代土器（前・中期），平安時代の土師器（墨書・刻書土器など）・須恵器・灰釉陶器

石器：槍先形尖頭器，石鏃，打製石斧，敲石，擦石

石製品：軽石製紡錘車

金属製品：鉄斧，刀子，鍛造釘，鉄金具，銭貨，銅金具

鍛冶関連遺物：鉄塊系遺物，鉄滓，羽口，砥石，鍛造剥片，ガラス質溶解物

その他：鹿角，鹿下顎骨（平安住居一括出土）など

遺跡は烏帽子岳南麓の緩斜面に立地する。水田形成のために旧地形は改変され，削平により検出された遺構も大半がその形状を壊されている。

縄文時代は明確な遺構を確認できない。ただ埋没河川の覆土や沼地の粘性土，遺物包含層から，石器類，土器類が出土している。

確認された住居跡はいずれも平安時代後半期である。そのうちSB01は小鍛冶に属する工房跡と考えられる。6.4×5.0mのやや隅丸の長方形プランで，南隅に石組みカマドがある。

鍛冶炉は北壁際中央で確認され，長径1.2mの不整楕円形で浅く皿状に窪む。その肩の一部には厚さ6cm程の粘土が貼られている。炉は全体に赤く焼けて内部の炭・焼土層からは鍛冶剥片が検出されている。

また，鍛冶炉周囲の床面には多数の土坑，ピットが密集している。南に隣接する土坑からは炭や焼土に混じって，碗形滓，細かく割られた鉄滓，ガラス質溶解物や粘土材等の鍛冶関連の遺物が出土している。西側に並ぶ径1m程の土坑2基は，焼け痕のある角礫や土器片が捨てられた状態で出土しているが，その底面は堅く敲き締められていて，廃棄坑としての利用以前に別の機能を持つ可能性を残している。

この他にも，鍛冶炉と考えられる施設を持つ住居跡が3軒，鍛冶剥片を検出する土坑を持つ住居跡が1軒あり，鍛冶業に関わり深い集団の存在が想起される。



第16図 中田遺跡全景

2 しんぎょうじ 真行寺遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字元会下1095ほか

調査担当者 川崎 保

調査期間：平成6年5月9日～8月31日

井口 章

調査面積：10,700㎡

五十嵐敏秀

遺跡の立地：求女沢川と所沢川によって形成された複合扇状地

遺跡の特徴：なだらかな尾根に広がる縄文・古墳・古代の集落跡，中世の火葬墓，土壙墓群

主な検出遺構

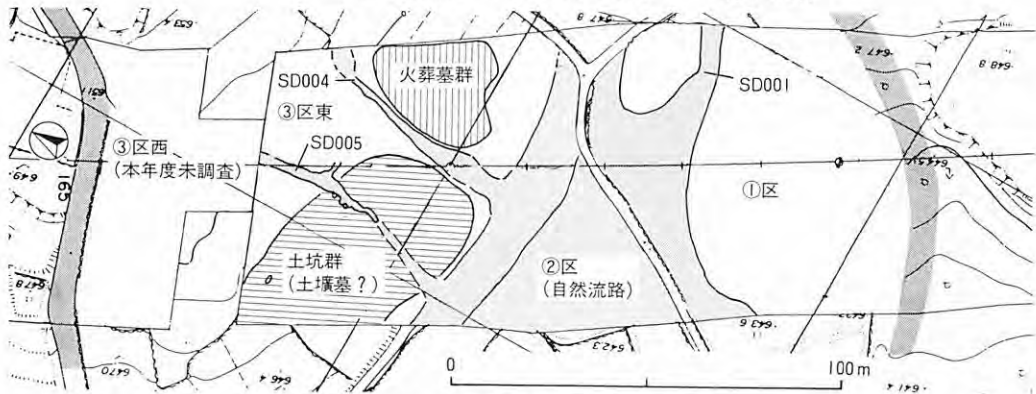
主な出土遺物

遺構 時期	竪穴式 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑
縄文	3	0	7
古墳～古代	21	3	約 400
中世		2	

土器：縄文時代前期土器，古墳時代～平安時代土師器・須恵器・黒色土器，中近世陶磁器

石器：石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，擦石，凹石，台石，石鉢，五輪塔，砥石

金属製品：刀子，釘，銅銭 骨：人骨



第17図 真行寺遺跡調査範囲と地区 (1:2,000)

遺跡は，昭和43年旧菅平有料道路建設に伴う調査が高速道建設予定地北東側（元会下地籍）で行われた。『桜畑等埋蔵文化財緊急調査報告書』（長野県1968）によると遺構は検出されなかったが，土師器・内耳土器・銅銭などが出土し，付近にこれら遺物に対応する遺構が存在する可能性が指摘されている。

また，平成3年度の踏査および試掘調査では土器や石器等の遺物が採集され，遺物包含層や遺構が求女沢川左岸の緩やかな尾根上に広がっていることが想定されたので，第17図のように地区を設定し面的な調査を行った。



第18図 S K 250 土器出土状況

調査の概要 縄文時代・古墳時代・古代の竪穴住居跡を中心とした集落跡と中世の墓壙群が検出された。以下時代順に概観したい。

縄文時代 ①区から前期中葉の長方形の竪穴住居跡が1軒，③区から前期後葉の略円形の竪穴住居跡が1軒検出されている。また前期末の略完形の土器がSK 250より出土している（第18・19図）。

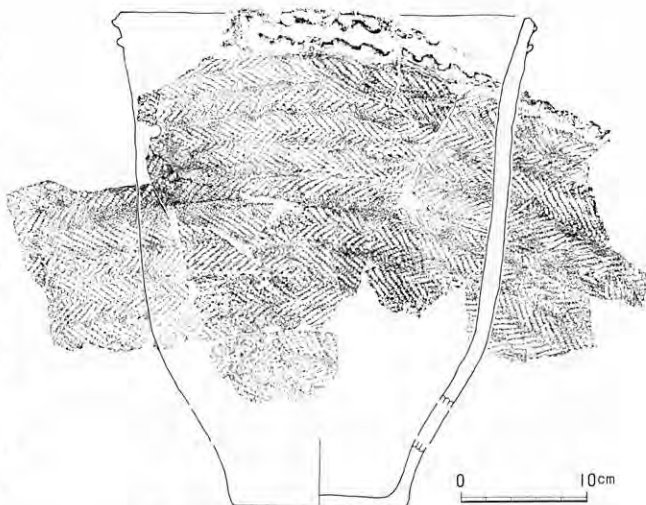
古墳時代 ①区から古墳時代中期の隅丸方形の竪穴住居跡が4軒検出されている。そのうちのSB005は西側奥に緑石を有する地床炉があり，南隅の住居内土坑からは金雲母が入った灰白色の良質な粘土と壺が出土している（第20図）。

古代 竪穴住居跡が16軒検出されている。出土遺物の詳細な検討がなされていないが，③区のものは大半が平安時代のものと思われる。SB0 25からは墨書土器が出土している。

中世 ①区は土坑のいくつかと掘立柱建物跡が該期のもと考えられるが，遺物はあまり多くない。③区では中央を切るように北から南に2条（SD004・005）の流路が平行して走り，播鉢などの中世陶器を多く含んでいる。

この流路の東側から径30～50cmの略円形の小土坑群が約100基発見された。ほとんどの土坑内から炭・骨片・焼土が検出され，なかには銅銭（北宋銭）（第21図），青磁片，土師皿などを伴うものがあることから中世の火葬墓群と考えられる。

また，流路の西側には1～2m内外の略楕円形もしくは長方形の土坑群が検出された。そのうちの1基には人骨が埋葬されていることや，これらの土坑群も土師皿や陶磁器片を含むところから中世の土壙墓群と思われる。



第19図 S K 250 出土土器



第20図 S B 005 内土坑土器出土状況

銭貨名	枚数	出土遺構	銭貨名	枚数	出土遺構
開元通宝	4	SK122 (1) SK069 (1) SD004 (2)	熙寧元宝	8	SK230 (2) SD004 (2)
太平通宝	2		元祐通宝	11	SK230 (1) SK232 (3) SK252 (1) SK260 (1) SD004 (1) SD005 (1)
淳化元宝	3	SK232 (1) SK069 (1)	元祐通宝	7	SK230 (2) SK232 (2) SD005 (1) SB002 (1)
至道元宝	2	SK173 (1) SK230 (1)	紹聖元宝	3	SD004 (1)
景德元宝	2	ST004 (1)	聖宋通宝	1	SD004 (1)
祥符元宝	1	SD004 (1)	政和通宝	3	SD004 (1)
天禧通宝	1	SD004 (1)	宣和通宝	1	SK222 (1)
天聖元宝	2	SB002 (1)	淳熙元宝	1	
景祐元宝	2		永樂通宝	4	
皇宋通宝	6	SK200 (1) SK232 (1) SD004 (2) SD005 (1)	不明	9	SK163 (1) SK230 (1) SK232 (1) SD004 (1)
至和元宝	2	SD005 (1)			
嘉祐元宝	4	SK083 (1) SK232 (1) SD004 (1)			
治平元宝	1	SK275 (1)	合計	77	(48)

() 内は遺構内出土枚数

第21図 真行寺遺跡出土銅銭一覧

3 もりした
森下遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字古大日2064ほか

調査担当者：川崎 保 井口 章 五十嵐敏秀 若林 卓 西村政和 和田 進

調査期間：平成6年4月20日～5月18日，6月13日～10月7日，12月7日

調査面積：34,800㎡

遺跡の立地：大室山西南麓の求女沢川と大星川に挟まれた複合扇状地 標高670～640m

遺跡の特徴：縄文時代，古墳時代および古代の集落跡

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴住居跡	竪穴状遺構	溝	土坑	小穴
縄文時代		6	1		47	83
古墳時代		3				
古代		14	1	1		
中世以降			1			

主な出土遺物

土器：縄文土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，ミニチュア土器，男根形土製品

石器：石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，凹石，擦石，敲石，打製石斧，石皿，五輪塔

金属製品：宋銭，鉄釘

調査地は北東から南西に下る緩傾斜面をなし，水田として利用されていた。東に細田・桜畑遺跡が，西に山の越遺跡が隣接して存在する。調査区内には埋没した自然流路が幾筋か走っており，遺構はこの流路に切られる尾根状部で主に検出された。時代・時期によって分布に偏りがあるものの，総じて集中する傾向はみられない。

縄文時代は，前期後葉の竪穴住居跡2軒，中期中～後葉の竪穴住居跡4軒のほか，竪穴状遺構1基，土坑10基ほどがみつまっている。後世の削平により大きく損なわれているが前期の住居は方形プラン，中期の住居は円ないし楕円形プランのようである。

古墳時代の遺構は中期の竪穴住居跡3軒が検出された。うち一軒は焼失住居で，間仕切りの溝・畝を伴う住居もある。規模は一辺5m強である。

古代の竪穴住居跡14軒は調査区全域に割合まんべんなく分布する。一辺3.6m前後のものが主流で，古墳時代に比べ小形になっている。カマドは東壁あるいは北壁に付設されている。

なお，確実な中世の遺構は検出されず，遺物も少ない。桜畑・山の越遺跡で多くの中世遺構が発見されているのに比べ，これが森下遺跡本来の在り方だとすれば，興味深い状況である。



第22図 19号住居跡



第23図 19号住居跡遺物出土状況

4 ^{ひがしほらち}東原地遺跡

所在地：小県郡東部町滋野字唐沢3263ほか

調査担当者：廣瀬 昭弘

調査期間：平成6年11月7日～11月11日

調査面積：900㎡

遺跡の立地：大石沢川によって形成された扇状地

昨年未調査範囲に幅9m長さ20～30mの調査区を4ヶ所設定し遺構・遺物の確認を行った。表土・盛土層以下は二次堆積のローム層となり、遺物包含層はなく遺構・遺物も発見されなかった。

5 ^{ほそだ}細田遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字細田1846ほか

調査担当者：川崎 保

調査期間：平成6年4月11日～4月27日

井口 章

調査面積：1,000㎡

五十嵐敏秀

遺跡の立地：大室山南麓，求女沢川右岸の扇状地

主な出土遺物：縄文土器，土師器

昨年度調査範囲の東側の残件部分を本年度調査した。求女沢川よりわずかな部分に遺物包含層は認められたが、遺構は検出できなかった。

6 ^{やま こし}山の越遺跡

所在地：小県郡東部町祢津字町屋3084ほか

調査担当者：川崎 保

調査期間：平成6年4月11日～5月11日

井口 章

調査面積：1,700㎡

五十嵐敏秀

遺跡の立地：大室山南麓，大星川右岸の扇状地

検出遺構：竪穴住居跡（平安時代）1軒，土坑5基

主な出土遺物：縄文土器，土師器，黒色土器，須恵器

昨年度調査範囲の北東隅の残件部分を本年度調査した。遺構検出面は大星川よりかなり傾斜していて、川沿いに黒褐色のシルト混じりの礫（IV層）が厚く堆積し、その上に遺物包含層である暗褐色の粘土質シルト（III層）がのっていた。

調査範囲は大星川にそっていたため平坦な部分は比較的わずかしがなく、そこで平安時代の竪穴住居跡および、土坑が5基検出された。

7 おひのき 大日ノ木遺跡

所在地：上田市芳田字山田853ほか

調査担当者：柳澤 亮

調査期間：平成6年4月7日～8月25日，11月1日～11月25日

寺沢政俊

調査面積：2,900㎡

藤森俊彦

遺跡の立地：千曲川支流行沢川と瀬沢川に挟まれた扇状地の緩斜面 標高639～646m

時代と時期：縄文時代晩期，弥生時代後期～古墳時代前期，古墳時代後期，奈良・平安時代

遺跡の特徴：弥生時代～平安時代の複合集落

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	焼土跡	埋没 河川
縄文晩期	1 (1)				
弥生後期～ 古墳前期	14 (10)	3 (2)	66 (27)	5	2
古墳後期	2 (2)				
奈良・平安	12 (7)				

主な出土遺物

土器：縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，
灰釉陶器，手捏土器

土製品：土偶，匙形土製品

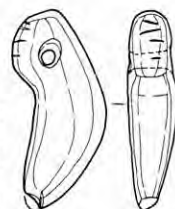
石器：石鏃，石匙，スクレイパー，石錐，石皿，
擦石，敲石，打製石斧，磨製石斧，砥石

石製品：石剣，勾玉，白玉

鉄・銅製品：銅鏃，銅鈴，銭貨，鍛造釘

その他：炭化米，炭化材

本遺跡は，殿城山南麓の扇状地に立地する複合集落である。地形の高まる西側には各時代の住居跡や掘立柱建物跡・土坑などが集中し，東側では主に縄文時代晩期と弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が多量に出土する埋没河川が確認されている。調査は平成5年度（第一次）から開始して，今年度は第二次・第三次の調査が行われた。なお，平成7年度をもって発掘調査は終了する。以下時代ごとに概要を記す。



第24図 滑石製勾玉

縄文時代 晩期氷Ⅰ式期の貼り床・焼土跡を持つ住居跡が1軒確認され，覆土から土器片と共に滑石製の勾玉（第24図）が出土している。この他に焼土跡5基も当該期の可能性を残す。遺物は主に埋没河川から出土し，晩期の氷Ⅰ式期を中心とした土器類や土偶・石器類がある。特に石鏃（黒曜石・チャート製）と黒曜石の剥片が多量に出土し目立つ。また，早期の押型文や絡糸体圧痕文土器も出土している。



第25図 SB112 遺物出土状況

弥生時代後期～古墳時代前期 住居跡が14軒発見され当遺跡の中心をなす時期である。住居跡は4本主柱の隅丸方形プランが典型であるが，隅丸長方形や方形プランも見られる。また，ベッド状遺構を持つ住居跡と大型住居跡が各1軒確認されている。

ベッド状遺構を持つ住居跡（SB112）は集落の中央に位置し，北壁両隅にベッド状の高まりが確認された。床面全体から20数個体の土器がほぼ完形のまま出土している（第25図）。それらの多くは箱清水式土器であるが東

海系のS字状口縁台付甕やひさご壺が伴出し興味深い。他に匙形土製品や手捏土器などの特殊遺物も含まれている。なお、この住居跡は焼失しており、多数の炭化材と共に、炭化米が出土している。

大型住居跡はベッド状遺構を持つ住居跡の南に位置する。南半分は古墳時代後期の住居跡に切られるものの、残存部分からその軸長は9mを測る。また主柱穴の他に壁と接する支柱穴が等間隔で配置され、周溝と間仕切りの溝も見つかっている。

地区東側の埋没河川では、最下層（砂利層）上の粘性黒褐色土層から、当該期の様々な器種の土器がほぼ原形を保つ状態で、多量に出土している（第26図）。その状況は、ある一定の時期に故意に投げ入れられた様子を示していると考えられる。

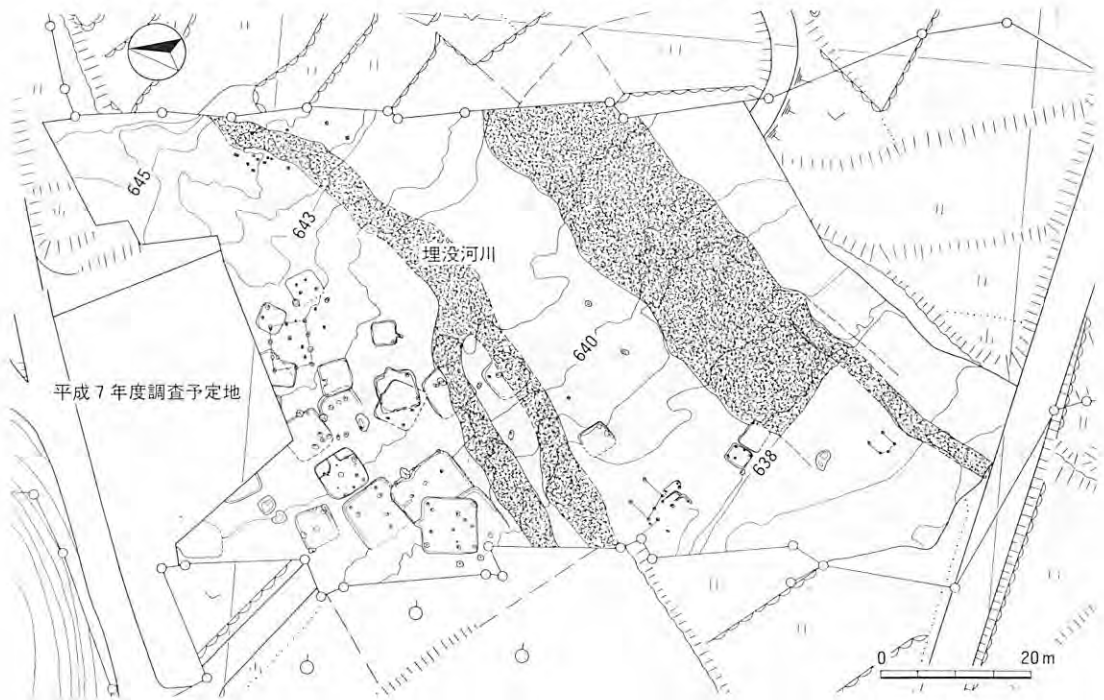


第26図 埋没河川

古墳時代後期 住居跡は2軒確認されている。遺存状況の良い1軒は、方形で北壁中央に石組みカマドを持つ。カマド周辺からは坏や甕と共に口縁部を欠く提瓶が出土している。また、床面から砂岩製の玉砥石が見つかり、玉造の工房跡である可能性を残している。

奈良時代・平安時代 この時期の住居跡は12軒である。そのうち、遺物などから奈良時代とされるものは2軒ある。平安時代の住居跡は耕作の影響を強く受けているが、主として北壁にカマドを持つ方形プランが中心であろう。

平成7年度は上田市豊里配水施設跡地の調査を行う。現在までの調査結果から、住居などの集中する集落域であることが予想され、その成果が期待される場所である。



第27図 大日ノ木遺跡全体図(1:1,000)

みやだいら
8 宮平遺跡

所在地：上田市住吉宇宮平965ほか
調査期間：平成6年4月11日～12月16日
調査面積：13,000㎡

調査担当者：町田勝則 柳澤秀一
田村 彬 豊田義幸
相澤秀樹

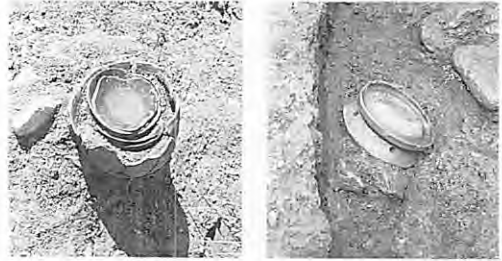
遺跡の立地：矢出沢川右岸，東南（千曲川）方向に発達した扇状地の頂部

時代と時期：縄文時代後期，古墳時代前期・後期，奈良時代，平安時代，鎌倉時代

遺跡の特徴：古墳時代後期後半から奈良時代前半にかけての集落遺跡。鎌倉時代の墓址。

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴 住居跡	竪穴状 遺構	掘立柱 建物跡	土坑 〔墓壇含む〕	溝跡
古墳前期			1			
古墳後期		65		70	1039	
奈良・平安						
中世～						3



(収納された環7枚)

(完全な円面硯)

第28図 遺物の出土状況

主な出土遺物

土器・土製品：縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，紡錘車，土製支脚

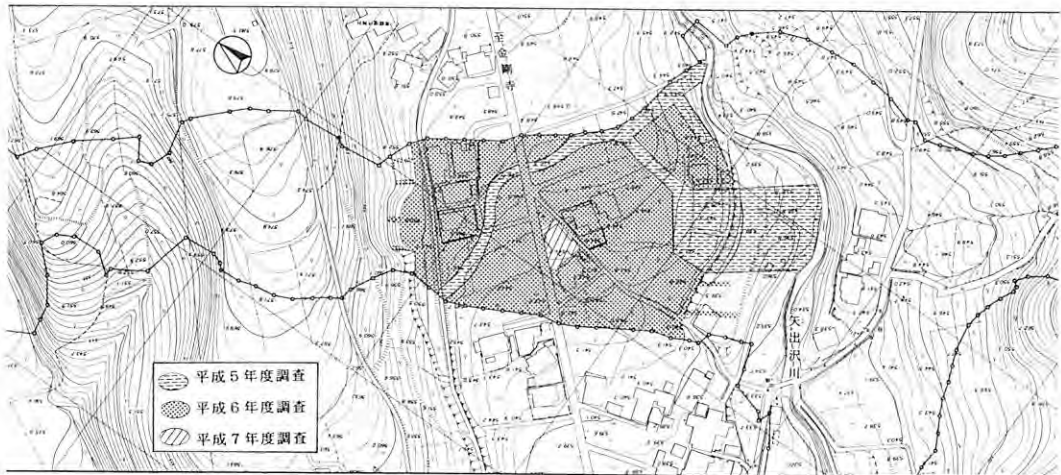
石器・石製品：石鏃，刃器，黒曜石片，紡錘車，砥石，編み物石，敲石，凹石

金属製品：革帯具（巡方・丸柄），銅製耳環，紡錘車軸，鉄斧，鉄鏝，刀子，銭貨，釘

その他：動物骨（古墳），人骨（中世），種子，ペンガラ（古墳）

調査の経過

平成5年6月，上信越自動車道上田インター予定地で遺跡が新たに発見され，7月，県教育委員会の試掘調査により，調査範囲が確認された。5年度は工事用道路部分2700㎡を調査し，今年度は遺跡主要部13,000㎡を調査，残り400㎡は平成7年度調査予定である。



第29図 宮平遺跡の調査範囲（1：4,000）



第30図 竪穴住居跡（古墳時代）



第31図 掘立柱建物跡（古墳時代）

調査概要

宮平遺跡は、古墳時代から平安時代にかけて営まれた集落である。遺跡の主たる時期は古墳時代後期後半（長野県史古墳Ⅴ期）から奈良時代前半（同奈良Ⅰ期）にあたる。

出土遺物から遺跡の概要を列記すると以下ようになる。

遺跡初源期の資料は、縄文時代後期中葉（加曾利B式期）の土器破片である。同時期の所産と考えられる黒曜石の石屑および石鏃の出土はあるが、遺構は検出されなかった。

つづく弥生時代後期終末（箱清水式期）から古墳時代前期（長野県史古墳Ⅰ期）にかけては甕形土器・小型器台の出土がある。住居の認定には根拠を欠くが、小竪穴状の遺構が矢出沢川に近い斜面低位部に1基確認できる。

古墳時代後期は宮平の地に集落が形成され、その規模を拡大した時期である。検出できた住居や建物跡の多くが該期に所属し、おおむね後期後半（県史古墳Ⅴ期）ないしは奈良時代前半（県史奈良Ⅰ期）にあたる。集落は矢出沢川よりの低位面から調査区中央の高位面に展開し、北西側に張り出す脊せ尾根端部まで広がる。大型住居1軒に2～3軒の通常規模の住居、それに建物2棟程度でひとつのまとまりをもつようである。これを集落構成単位とみなせば、およそ9つのグループが確認できる。

奈良時代は古墳後期集落との関連で捉えられる前半を除き、集落規模は縮小する。奈良時代第三から第四四半期にかけて、住居跡が数軒程度確認できるにとどまる。

平安時代は、それ以前の遺構ほど検出状況は良好ではない。奈良時代の住居確認面で重複例を認めたり、遺構に伴わない状態での遺物出土がある。5年度に発掘された緑釉陶器を出土した住居跡の存在や検出地区が調査区北端であることを考慮すれば、地域外に集落が展開している可能性が指摘できる。

戦国時代以降、明瞭な住居の痕跡は認められず、唐銭（乾元重寶）あるいはすり鉢を伴う土壙墓のみ数基確認できた。土壙墓はいずれも人頭大の礫を伴い、調査状況からして集礫を伴う土饅頭であった可能性が高い。一体埋葬の個人墓であるが、2基並列した例は家族墓の色彩が強い墓のようである。

以上、調査時の所見に基づき概要を述べたが、遺物の所属時期及び遺構の内容などについては今後の整理で明らかにしていきたい。



第32図 宮平遺跡

9 そめや だいじょうり 染谷台条里遺跡

所在地：上田市住吉字塚田541ほか

調査担当者：廣瀬 昭弘

調査期間：平成6年8月1日～11月24日

調査面積：800㎡

遺跡の立地：神川右岸の段丘面（染谷面）

調査位置は国道144号線西側で矢出沢川の支流に面している。トレンチを設定し土層観察により水田遺構の確認を行った。調査の結果、現水田面直下より灰・黄褐色の砂礫層や粘質土となり、水田土壌・水田に関する施設などは検出されず、遺物も出土しなかった。

10 やまざき 山崎遺跡

所在地：埴科郡坂城町中之条字山崎1671ほか

調査担当者：廣瀬 昭弘

調査期間：平成6年11月10日～11月11日

調査面積：650㎡

遺跡の立地：御堂川左岸の大峰山麓

平成4・5年度に実施した調査では、平安時代の住居跡1軒・土坑2基など僅かな遺構が検出されたに止まる。今回の調査地は宅地となっていた所で、浅い表土層下は茶褐色の砂礫層となり遺構・遺物は確認されなかった。

ひがしつづら とぎわ
11 東平古墳群（砥沢古墳）

所在地：埴科郡坂城町大字中之条字開畝2385

調査担当者：若林 卓

調査期間：平成6年4月11日～6月29日

和田 進

調査面積：1000m²

西村政和

遺跡の立地：千曲川東岸地域，大道山西麓末端の緩傾斜部

『坂城町誌』中巻（森嶋ほか1981）によれば，御堂川古墳群の5つの支群のうちの1つが東平支群である。今回，調査を行った古墳は，便宜的に，東平3号墳と仮称したが，本来，砥沢古墳として周知されているものである。墳頂の標高約499mを測る。南西方に100mほど離れて，5世紀中葉～後葉の築造と考えられる東平1・2号墳が存在していた（1993年に当センターが発掘調査を実施）。

本古墳は直径約15mの円墳である。傾斜地に構築されているため，山側（東側）での墳丘の高さは1.3m足らずだが，谷側では3.6mある。墳裾を取り巻いて山側では幅2m，深さ1mの周溝が廻り，谷側では溝に代わって幅2m程のテラス状平坦面が廻る。段築，埴輪はない。墳丘斜面には人頭大の角礫を用いた葺石が施されているが，盛土で築成した墳丘上半部のみには葺かれ，堅固な地山を削り出した下半部にはなかった可能性が大きい。

墳頂には盗掘坑が大きく開いており，主体部はほとんど失われている。僅かに残った南端部分から，幅1.4m，長さ3.5m以下，深さ0.8m以内の墓壙をもち，主軸を南北に取る竪穴系主体部がcaろうじて推定される。

遺物は盗掘の攪乱土層および流土中から土師器片90点ほどと鉄鏃4点が出土した。土師器はすべて小片で種類・器形の判明するものは少ないが，壺は含まれる。鉄鏃は長頸鏃である。

上述したように，遺物が寡少かつ状態不良であり，主体部構造も明らかでないため，本古墳の築造年代を決定するのは難しい。現在のところ，東平1・2号墳に後続する，5世紀後葉～6世紀初め頃を想定しておきたい。



第33図 砥沢古墳全景（上が北）

古墳以外の遺構は炭焼窯がある。古墳周溝外側の肩を切って構築したもので，奥行き3.5m，高さ2m以上，幅1.3m，焚口部幅0.5mを測る平面長方形の窯である。操業年代を特定することは難しいものの，中世以降に属する可能性が高い。また，この窯の東側に別の炭焼窯らしき遺構を検出したが，大部分に調査区外にかかるため，詳細を明らかにすることはできなかった。

なお，古墳に伴わない遺物として，打製石斧1点，古代～中世土器数点，鉄塊系遺物2点が出土した。

北陸新幹線関連

12 国分寺周辺遺跡群

所在地：上田市国分1994ほか 調査担当者：川崎保 井口章 五十嵐敏秀 尾見智志
 調査期間：平成6年9月1日～平成7年1月31日 豊田義幸 田村彬 和田進 若林卓 柳澤亮
 調査面積：8,590㎡ 寺沢政俊 相沢秀樹 町田勝則 柳澤秀一
 藤森俊彦 西村政和 廣瀬昭弘

遺跡の立地：千曲川右岸の最下位段丘（千曲川水系神川右岸の低位段丘？）

遺跡の特徴：河岸段丘上に広がる弥生後期・古墳・奈良・平安の集落跡

主な検出遺構

遺構 時代	竪穴 住居跡	土坑	掘立柱 建物跡	流路
弥生時代 ～ 平安時代	194	739	19	18

主な出土遺物

土器・：縄文中期～後期土器，弥生後期土器，土師器，
 陶磁器 須恵器，黒色土器，灰釉陶器，緑釉陶器，羽口
 国分寺瓦（平瓦・丸瓦），人形土製品，土製玉
 石器：石鏃，打製石斧，擦石，敲石，磨製石鏃

石製品：管玉，勾玉，白玉，砥石，滑石製紡錘車，滑石製勾玉形模造品，軽石製浮子

金属製品：和同開珎，北宋銭，鉄鏃，鉄滓，帯金具，金環

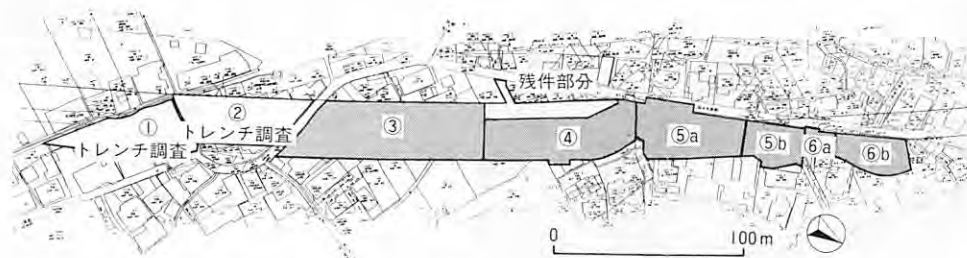
信濃国分寺周辺遺跡については，昭和38年からの信濃国分寺跡の調査で，国分僧・尼寺と同じ段丘面の明神前遺跡・西沖遺跡も発掘調査され，いずれも古代を中心とした遺跡であることが知られていた。今回の調査範囲も平成5年度の試掘調査によって，古代を中心とした大規模な集落跡であることが予想されていた。

遺跡の地理的環境 遺跡は信濃国分寺跡が位置する千曲川の段丘よりさらに下位の段丘に立地するが，二つの段丘は漸移的に移行し遺跡西側で一体となっており，明神前遺跡・西沖遺跡などとともに国分寺周辺遺跡群として認識されていた。

調査は，宅地などの取去状況や新幹線工事の工程に合わせて下図のように1区から6区に大別し，さらにa，bなどに区分した。

なお，1区・2区についてはトレンチ調査を行ったが，遺物包含層及び遺構は検出されず，旧北国街道が最下位段丘のほぼ端に作られ，ここまでが遺跡範囲と考えられた。

従来，千曲川の河岸段丘上に国分寺周辺遺跡群は立地していると想定されていた。しかし，遺構面下層にある礫層（V層）は礫の走向がほぼ南南東で千曲川起源とは考えにくく，さらに



第34図 国分寺周辺遺跡群 調査範囲と地区

礫が烏帽子岳山塊の安山岩に酷似していることを考え合わせると、神川起源の堆積であることも想定される。さらに、遺物包含層（Ⅲb層）を覆う砂礫層（Ⅲa層）もこうした安山岩が主体である。礫の走向は確認されないが、5b区検出の自然流路がこの砂礫層によって埋没し、南東から北西に向かって傾斜していることからⅢa層も神川起源の堆積である可能性が高い。

以上の点から国分寺周辺遺跡群は神川の押し出しなどの影響を受けている地域であることが推測される。遺跡の消長を考える上で重要な点であろう（山岸猪久馬氏御教示）。

遺跡の概要 以下、3区から6区までの調査状況について時代順に概観したい。

縄文時代 明らかに縄文時代と考えられる遺構はないが、3～5区で縄文時代中期から後期の土器と当該期に属すると思われる石鏃、打製石斧、凹石、擦石などが出土している。千曲川の最下位河岸段丘上にこうした遺跡が存在することは上小地区の縄文時代の遺跡立地を考える上で貴重な所見といえよう。

弥生時代 過去の調査で弥生後期の住居跡が存在することは知られていたが、今回の調査でも箱清水式期の住居跡が数軒検出された。とくにSB313では多量の土器が一括して出土している（第35図）。

古墳時代 後期を中心にカマドを持った住居跡が多く検出された。本遺跡で検出された住居跡の過半は当該期のものと考えられる。カマドの壁や天井に川原石を利用し、カマド周辺から多量の土器が出土する例が認められる（第37図）。また、3区で方形に区画する断面逆台形の堀状の遺構が検出された（口絵写真4参照）。区画内に共存する遺構は見つからなかった。



第35図 SB313 弥生土器出土状況



第36図 ST403 掘立柱建物跡



第37図 SB339 土器出土状況



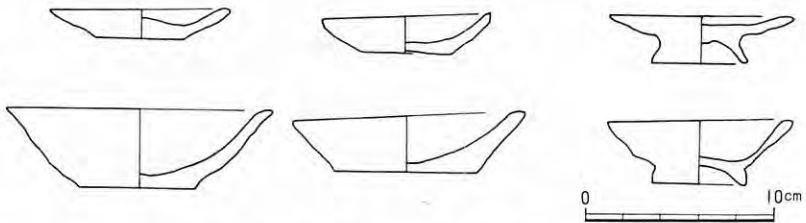
第38図 国分寺瓦を利用したカマド (SB506)

奈良・平安時代 和同開珎が6区の遺物包含層から出土した(第39図)。特筆すべき遺構としては、9世紀後半の住居跡でカマドの構築材として信濃国分寺の瓦を転用しているものがある(第38図)。当時の国分寺の管理経営の状況を窺える資料といえる。また、大きき1m弱の土坑内に平坦面が上を向く大きな石をもち、裏込石(ぐり石)も認められるものが4基検出された。うち3基が連続し、1基がそれらに直交することから礎石建物跡の可能性はある。この他、土師器皿が64枚重なって一括埋納された土坑(第40・41図)や井戸などがある。

検出された遺構は12世紀代までで、遺物包含層上位の神川起源と考えられる礫層がこの直後の時期に堆積し集落としては廃絶したことが推測される。神川と遺跡のかかわりについては今後とも研究する必要があるだろう。



第39図 和同開珎



第40図 SK621 出土土器



第41図 SK621 土器出土状況



第42図 国分寺周辺遺跡群発掘調査風景

13 上田城跡

所在地：上田市天神塚田1926ほか

調査担当者：廣瀬 昭弘

調査期間：平成6年5月26日～9月19日

調査面積：700㎡

遺跡の立地：千曲川の低位段丘

調査位置は上田城跡崖下の尼ヶ淵と呼ばれる千曲川低位段丘面で信越線に隣接する。工事に伴う掘削に合わせて土層観察や遺構・遺物の確認を行った。調査区の土層は砂層・砂礫層が連続して堆積し、千曲川の氾濫源と考えられる。遺構・遺物は確認されなかった。

(3) 長野調査事務所

1) 発掘調査の概要

調査遺跡数：12遺跡 (54,030㎡)

調査面積：上信越自動車道関係：更埴市屋代遺跡群 (3,000㎡)・窪河原遺跡 (5,000㎡)

北陸新幹線関係：更埴市更埴条里遺跡 (3,600㎡)・屋代遺跡群 (4,400㎡)・長野市篠ノ井遺跡群 (2,800㎡)・石川条里遺跡 (3,500㎡)・築地遺跡 (5,040㎡)・於下遺跡(1,960㎡)・川中島遺跡 (310㎡)・浅川扇状地遺跡群 (23,880㎡)・三才遺跡(340㎡)

オリンピック道路関係：小川村西光寺遺跡 (200㎡)

調査期間：平成6年4月11日～平成7年1月31日

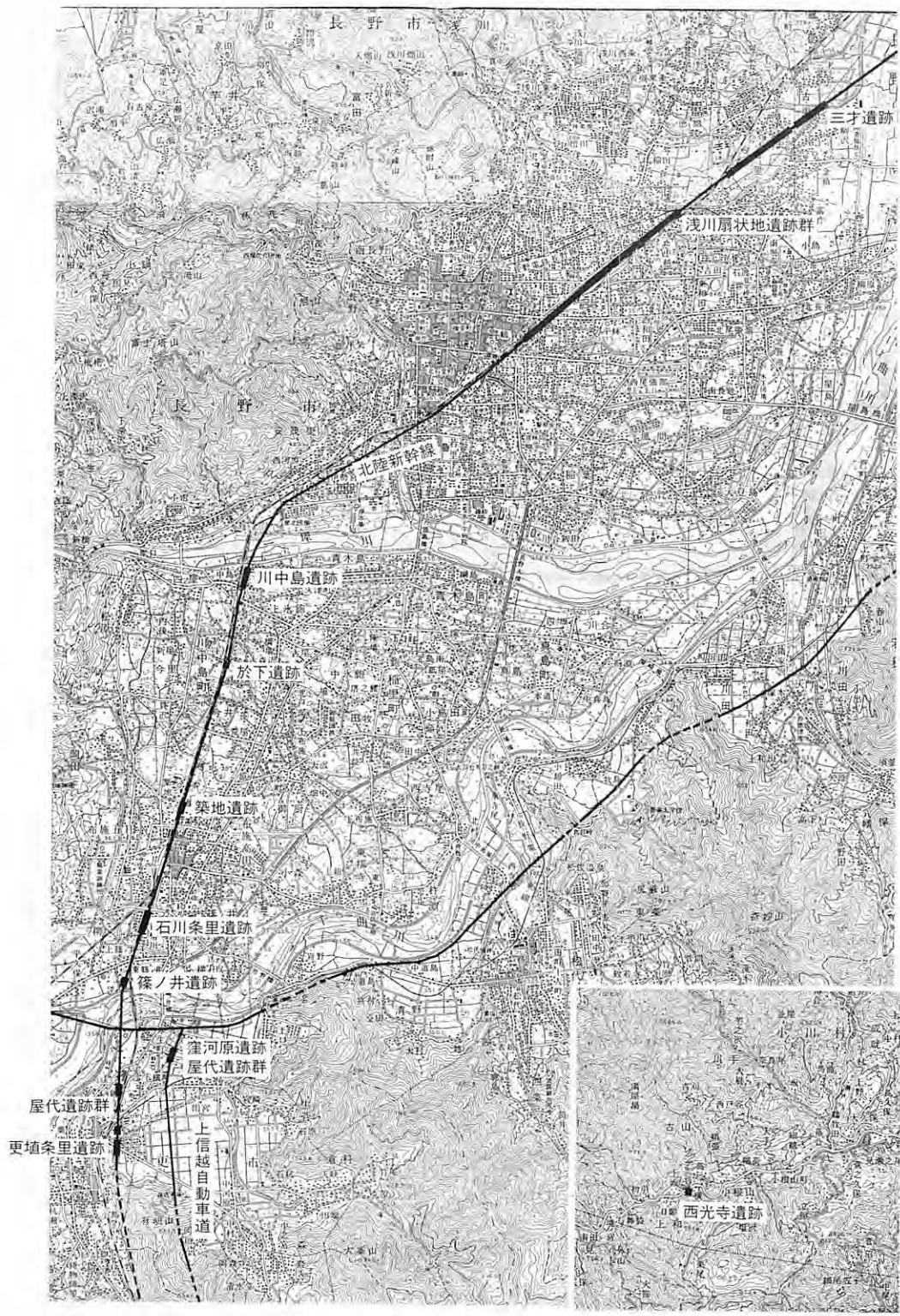
上信越自動車道・北陸新幹線・オリンピック道路建設関連の遺跡を調査した。12遺跡の大半は昨年度からの継続調査であったが、同一遺跡であっても地点を異にすると内容が一変したり、家屋等取法の遅れからほとんど試掘ができないまま調査に至ったりしたため、事前の情報が十分とは言いがたかった。このため屋代遺跡群(上信越自動車道)や浅川扇状地遺跡群では当初見込みを大きく上回る内容・調査量となり、調査研究員の対応が追いつかず、県教育委員会や当センター上田及佐久調査事務所職員の応援を仰ぐこととなり、1月末まで期間を延長させてようやく完了させることができた。

更埴市内では屋代遺跡群出土の木簡がまず注目される。自然堤防の氾濫原側縁辺の溝を中心とした水利施設に廃棄された大量の木簡は、奈良時代を中心としており、いわゆる「郡符木簡」や「国符木簡」などの稀少例を含む。記載内容も豊かで地域のみならず日本古代史を書き換えるほどの資料である。木簡と共伴したのは大量の斎串や形代、獣骨などで、律令体制下の祭祀に関わる可能性が濃厚である。官衙のすぐ近くを調査した感が強く、改めて自然堤防上の集落域を見直さねばならない。また、氾濫原側には奈良時代以降水田が継続しており、水田開発の過程も考え直す必要があろう。木簡の解釈を含め、これからの整理作業が大いに注目される。

屋代遺跡群からは昨年に引き続き縄文時代の集落も発見された。中期後半の集落の北限が把握され、その下層からは周堤をもつ竪穴住居十数棟から成る中期初頭の集落も発見され、その中心部分を調査することができた。

長野市内犀川以南では篠ノ井遺跡の弥生時代後期集落と円形・方形周溝墓群が特筆される。墓域は延長120mを超え、区画施設等を設けずに集落域に隣接する。この時期の集中的な墓域は県内では例が少ないだけに、重要な位置を占めるだろう。

長野市内犀川以北では、信越線沿いに長野市役所付近から駒沢川付近まで、部分的に欠落はあるもののほぼ全域にわたり、縄文時代中期・弥生時代～中近世の遺跡が存在することが判明した。浅川扇状地の地形変化に対応し、扇央から始まって次第に扇端や沖積面へと展開した開拓の過程を復元し得るデータが得られた。



地図3 長野調査事務所関係調査遺跡 (1:100,000)

上信越自動車道関連

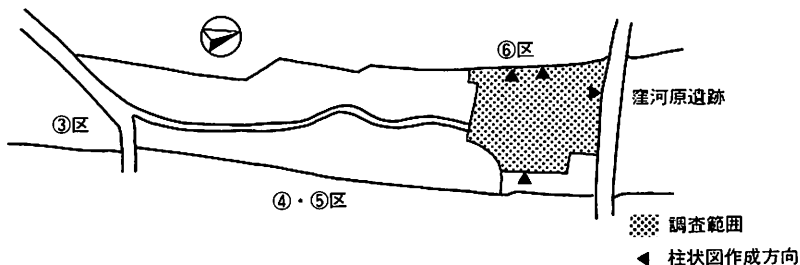
1 やしろ 屋代遺跡群

所在地：更埴市雨宮 調査担当者：寺内隆夫, 宮島義和, 平出潤一郎, 島田正夫, 水沢教子
 調査期間：平成6年4月1日～12月28日 西山克己, 出河裕典, 百瀬長秀, 岡村秀雄, 市村勝己
 対象面積：約3,000㎡ 小平和夫, 百瀬新治, 三上徹也
 遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上および千曲川の旧流路埋没地点
 調査遺構数：

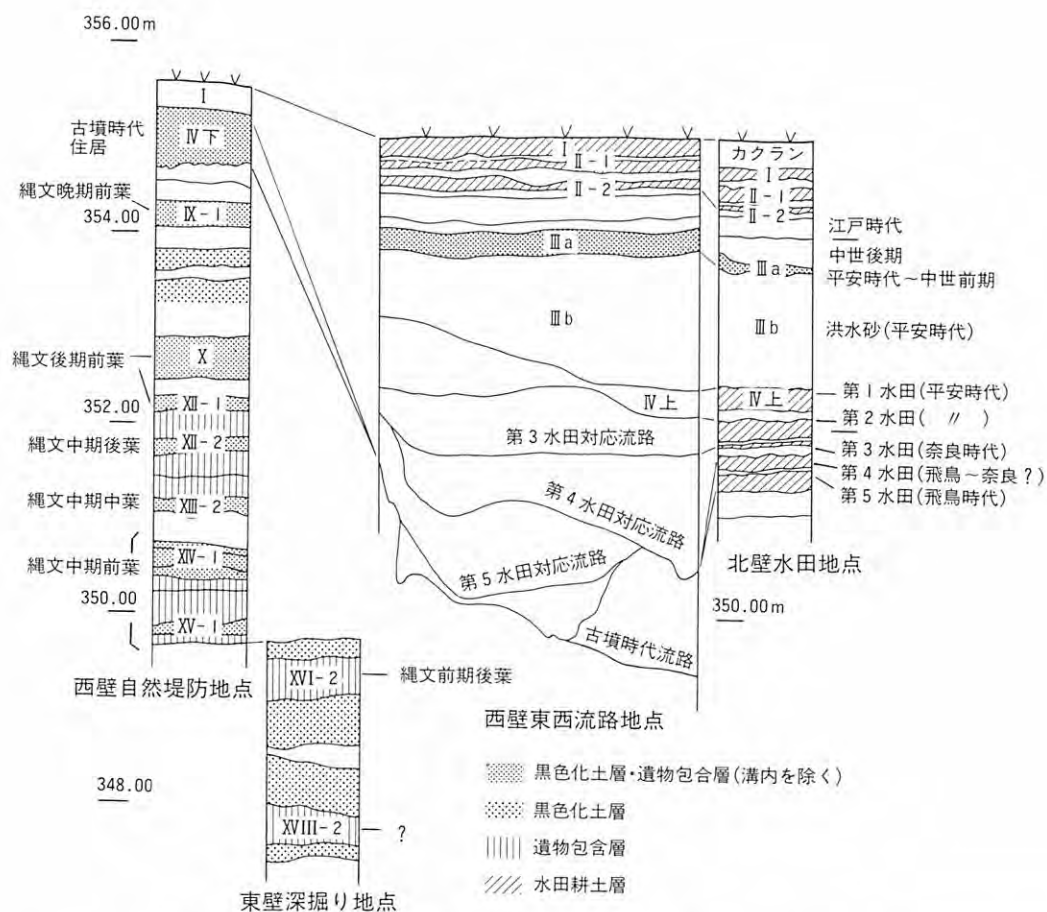
項目 時期	層位	竪穴住居	溝	焼土	土坑	水田	その他
中世以降	I～III a		26		23	3面以上	
飛鳥～平安	III a～IV	1	92		27	6面以上	6
古墳	IV b	1	3	6	2		
縄文晩期	IX-1			2	281		
縄文後期	IX-2～XI-1			13			
縄文中期後葉	XI-2～XII-3	6	10	10			
縄文中期中葉	XII-1～XIII-2		3	16			
縄文中期初頭	XIV-1～XV-1	15		25			
縄文前期後葉	XVI-2			1			
合計		23	134	53			

1. 沖積地の調査 本年度調査⑥区（第43図）の南半部では、縄文時代の集落2面と数多くの遺構・遺物包含層が確認された。北半部では、河川の埋没過程で作られた古代の水田、河川・湧水の管理施設や祭祀に関連する遺構が検出された（第45図）。調査面は、地表下7m近くの間には22面ほど（中世～古代8面以上、縄文14面）を数え、さらに、下層をねらった深掘りトレンチでは、南側で縄文前期などの遺物包含層が、北側では、古墳時代の遺物を包含する流路が見つかっている（第44図）。今回は、安全確保の上から調査を断念せざるを得なかったが、地表下約12mに存在する礫層までの間には、さらに多くの遺構・遺物が埋まっている可能性がある。これほど良好な遺構面が保存されていた理由には、千曲川の度重なる洪水のほとんどが溢流氾濫であり、洪水に際し、砂やシルトが穏やかに遺構面をバックしていたことがあげられる。

2. 縄文時代の調査（IX～XIV層） 縄文時代の堆積層が残存していた南半部では、各洪水層上部に存在する黒色化した土（旧地表面）を目安に検出を試み、遺構の集中する層を中心に調査を行った。特に、昨年度調査区からの継続となる3面の集落調査、集落面以外の遺物包含層の確認、不明確であったXV層以下の状況を明らかにする点に主眼を置いた（第44図）。



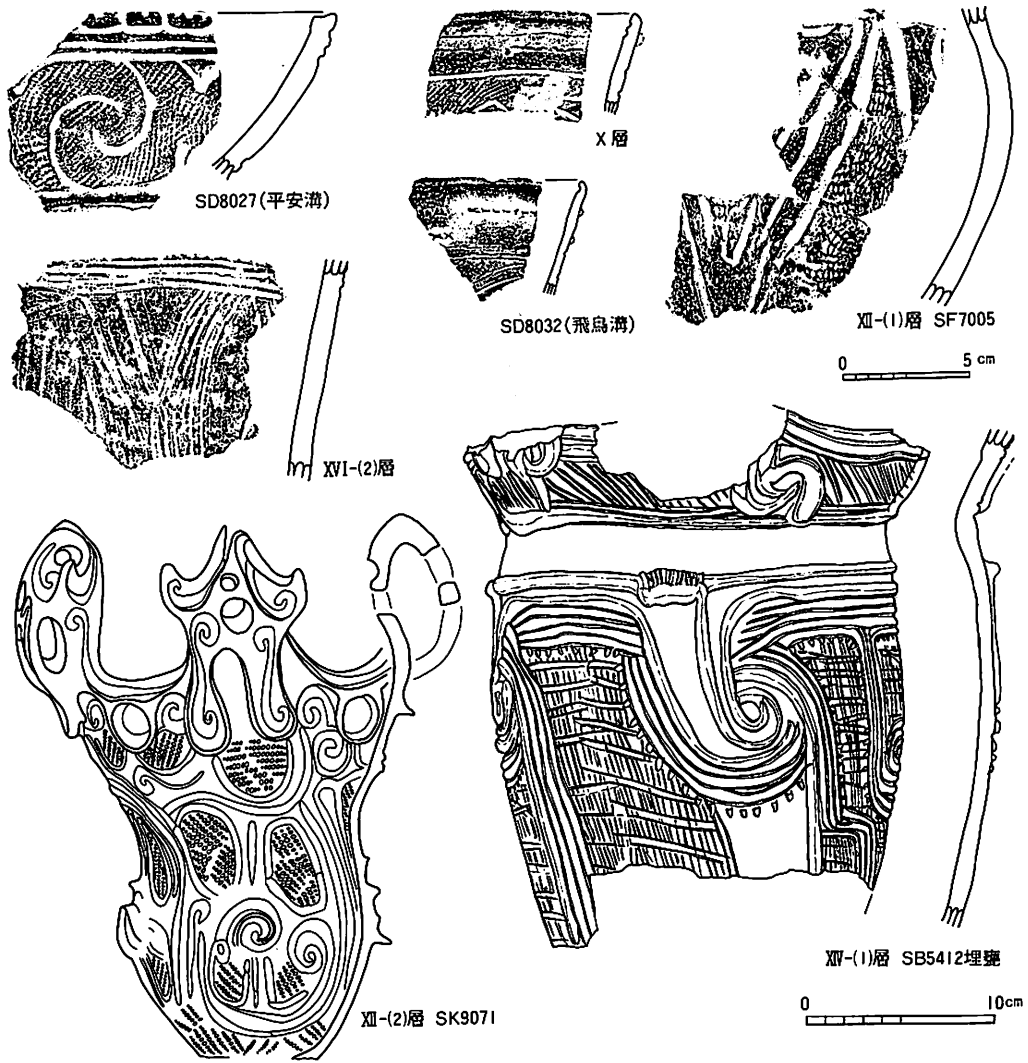
第43図 屋代遺跡群平成6年度調査範囲



第44図 屋代遺跡群⑥区柱状図(上・下方向S: 1/80 南北方向S: 1/160)



第45図 屋代遺跡群⑥区全景



第46図 屋代遺跡⑥区出土縄文土器

縄文中期の集落 XII-2層・中期中葉（勝坂期）では、焼土址などが検出されたにとどまり、昨年度の結果とあわせ、小規模な集落であったことが判明した。また、XII-2層・縄文中期後葉（加曾利E 2～4期）の集落面では、数軒の竪穴住居が調査区東南寄りで見出されたにとどまり、集落の北西縁辺部にかかっていることが明らかになった。

周堤の検出 これに対し、XIV-1層・縄文中期初頭（五領ヶ台II期）の竪穴住居は、15軒（昨年度とあわせ19軒）確認された。住居の配置から、集落は千曲川の流路変更により削平された北側にひろがっていた可能性が強く、縄文中期初頭の最大級の集落であったことがうかがえる。また、遺物包含層を取り除く作業によって竪穴住居の周堤を一部検出することができた。その他、住居覆土中や床面を掘り込んで埋葬された屈葬人骨や、多量の土器片・獣骨とともに小児骨？や一握りの黒曜石フレイクが集中して出土する遺物集中区などが注目される。

包含層の状況 昨年度、実体の不明確であった包含層のうち、X層中からは堀之内Ⅱ式土器が、また、Ⅻ-1層からは焼土址に伴って堀之内Ⅰ式土器が検出され、時期が明確となった。さらに、遺構の確認できていなかったⅫ-1、Ⅻ-3層などからも焼土址が確認され、この地区の利用頻度の高さを改めて確認することになった。ⅩⅤ層以下については、トレンチ調査にとどまったが、ⅩⅥ-2層で諸磯C式土器と焼土址などが見つかり、ⅩⅦ-2層中からは時期・用途不明であるが、大形の礫を1点検出している。

3. 千曲川の流路変更と埋没過程の遺構(Ⅳ層) ⑥区中央以北に千曲川の流路が入り込んだのは、縄文晩期～古墳時代にかけてと考えられる。しかし、調査は地表下6mほどでとどまっており、河床ちかくに包含されている遺物の時期を確定するにはいたっていない。この流路は、東→西方向に調査区を横切っており、流路の南岸には湧水地点が数カ所存在する。

湧水点祭祀 古墳時代後期(6世紀前半あるいはそれ以前)には、集落境の崖に存在する湧水坑内から、磨耗した土器片とともに玉類が出土している。また、流路斜面からは、子持勾玉などが出土しており、湧水を中心とした祭祀の存在をうかがわせる。

水田・湧水点施設 6～7世紀代に、流路は急速に埋没する。7世紀代には、埋没した流路の北半部に客土するなどして水田を造成している。この水田は、洪水による埋没を繰り返しながらも、平安時代前半までは維持されていく。8世紀代には、大畦畔の延長線上の流路内に、杭が打ち込まれ、流路を分流させている(第47図)。湧水地点には、礫敷、木樋、水門などの施設(口絵写真5)が設置され、祭祀関係の木製形代や獣骨、土器類の出土が目立ってくる。湧水地点は、流路とともに洪水砂によって埋没してゆき、その都度上層に施設が作りかえられ、少なくとも8世紀代までは機能していたと考えられる。

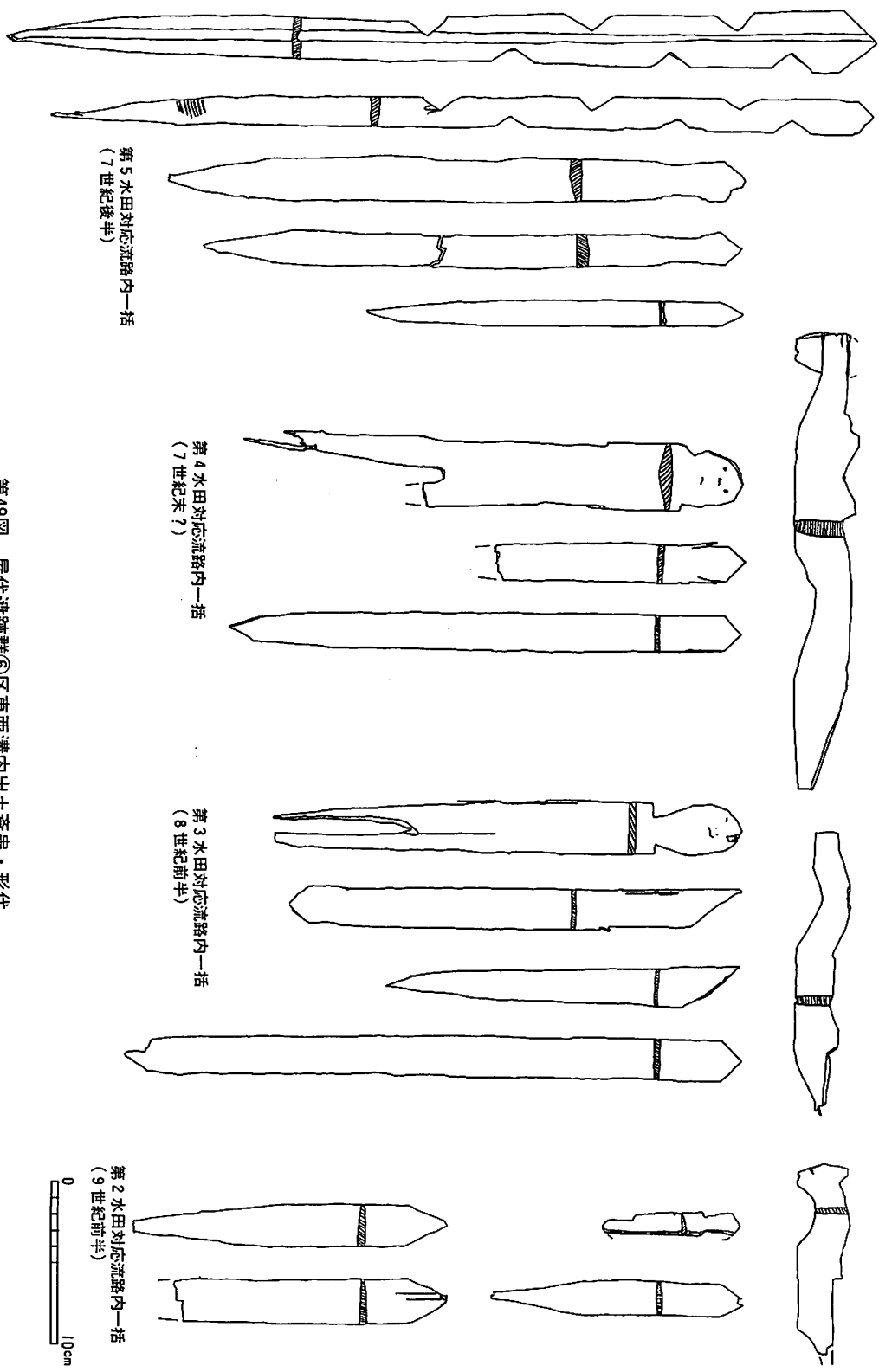
木製祭祀具 湧水地点への祭祀とともに、7世紀後半には木製の斎串・形代を中心に“祓え”に関連した遺物が急増する。8世紀代には、流路の埋没とともに湧水付近の崖が崩落し、集落と流路の間に平地(中段)が形成される。この中段を利用し、焼土や炭を伴う祭祀関連施設が設置され、流路や湧水につながる溝内、あるいは岸辺に斎串や形代類が一括廃棄されている(第48図)。木製祭祀具の量は8世紀前半をピークに、9世紀前半まで続いている。



第47図 集落と水田をつなぐ橋状遺構? (8世紀前半)



第48図 斎串・形代一括廃棄状況(8世紀前半)



第49図 屋代遺跡群⑤区東西溝内出土斎串・形代

その数は、全木製品4万点弱の内、数千点は下らないと予想され(第49図)、この地が一大祭祀場であったことを物語っている。

木簡 さらに、同一の流路・溝からは多量の木簡がみつかり、すでに公表した国符・郡符・習書木簡(口絵カラー写真)をはじめ、墨痕のみが残る例を含めれば、現段階で数百点に達している。木簡の一部は、斎串などに転用されており、斎串制作のためと思われる粗い削りくずからも墨痕が見つかりしている。現在、木製品の一部がようやく水洗・選別に入った段階であり、土器を含めた詳細な検討は後日にゆだねたい。

更埴条里と同時期の開発 9世紀前半～中頃になると、流路の埋没に伴い大規模な再開発が実施される。埋没した流路を完全に埋め立てて水田面を広げ、水の供給は、現下条せぎと同じ位置に、自然堤防上を貫く水路を掘削し、導水している。この水路の掘削や水田開発は更埴条里水田とほぼ同時期に実施されている。この時点で、木製祭祀具が姿を消すとともに、南側の集落域に竈穴住居が密集してくる。しかしその後、9世紀後半には、大洪水により1～1.5m近くの洪水砂で覆われてしまう。平安時代後期から中世にかけては、水路のみが確認されている。また、平安時代後半には再び千曲川の流路がかわり、本地区と北側の窪河原遺跡の境で、9世紀後半の洪水砂や下層の水田址が削平されている。

最終年度の調査を終え、多くの課題を抱える結果となった。遺物の水洗がまったくなされていない段階であり、今後整理作業を通して記述内容の再検討をはかりたい。

2 ^{くぼがわら} 窪河原遺跡

所在地：更埴市大字雨宮字窪河原

調査担当者：寺内隆夫 依田 茂

調査期間：平成6年10月6日～11月18日

島田正夫 百瀬長秀

調査面積：5,000㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防とその後背湿地

遺跡の特徴：中世以降(?)の畑・水田

主な検出遺構

主な出土遺物

火葬墓1基

土師器・陶磁器・内耳、鉄製品

畑1面、水田3面

人骨(焼骨)、獣骨・貝、木片・植物種子

今年度の調査は4面に及び、1面めからは火葬墓が検出され、人骨(焼骨)と灰が出土したが、他に出土品はなく時代を確定することはできなかった。

2面めの北半分は、畑域でうねが84条観察された。うねの層から内耳片が出土している。南半分は水田域(第一水田面)で大畦畔が検出され、北の畑域との境界も明らかになった。3面め、4面めの南半分は、それぞれ湿田の様相であった(第二・三水田面)。各水田面とも、時代が特定できる遺物を欠く。

第三水田面以下の層については、出水が著しく調査不能であった。

北陸新幹線関連

3 更埴条里遺跡

所在地：更埴市屋代

調査担当者：寺内貴美子 澗井英知

調査期間：平成6年10月20日～平成7年1月19日

鳥羽 英継 澤谷昌英

調査面積：3,600㎡

百瀬 長秀

遺跡の立地：千曲川右岸の後背湿地内にある微高地

時代と時期：奈良～平安時代，中世

遺跡の特徴：奈良～平安時代の集落域

主な検出遺構

主な出土遺物

	住居跡	掘立建物跡	溝	焼土	土坑	畑	井戸
奈良～平安	75	7	41	1	516	2	6
中世							

土器：土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・青磁・中・近世土器
縄文晩期の土器・弥生土器

石器：打製石斧・磨石

金属製品：碗形鉄製品・銭貨

その他：井戸杵・獣骨



第50図 調査範囲

更埴条里遺跡は昨年からの継続調査で、今年度はトレンチによる確認調査の結果、2区の一部と3・4・5区全体の本調査が必要となった。大部分は12月中に調査を終了させたが、用地買収の関係で2・3区の一部を1月に持ち越すことになった。調査の結果、今まで古代から水田であったと考えられていた場所に、奈良～平安時代にかけての集落と9世紀以前の畑が確認された。

集落が検出されたのは3区南側から5区にかけてで、遺構が散漫になるところもあるが全体で住居跡が見つかっている。特に5区では遺構の重複が激しく、長さ約100m幅約12mの中に竪穴住居跡57軒、掘立建物跡6棟、溝18条、土坑400基以上が検出されている。これらの遺構は土坑を除いて大半が8～12世紀のものである。また、森街道をはさんだ南側の2・3・4区でも、南にゆくほど遺構の密度は低くなるものの8～10世紀の遺構が検出されている。ある時期集落として利用された土地が畑に転じたり、畑が再び集落になったりという様子が窺える。また3区北側と5区は集落が密集しており、安定した居住域と考えられる。



第51図 3・4区全景

特徴的な遺構、遺物としては、一頭の馬が身体を丸めたような状態で検出された平安時代後期と考えられる土坑がある。馬の骨がこのような状態で出土している例は更埴市内で3例目となる。また一部攪乱で壊されているものの、中世の火葬施設であると考えられる壁の内側が赤く焼け、底部からは炭化材や骨粉などが検出された不定形な土坑がある。3区では緑釉緑彩塗が出土している。



第52図 馬の骨出土状態

以上、更埴市内では調査例の少ない10世紀代の集落が見つかったこと、古代から水田地帯と考えられていた千曲川の後背湿地での集落の存在が明らかになったこと等大きな成果があがった。



第53図 5区全体図

4 やしろ 屋代遺跡群

所在地：更埴市屋代

調査担当者：寺内貴美子 澤谷昌英

調査期間：平成6年4月11日～11月2日、平成7年1月17・18日

鳥羽 英継 淵井英知

調査面積：4,400㎡

百瀬 長秀

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防

時代と時期：弥生時代～平安時代

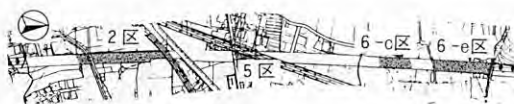
遺跡の特徴：弥生時代の居住域、古墳～平安時代の集落、平安時代の水田・畑

主な検出遺構

主な出土遺物

	住居跡	掘建物跡	溝	焼土	土坑	水田 畑	井戸	その他
弥生～ 古墳	41*	1	20	5				
奈良～ 平安	42	3	32	2	247	水田2 畑1	1	杭列1
中世							7	

土器・土製品：土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・奈良三彩
弥生土器・土鍾・土玉
金属製品：銅鏃・鉈・バックル・銭貨
その他：ガラス小玉



第54図 調査範囲

本遺跡は2・6-c・6-e区の本調査と5区の立会調査、1区の一部の調査を行った。5区の立会調査では平安時代の水田が、1区では2区の集落

の南にある流路が確認できた。本調査を行った地区については、以下に概要を示す。

2 区の概要

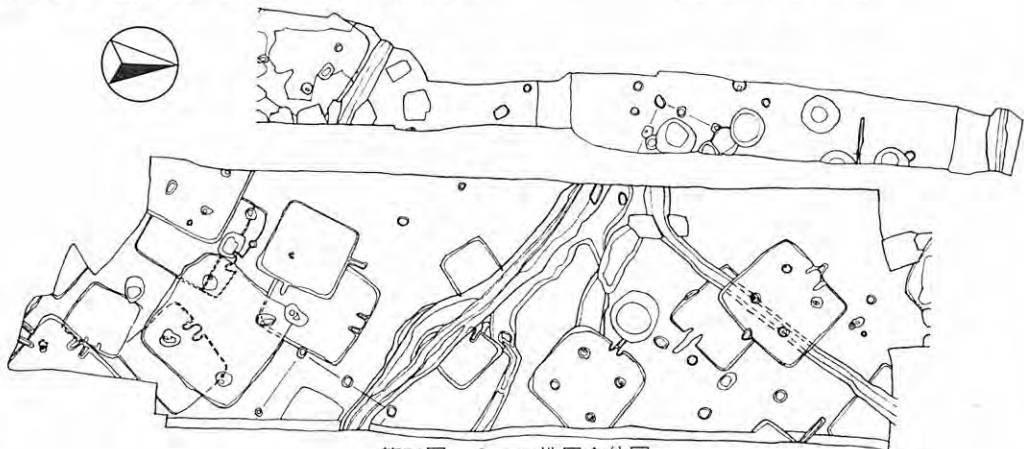
更埴市がすぐそばの調査を行った時に弥生時代の住居等を検出しており、その時期の集落の存在を予想して調査に入った。調査の結果、弥生～平安時代にかけての集落が検出され、遺構の多くは古墳～平安時代に属することがわかった。一方弥生時代に属する遺構は、数は多くはないものの、遺構に伴って銅鏃、鈍、ミニチュア土器等が出土しており、良好な資料となろう。調査区の北側では、集落が検出された所にはみられない平安時代の洪水砂が厚く堆積していた。これを取り除くと集落面から1 m程低いところで昨年調査した6-b区から4区にかけて広がっていた水田の続きと、4区の南北方向の畦畔につながるとされる畦畔を検出した。また集落（高台）の端では時期は不明だが杭列が検出されている。この水田の下には覆土に古墳時代中期の土器を含む自然流路が断面で確認され、この流路が埋まった低地に水田が作られたことが予想される。

6 区の概要

昨年度調査できなかったc・eの2地区の調査を行った。c地区は昨年検出した土手状遺構の内側ということで期待された。調査の結果、土手状遺構との同時性は検討を要するが、礎石建物跡の検出、遺構に伴う奈良三彩の出土、昨年同様破片ではあるが緑釉陶器もかなり出土し、この集落での有力者の存在を裏付ける資料を得ることができた。e地区では、古墳時代の後期から奈良時代にかけての集落が見つかった。この集落は廃絶後水田や畑になっており、集落の中心が開発とともに南へ移動していった様子が窺える。また集落の北の外れに溝と、時代は限定できないが複数の井戸が検出され、集落の外れの様子的一端をつかむことができた。



第55図 礎石建物跡



第56図 6-e地区全体図

5 ^{しのい}篠ノ井遺跡群・^{いしかわじょうり}石川糸里遺跡

所在地：長野市篠ノ井塩崎

調査担当者：綿田弘実 山崎光顕

調査期間：平成6年4月5日～9月29日

依田 茂 澤谷昌英

調査面積：約2,800㎡

遺跡の立地：千曲川左岸の自然堤防

時代と時期：弥生時代後期，古墳時代，奈良・平安時代，中世

遺跡の特徴：弥生時代後期の墓域・居住域，古墳時代後期・奈良・平安時代の居住域

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴居跡	竪穴状遺構	掘立柱建物跡	柱列	土坑	井戸	溝跡	周溝墓	土坑墓	その他
弥生中期以前						3					
弥生後期	42	3				53	2	10	40	4	焼土3
古墳	39				6	273	1	28		3	瓦塔1 畑1 水田1
奈良・平安	38	1		15							
中世				5			9			1	

土器：弥生後期土器，古墳～平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器，中世陶磁器

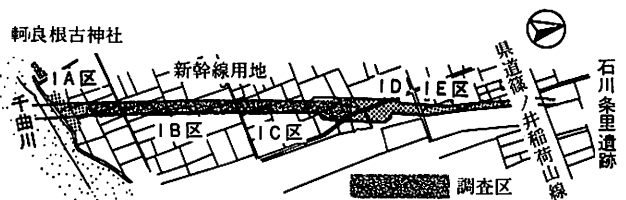
土製品：紡錘車，踏脚硯，瓦塔，土鈴，埴仏

石器・石製品：磨製石鏃，偏平片刃石斧，太形蛤刃石斧，砥石，敲石，編物石，管玉，白玉

金属製品：鎌，鉞，銅鏃，銅釧，鉄釧，銅鉤

その他：鉄滓，ガラス小玉，卜骨，人骨，獣骨，モモの種子

北陸新幹線建設に伴う篠ノ井遺跡群の調査は，平成5年度からの継続である。5年度は千曲川堤防付近（1A区）および石川糸里遺跡との境界付近（1D・E区），今年度はその中間部分（1A・B・C・D区）延長240m



第57図 篠ノ井遺跡群平成6年度の調査区

と1A区西方の軻良根古神社地点を調査した。調査面は，現地表下約1.5mの古代面，約2mの弥生後期面の2面である。調査の結果，第1面からは古墳時代から平安時代にかけての居住域と一部で9世紀後半の水田，第2面からは弥生時代後期の墓域および居住域が検出された。

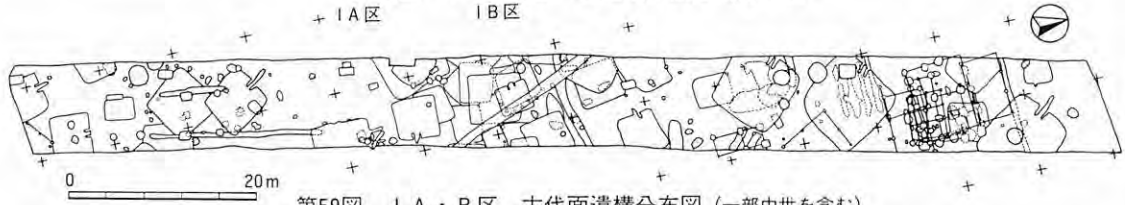
弥生時代後期の様相

1A～1B区の円形周溝墓は平成5年度との累計で55基を数え，全く切り合う事なく拡がり，距離にして南北方向で120mを越える。1A区の70m西側の軻良根古神社境内からも4基が確認された。

主体部は平均125×195cmの隅丸方形で周溝内1主体部が基本である。木棺の木口痕は検出されず，棺両端を地面に突き刺して固定するI型木棺ではなく棺底部が平坦なII型木棺であるが，棺全体が土圧で土坑底部に喰い込んで生じた痕跡より，棺の長さは150～180cmの範囲に収まるという5年度と同様な所見が得られた。埋葬頭位が完全に判明したものは主体部7，周溝内2，



第58図 I A・B区 弥生後期面遺構分布図



第59図 I A・B区 古代面遺構分布図（一部中世を含む）

土坑墓内2の計11体で全て東頭位である。人骨の遺存の無かった主体部もおおかたが東西主軸で、これらも東頭位である可能性が高く、これらも東頭位としてカウントすると全体の9割弱が東を意識して埋葬されたことになる。わずかでも人骨が遺存した主体部は3割弱に過ぎず、7割強で遺存しないのは年月の経過による自然的要因よりも古代住居構築時の基礎工事により外されてしまったためである。副葬品には鉄釧・銅釧があり、主体部だけでなく周溝内にも鉄釧をもつものがあるが、副葬品をもつものは墓群の中でも極めて限られたブロックの集団である。

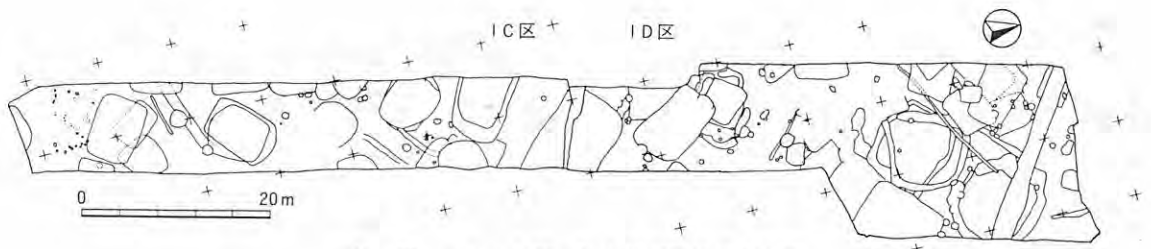
周溝内出土の土器は居住域よりも圧倒的に完形率が高く、良好な一括セットをなすものが多い。ブリッジで隔てられたかなり離れた土器片同士が接合すること、周溝底部からほとんど出土せず、かなり浮いた位置から出土することから、従来言われていたように墳頂に当初在ったものが転がり落ちたという説明を追証する。しかし、周溝内において局部的に偏在する一括セットは、後に墓に通ってきた者が意図的に置いたものである。周溝ブリッジは埋葬頭位のような方向的規則性は認め得ず、単に墓道を確保するという意味合いが感じられる。周溝は局部的に深くなったり、埋まりかけたものが再整備により再び掘り返されたりしている。

合口土器棺は3基検出され、組み合わせは甕一壺・甕一甕・壺・壺とヴァリエーションがある他、周溝底部に置かれたもの・周溝内に更に土坑を穿って入れられたもの・埋まりかけた周溝上部に位置するものと、埋葬が随時行われている。何れも中からは幼児の骨・歯が検出され、2基はガラス小玉・管玉が複数副葬されていた。玉類は専ら子供の装身具で、大人の埋葬主体部には釧が副葬されても全く玉類が副葬されない点が当遺跡の特徴である。尚これらの他に、骨は検出されないが単棺と考え得る大形の壺が周溝内に認められるほか、主体部が木棺ではなく当初から壺棺であったと考えられるものもわずかにある。



第60図 I D井戸、土器出土状況（弥生後期）

墓域から集落域への移り変わりは、溝・柵・森林・広場等空隙が存在せずに僅か3mを隔てる。集落では、住居跡は隅丸長方形プランでよく叩き絞められた貼床をもち、4本主柱で炉を短辺の主柱間にもつものが多い。入り口施設の柱穴をもつもの、棟持柱をもつもの



第61図 IC・D区 弥生後期面遺構分布図



第62図 IC・D区 古代面遺構分布図（一部中世を含む）

もある。炉は炉辺石を有するものは無く、床がただ焼けているもの、僅かに掘り込みをもつもの、埋設土器を利用するものがある。炉は複数もつものが珍しくない。プランが方形に近づき、床の叩き締めが弱くなるものは集落の北側程多く、新相の土器を出土する。住居跡群はほとんど切り合っている。

集落の北側には別の墓域が広がっている。即ち集落を挟んで南北両側とも墓域である。但し、北側の墓域は円形周溝墓群より新相の墓域で、方形周溝墓4基が検出されたほか、土坑墓と考えられる長円形～不整形土坑が5年度の調査区から連続し、5年度の調査区では合口土器棺1基が検出されている。各墓群は散在しながらも明らかに一連の墓域を形成し、埋葬状態の相違は階層分化の萌芽を窺わせる。方形周溝墓の周溝の開口部が外反すること、周溝内の遺物は少なく赤い土器に混じって土師器様のものを出土することから3C末～4C初頭の墓域と考えられる。尚、周溝同士が切り合うものがあるが、これはむしろ追葬や墳丘再整備として捉え得る。人骨の検出レベルは極めて高く、取り上げを古代面で行ったことから周溝に囲まれた部分が墳丘状を成していた事は確実で、これはかなり後まで原形を保ち、古代住居もこれを避けて構築されている。

古墳時代の様相

古墳時代の住居跡は約40軒弱検出されたが、後期のものが28軒と過半数を占めている。それらの住居は切り合い関係にあるのが数軒で、あとは調査面全体に点在している。そのなかでも340号住居跡と353号住居跡が代表例である。主軸が北西—南東方向にあり、一辺7～8mと規模が大きく、4本主柱で固い貼床を作り、北西壁に土器を芯にしたカマドを設置している。出土した土師器の甕や壺の量が多く、須恵器を伴い、340号住居跡からは手づくね土器と管玉7個、白玉3個、土製丸玉4個、多数の編み物石？、353号住居跡からは紡錘車、鉄製品などがそれぞれ出土している。篠ノ井遺跡群の高速道用地からは古墳後期の住居跡は検出されておらず、土器編年研究上からも注目される。



第63図 IB区 353号住居址カマド
土器出土状況

奈良・平安時代の様相

奈良・平安時代の竪穴住居跡は約40軒検出され、1A～1D区まで全域に分布しているが、1B区南側では特に激しく切り合っている。石組カマドが出現するほか、支柱穴が検出できないものが多くなる。1B区北側・1D区南側では竪穴住居跡が無く掘立柱建物跡だけの度重なる立て替えが行われた箇所があり、1D区のもは平安時代の住居跡に切られている。

1D区北側には大掛かりな盛土で両岸を護岸した基幹灌漑用水路が一直線に石川条里遺跡方面に向かい、その堤防上に小溝を設けて周囲の水田に引水する施設も確認された。従来自然堤防上の篠ノ井遺跡群＝居住域、後背湿地の石川条里遺跡＝生産域と考えられてきたが、自然堤防の中央部に在る当遺跡も一時的に水田だったことが確認された点は予想外の成果である。



第64図 1B区 瓦塔出土状態

最も注目されるのは1B区の瓦塔集中遺構で、出土量は県内2番目で復元可能である。瓦塔は現位置に無く、埋まりかけた溝に投棄されたもので、小指大～拳大の大量の円礫を伴っており、類例が無い。出土位置は後世の耕作の為、数m周囲まで拡散していた。

石川条里遺跡

8月30日～9月22日に篠ノ井遺跡群と平行して、約3,500㎡を調査した。地点はみこと川団地のアパート跡地で、宅造以前は水田である。2mにおよぶ山砕造成のため掘削深は3m以上となり、出水による崩落防止のため法面掘削の狭いトレンチ9本の試掘ののち、4カ所で平安水田を面的に調査した。造成前の水田面下約30cmで中・近世水田層、約1m下で9世紀代後半に比定される砂層に覆われた水田面と畦畔を検出し、それ以下では水田層は観察されない。平安水田には黒色土器と灰釉陶器が伴ったが、中・近世遺物はごく少量で明確に時期決定できない。昨年度調査と長野市埋蔵文化財センターの調査成果をあわせると、篠ノ井遺跡群との境界から県道長野・信州新線の間には全面的に平安水田が広がり、さらに北へ拡大することが予想される。ただし条里的地割の方位は一致するものの、大畦畔の位置などが整合するか疑問は残る。平安水田以前の土地利用状況や水田の成立時期、埋没後の再開拓の時期など、解明すべき課題は多い。



第65図 重機によるトレンチ掘削



第66図 第2トレンチの平安水田

6 築地遺跡

所在地：長野市篠ノ井岡田

調査担当者：賛田 明、両角英敏

調査期間：平成6年4月11日～7月15日

清水春樹、三木雅博

調査面積：5,040㎡

遺跡の立地：犀川の扇状地

時代と時期：平安時代～中世

遺跡の特徴：平安時代～中世の集落

主な検出遺構

	竪穴状遺構	住居址	掘立柱	溝址	土坑	土器集中
平安		28		45	535	1
中世	4		7			



第67図 調査風景

主な出土遺物：土師器・須恵器・墨書土器・朱墨硯・銅鏡・青磁・白磁・すり鉢・こね鉢
山茶碗・銭貨^c・刀子・動物骨

築地遺跡は昨年度の調査で初めて存在が明らかになった遺跡で、9世紀後半～11世紀の遺構・遺物が確認されている。今年度は、昨年度の調査地点を含む南北約213m・幅18mの範囲を、南側から①～③区に分けて調査した。検出面は地表下約80cmの黄褐色土層で、平安時代～中世の遺構・遺物が出土している。

①区は、県立篠ノ井高校グラウンドの西側に位置する。昨年度の試掘で時期不明の水田面が確認された地点で、今年度は調査区全体にトレンチを設定し、水田面の範囲確認を行った。



第68図 築地遺跡②・③区全体図（1：600）

その結果、水田面は時期を特定できないものの①区の全域で確認され、②区の集落域が、①区に及ばない事が判明した。

②・③区では、平安時代～中世の集落跡が調査された。

②区の南側は東西方向に走る溝址（SD10）を境に、9世紀後半～10世紀代の遺構が出現する。住居址は1辺4.6～5mの隅丸方形が主流で、おおむね3～8mの幅に収まる。カマドを有するものは、南東壁コーナーにある1軒を除き北または東壁に設置され、地山を残し作り出したもの・石組のものが見られる。

中世の遺構はSD08とSD50に挟まれた中間に集中し、溝址・掘立柱建物跡・土坑・竪穴状遺構等が調査された。SD50は幅約3.9m・深さ約1.4mを測り、集落区画溝としての機能が考えられる。また、竪穴状遺構は3基が掘立柱建物跡と切り合い関係にあり、いずれも掘立柱建物跡の方が新しい事から、竪穴状遺構から掘立柱建物跡への変遷が窺える。

竪穴状遺構からはかわらけ・青磁・こね鉢・すり鉢・山茶碗・銭貨等多くの遺物が出土しており、これらから13世紀後半～14世紀の年代を与える事ができよう。

築地遺跡の集落域は調査区外に広がっており、今後、周辺地域の調査が期待される。

7 かわなかじま 川中島遺跡

所在地：長野市川中島町四ツ屋

調査期間：平成6年6月23・24日

調査面積：310m²

調査方法：重機によるトレンチ調査

遺跡の立地：犀川の扇状地上

概況 本地点はJR信越線川中島駅の北方約200mの位置にあり、現況は宅地であった。

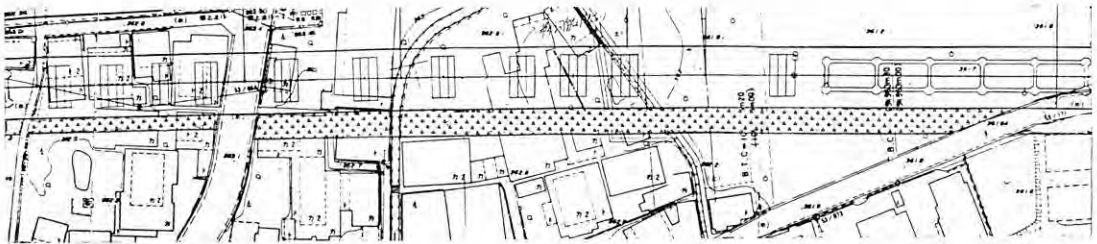
調査区全域にわたりトレンチ調査を実施した結果、地表下約0.5mまで攪乱をう

け、それ以下は礫層が厚く堆積する事が判明した。平安時代～中世の遺構の存在が予想されたものの遺構は全く検出されず、近代の陶器が出土したにすぎない。以上の事から、本調査の必要はないと思われる。

調査担当者：原 明芳、替田 明



第69図 調査風景



第70図 調査位置

8 おしも
於下遺跡

所在地：長野市川中島今里於下

調査担当者：依田 茂 市川隆之

調査期間：平成6年11月21日～12月22日

主な遺物：かわらけ、内耳鍋、古

調査面積：2,000m²

瀬戸、輸入青磁銅銭

遺跡の立地：犀川扇状地扇央の微高地

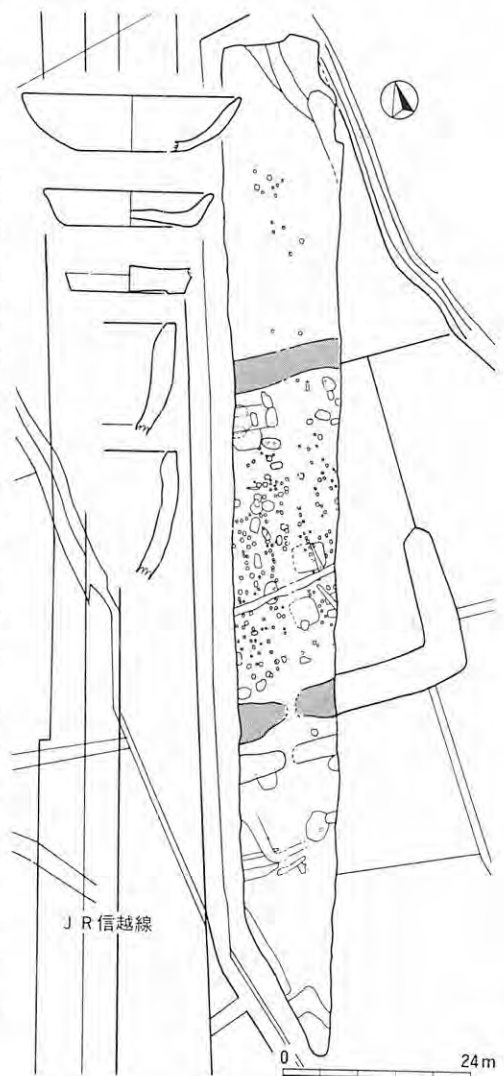
時代と時期：中世

遺跡の特徴：鎌倉時代の居住遺跡、室町後半の堀を巡らせた屋敷

主な検出遺構：堀・掘立柱建物

遺跡は善光寺平西南部、犀川扇状地内の細長い島状微高地に立地する。於下遺跡は前年度の試掘で中世遺構が確認され、隣接した於下館が存在することから館関連の遺跡として注目されていた。

調査は於下館南東の北西—南東方向に長い微高地を南北に横断する形で実施し、遺構は中央の高所で多数の掘立柱建物・土坑・堀・溝、南側低地境で火葬施設と土坑数基、北側低地境で近世の溝群と若干の柱穴が検出された。これらの遺構は出土遺物から鎌倉と室町後半の2時期に居住域となったことが推定され、特に室町後半の屋敷跡は注目される。この屋敷は幅約3mのV字状の堀で囲まれ、周囲に残る堀痕跡と考えあわせると南側に土橋をもつ南北約32mの方形になると推定される。内部の掘立柱建物は出土遺物の子細な検討ができていないため、伴う遺物の抽出は今後の検討課題として残されている。また、南側低地境で堀と類似場所に土橋をもつ溝が検出されたが、この溝は堀と廃棄状態が異なる点や、内耳を出土した土坑に切られることから同時に存在した可能性は低いと思われる。なお、この屋敷は堀を巡らせた単独の屋敷と認められるが、隣接する於下館との関連では於下館内部に包括される屋敷か、時期が異なるか、同時期で館と近接しながらも別の存在と捉えるかは明らかにできなかった。



第71図 於下遺跡概要

W-2・3区

所在地：長野市早苗町81～東鶴賀37

調査担当者：吉江英夫 山崎まゆみ

調査期間：平成6年4月12日～平成6年12月7日

両角英敏 清水晴樹

調査面積：約3,600㎡

賛田 明 三木雅博

遺跡の立地：浅川によって形成された扇状地上

田中正治郎

時代と特徴：弥生時代中期から古墳時代後期の居住域

主な検出遺物：住居址46 墓址4 土器集中8

掘立柱建物5 溝 土坑 その他

主な出土遺物：弥生土器 土師器 須恵器

[土製品] 紡錘車 土錘 ミニチュア土器

[石製品] 白玉 管玉 石鏃 石庖丁

磨製石斧 勾玉 砥石 磔器

[その他] ベンガラ 人骨



第72図 調査状況

本地区は長野市役所の北側に位置し、現況は全くの商業地・宅地で、大規模な攪乱を受けていることが予想された。ところが意外に攪乱を受けた部分は少なく、多くの遺構が検出できた。A区からD区まで南北約370mの区間は南端のA区の検出面が最も低く、市道1本隔てたB区は逆に最も高く、北端のD区に向かって緩やかに下ってゆく状況であった。このうちD区を除く全ての地区から弥生～古墳時代の遺構が確認された。

弥生時代中期

この時期の住居址はA区SB05のような円形のプラン、C区SB07に代表される楕円形プランの両者がみられ、これは時期差とも考えられる。検出面から床面まで30cm以上掘り込むものもあるが、多くは削平を受けたりしく床だけを検出した住居址もある。遺物はA区SB07から紡錘車が10点以上出土し、B区SB24では磨製石斧2点、土器転用紡錘車3点、石鏃、砥石等が出土した。C区は耕作等の攪乱や調査区の制限から全体の形状がつかめる住居址は少ない。そのなかで、C区SB07は焼失住居と思われ、栗林式の土器とともに大量の炭化材が放射状に出



第73図 W・3区調査区域

土した。またA区からは円形に配置される溝が2本確認されこれを周溝ととらえれば平地式住居も想定される。

弥生時代後期

C区南端のSB14のみが該当し、上部を古墳時代住居址SB10に削平されているが、箱清水式の壺が出土している。これ以外には弥生時代後期の明確な遺構は確認できなかった。

古墳時代前期

C区のSB01, 02, B区ではSB15から北の大部分が該当し、SB24から南は弥生時代の居住域となる。B区ではほぼ中央に北西～南東に3本の溝がのび、この溝を挟むように北に8軒、南に11軒が密集して切り合う。特に南側のSB13, 16, 17, 21はほぼ同じ地点に重なり合う状態で検出された。B区から検出された住居址は、残存状態が良好で掘り込みがはっきりととらえられ、周溝も明確である。また、このうちいくつかは間仕切り状の溝を持っていた。SB15は焼失住居と考えられ、床上から甕、高坏などの完形土器とともに炭化材・焼土が大量に出土したが残念ながら大半が調査区外にかかってしまっている。

古墳時代中期～後期

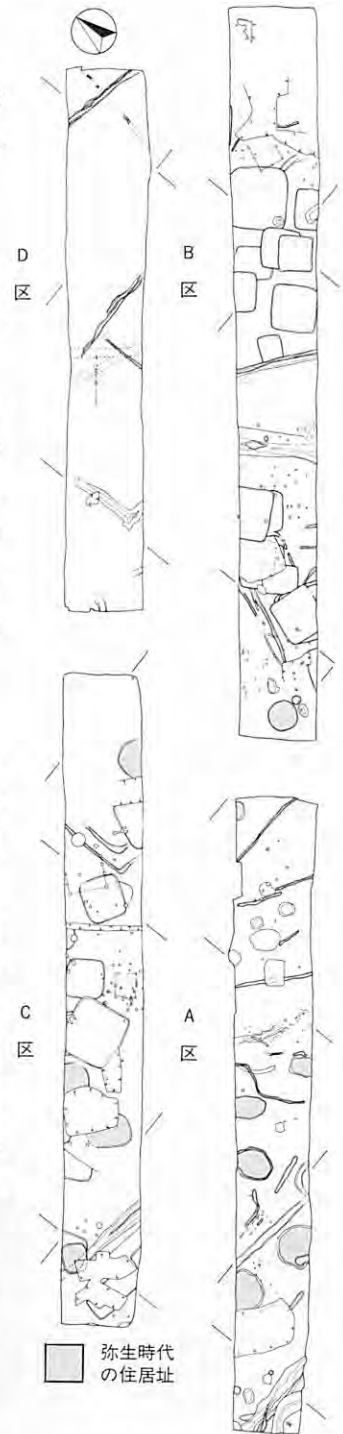
カマドを持つC区SB03, 16が該当する。SB03は1辺8m近くある大形の住居址で、土製勾玉、白玉などが出土した。また本地区では須恵器の出土は稀であるが、SB16のカマドから須恵器の完形の蓋が出土した。

住居址以外ではB区で礫床墓、A区で古墳らしい遺構を確認した。礫床墓はB区の居住域を分断する溝付近に位置する。そのうちSM01は長方形に礫を敷いたもので、ほぼ中央部より人骨が出土し、木棺の木口痕も確認できた。しかし、共伴する遺物が少ないため時期は特定できない。A区のSM01は周囲を溝で囲まれた高さ80cm程の盛土状遺構であったが、大部分は調査区外にあるため主体部は認められず、全容は不明であるが円形を呈していたものと推定される。

遺構は調査区外にも広く分布していると考えられ、今後周辺での綿密な調査が期待される。



第75図 SB15土器出土状況



第74図 W-2・3区全体図
(1:1,200)

W7・8区

所在地：長野市三輪・古野

調査担当者：河西克造 月原隆雨

調査期間：平成6年4月12日～6月10日，8月5日～12月23日 田中正治郎 吉江英夫

調査面積：3,300㎡

遺跡の立地：扇状地上

時代と時期：弥生時代中期～古墳時代後期

遺跡の特徴：古墳時代前期（4世紀代）の水田跡

・集落跡と洪水後の集落跡

主な検出遺構：溝・土坑（弥生時代中期）

水田跡1，住居跡7，掘立柱建物

跡4，溝・土坑（古墳時代前期）

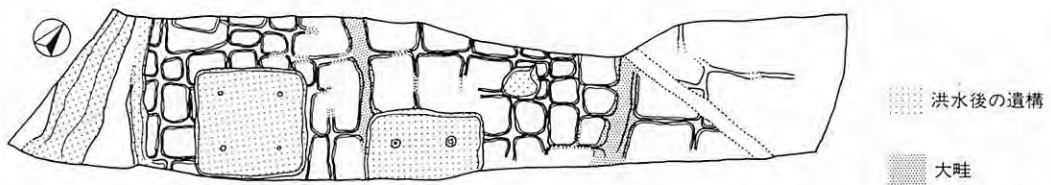
主な出土遺物：弥生時代（中期）土器，古墳時代

前期土器，須恵器，建築部材，杭 第76図 小区画水田の精査風景（W-7C区）



W7・8区は，長野市古野地籍に位置し，JR線の北側に沿う北陸新幹線用地を総延長約330mに渡って調査した。用地内に多くの道路・水路が横切っていたため，調査はW7区を3分割，W8区を2分割して実施した。ここでは桐原の陸橋を中心に地表下約1mに厚い洪水砂層が見られ，遺構検出は砂層上面で行った。W7B区では一辺8mに達する住居址と溝が確認されたが，特筆されるものでは，調査区西端にある溝に，約2.5mの建築部材（柱材）が堰として転用されたようなものがある。また，住居址のすべての柱穴には良好な状態で柱痕が残存しており，SB104は埋没水田の大畦直上に構築している様子が見えた。

本地区の調査では洪水砂下より水田跡が見つかり，水田域と連続する集落域が把握できたことが大きな成果であった。洪水砂は1m近く堆積する場所があり，大規模な砂礫（流路）で水田が破壊されている状況もあった。水田域には水路を伴う大畦が3条あり，小畦による水田一筆は2㎡前後が圧倒的に多く，いわゆる小区画水田であった。千曲川左岸での小区画水田は初めての発見である。時期は水田耕土から出土した高環などから4世紀に比定できる。なお，水田面一面に極めて薄い炭化物が見られ，洪水直前にあったイネ・水田雑草などが想定される。集落域と水田域は大畦と水路により画されており，水路は洪水後に幾度となく改修されていた。集落域でも水田域に近い部分には溝・土器集中が見られる程度の空白域があり，水田と同時期の住居は約40m離れて構築されている状況がわかった。



第77図 W-7B区 古墳時代の遺構 全体図（1：400）

W9地区

所在地：長野市古野

調査担当者：贅田 明 三木雅博

調査期間：平成6年8月1日～12月21日

両角英敏 清水春樹

調査面積：3,220㎡

遺跡の立地：浅川の扇状地上

時代と時期：弥生時代後期, 古墳時代後期, 奈良～平安時代, 中世

遺跡の特徴：弥生・古墳・奈良～平安時代の集落, 中世の土坑

主な検出遺構

	竪穴状遺構	住居址	掘立柱	土坑	溝址	焼土址	性格不明
弥生後期		5	1	49,	2	1	
古墳後期		5		569	31		
奈良		1	6				2
平安		1					1
中世	1						1

主な出土遺物：弥生時代後期の土器, 古墳時代後期・奈良～平安時代の土師器, 須恵器, 転用硯, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 木製品, 種子, 刀子, 中世のかわけ, 青磁, 銭貨



第78図 S D31調査風景

本地区はJR東日本長野工場の西側に位置し, 東西約280m・幅約13mの範囲を南側から①～③区に分けて調査を実施した。

遺構検出面は2面あり, 地表下約1.0mに堆積する黒褐色土層では中世面の, また同1.4m下の褐色土層では弥生時代後期～平安時代面の検出を行った。中世面は地表から浅い為攪乱を受けており, ②区北側～③区で土坑等が確認されたに過ぎない。

①区では, 弥生時代後期および奈良時代の遺構を検出した。弥生時代後期の遺構は調査区の南側に集中し, 住居址の他, 径1.2m前後の土坑が10基程見られた。土坑には, 10個体以上の土器がセットで出土しているものもある。この他, 遺構には伴わないものの, 北陸系の土器が確実に散見される。

北側は8世紀末～9世紀初頭の遺構が多い。調査区北端と中央の東西方向に走る溝に挟まれて, 掘立柱建物跡・土坑等が検出された。このうち北端の溝(SD31・第78図)から墨書土器30点以上を含む多量の土器, 転用硯, 斎串・曲物・材, 多量のクルミ等が出土した事が特筆される。墨書土器は須恵器杯・蓋のみに見られ, 「西」「七」「中」「全」などが判読できた。

②区は, 6～7世紀代の住居址を中心に調査を行った。間仕切り溝?を持つ住居址が1軒検出されている。

③区では, 平安時代～中世の土坑を確認した。旧国鉄車両基地の真向いに位置するため当初は弥生時代後期の遺構が多いと予想されたが, 今年度の調査では, 該期の住居址1軒を検出するに留まった。今後, 周辺地域の調査が期待される。

W-10A区

所在地：長野市中越

調査担当者：河西克造 月原隆爾

調査期間：平成6年6月13日～8月4日

田中正治郎

調査面積：520㎡

遺跡の立地：浅川の扇状地上

時代と時期：弥生時代(後期)～中世

遺跡の特徴：古墳時代(前期)の墓域・中世の集落域

主な検出遺構：周溝墓1、溝、土坑(古墳時代)、
流路(奈良時代)、井戸1(中世)

主な出土遺物：弥生(後期)土器、ミニチュア土器、
古墳時代(前期)土器、須恵器(奈良)、内耳土器、青磁

木製品：人形・斎串

金属製品：管玉・耳飾り

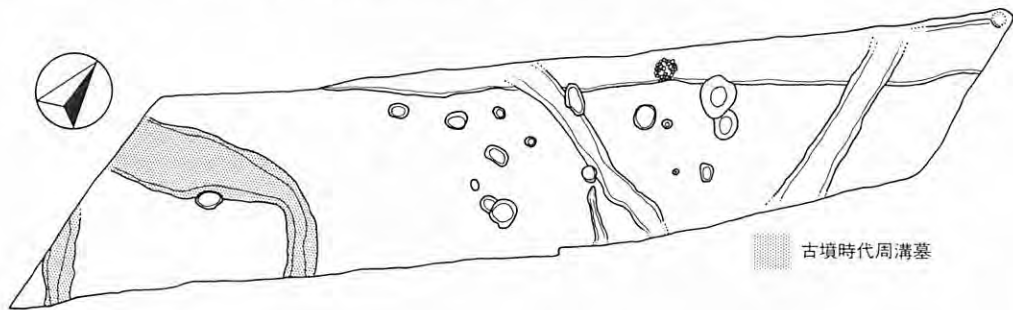
その他：五輪塔・獣骨・鋳型片(?)



第79図 古墳時代周溝墓の調査風景

本地区は中越陸橋(県道荒瀬原線)に近接し、調査区の東方約100mには中越居館(主郭)が位置している。

遺構検出は地表下約1.7mに堆積する黒色土(V層)下面で行い、調査区東隅の最高所より周溝墓が検出された。遺構の半分はJ R側に伸びているため詳細な構造は不明であるが、主体部にブリッジは認められず、溝最大幅4m弱で一辺約11mであったと推定される。溝からは布留式系の二重口縁壺などが出土し、北東隅の一部は砂礫により削られていた。調査区は周溝墓付近から西方に緩やかに傾斜しており、最低部から中世の井戸・溝(堀)が検出された。南北に走る中世の溝からは数個体分の内耳土器と鋳型片(?)が出土し、多量の礫とともに五輪塔(地輪)が廃棄されていた。近接する中越居館との関連性であろう。なお、井戸からは飛雲文のある青磁が出土した。最低部から人形・斎串など多数の木製品が出土したことが特筆され、付近から奈良時代の土器が出土したことから、該期に比定できる。



第80図 W-10A区 全体図(1:400)

W-10B区

所在地：長野市中越

調査担当者：上沼由彦 藤森俊彦

調査期間：平成6年10月17日～12月27日

賛田 明 山崎まゆみ

調査面積：約550㎡（延べ1,270㎡）

主な検出遺構

遺跡の立地：浅川扇状地の扇端部

	竪穴住居跡	溝	土坑	礎石建物跡	その他
弥生	7	7	78		3
奈良		7	90		1
中世		1	21	1	

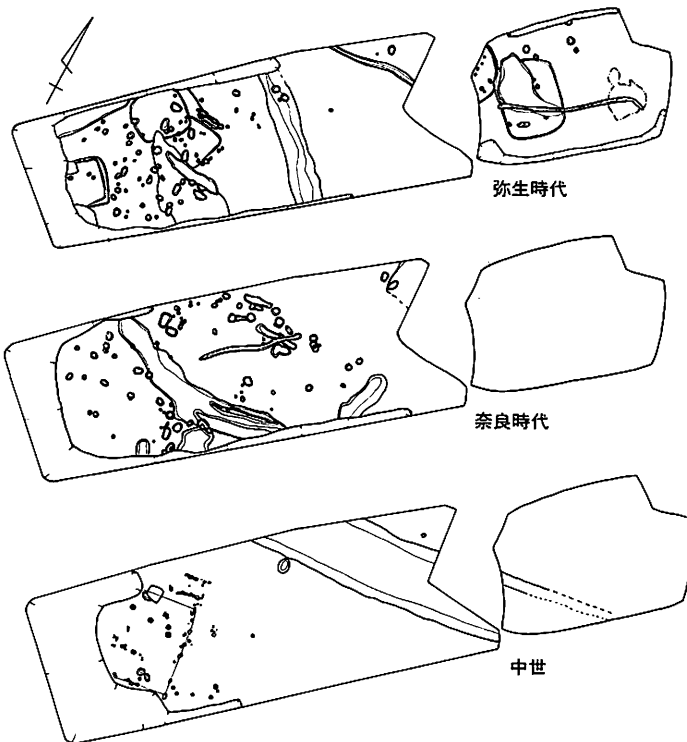
時代と特徴：弥生時代中期～中世の居住域

主な出土遺物：弥生後期土器，土師器，須恵器

砥石，内耳土器，かわらけ

遺跡の概要 W-10B区はJR北長野駅の南西に隣接し，調査前は宅地及び畑地であった。試掘の結果では弥生時代，奈良時代の遺構・遺物が確認され2面調査が必要と考えられていた。ところが本調査で表土剥ぎを行なった際，地表下80cm前後で試掘の段階ではわからなかった中世の整地面が検出されたため急遽この面も調査することになり，弥生時代，奈良時代とあわせて合計3面の調査を行なうことになった。

中世の検出面は耕作その他の攪乱を受けており，明確に捉えられる遺構は少なかったが，整地された面はローム状の黄褐色土をブロック状に含む大変堅緻な面であった。この面に礎石建物跡が1棟確認され，いわゆる“中越居館”に関連する遺構とも思われたが調査区の制約もあり判然としない。遺物は内耳土器片，砥石等が少量出土した程度である。



第81図 W-10B区全体図（1：600）

奈良時代の遺物は須恵器を中心として大量に出土したものの検出された遺構は溝と土坑のみで住居址はついに確認できなかった。中世の整地により破壊を受け削平されてしまったものと考えたい。

弥生時代の遺構としては栗林式の土器集中区が調査区の東北隅から検出されたほか箱清水式の土器棺墓や栗林式，吉田式，箱清水式の住居址が見られた。また，箱清水式の土器集中区の下層から栗林式の住居址と切り合った吉田式の住居が確認されており，栗林式から箱清水式への移行が如実に理解される希有な例であろう。

W-11, 12区：北長野駅

所在地：長野市中越

調査担当者：山中 健、上田 真

調査期間：平成6年6月24日～9月25日（W-11区）

賛田 明、三木雅博

11月29日～12月15日（W-12区）

田中正治郎

調査面積：770㎡

遺跡の立地：扇状地扇端

時代と時期：縄文時代前期～後期，弥生時代中期～後期，古墳時代，古代

遺跡の特徴：縄文時代中期，弥生時代後期～古代の集落

主な出土遺物：縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，灰釉陶器

打製石斧，磨製石斧，石鏃，石錐，磨石，凹石，石皿，鉄剣（弥生）

本地区はJR北長野駅構内に位置し，浅川扇状地扇端部にあたる。調査区全域にわたって駅舎及び駅付属施設の下になっていたため地表下1.5m付近まで整地その他の基礎工事の影響を受けており，特に上層では攪乱の中に地山が島状に残っている状態であった。地形的にはW-11区内で段丘状の高まりが認められW-12区へと続いており，ここに縄文時代の遺構が残されていた。また低い部分では浅川の押し出しと考えられる砂礫層が調査区を貫いており，高まりの部分は古くから浅川の氾濫を免れた地点であったようである。

縄文時代の遺構は高まりの部分にのみ分布しており，埋甕・溝・土坑等が調査されたものの明確な住居址，炉址等は確認できなかった。埋甕には正位・逆位が認められ，縄文中期後半の加曾利E系・圧痕隆帯文系・大木系等の土器が使用されていたが，同一検出面で炉址・床面等が検出されなかったことから，これらは全て屋外埋甕と考えたい。また縄文時代ではあまり例のない溝址を確認しており，覆土から中期末の土器片とともに打製石斧，石鏃，磨石，凹石等が出土している。調査面積に比して出土した土器，石器はかなりの量にのぼり，この地域に大規模な集落が存在することを予想させた。

弥生時代の遺構もほぼ縄文時代遺構の分布域と重なり，住居址のほか土器棺墓（壺+壺）が確認され，高まりの部分で調査された溝からは大量の箱清水式土器が出土した。

古墳時代の遺構は高まりの部分～低い部分に住居址が確認され，最も低い部分からは水田状の土層も観察された。また8号住居址の壁付近から鉄剣が出土しているがこの住居址のものは断定できない。

古代の遺構は調査区上層に多数存在していたようであるが前述の攪乱のため低い部分から断片的にししか検出されず，住居址2軒，鍛冶炉1基を調査したにすぎない。

本地区周辺には縄文時代から古代，中世に至る遺構が濃密に分布していると思われ，今後市街地での綿密な調査が期待される。



第82図 調査状況

W-13, 14区：辰巳池

所在地：長野市吉田3丁目2番地ほか

調査期間：平成6年9月4日～12月22日

調査担当者：藤原直人・西村政和

調査面積：3,490㎡

遺跡の立地：浅川扇状地の扇央

遺跡の特徴：弥生時代中期・古墳時代後期の集落址

主な検出遺構

主な出土遺物

時期	遺構	竪穴住居址	溝	土坑
弥生		5	3	32
古墳		2	4	

土器：弥生中期土器，土師器，須恵器

石器：凹石，磨石，砥石

その他：土製匙，紡錘車

遺跡の概要 浅川扇状地は飯綱山を水源とする浅川によって形成され，本地区はその扇央部付近，標高361～364mの地点にある。

本地区は試掘の結果，3枚の遺構確認面の存在が予想されたが，第一面では遺物の出土量はかなりになったが，遺構は古墳時代の溝状遺構が1条検出できたに留まった。

第二面においても明確な遺構は認められず，大量の弥生中期土器片を伴う包含層により遺構確認は困難を極めた。第二面では古墳時代頃と考えられる自然流路と溝状遺構1条，土坑1基を確認した。

第三面の遺構検出作業では，第三面に至る前（黒色土中）で古墳時代後期のSB02・04が確認できた。第二面から第三面に掘り下げる過程では部分的に大量の土器を出土する区域があったため，移植ごて等による掘り下げを試み，弥生時代中期の竪穴住居址SB01・05・06・07を確認した。SB01と07は典型的な弥生中期の住居址形態で，楕円形を呈し，床面では柱穴，炉址を確認できた。特にSB07は覆土中層以上に夥しい土器の破片を残していた。そのあり方は住居址が埋まる，あるいは埋められる過程で何らかの土器の廃棄行為がなされたことを意味している様である。また，この住居址は柱穴の配列から建て替えされたことも考えられるが，特筆すべきは炉を中心にして三方に間仕切り状の細い溝が走っていたことである。



第83図 調査状況



第84図 SB07

E-8・9区

所在地：長野市上駒沢字寺浦1031ほか 調査担当者：綿田弘実 山崎光顕 山中 健

調査期間：平成6年4月11日～平成7年1月31日 上田 真 両角英敏 清水春樹

調査面積：E-8区 270㎡ E-9区 1,350㎡

時代と特徴：弥生中期の遺物包含層 平安時代の集落 中世後半の溝で区画された集落

主な検出遺構

近世：溝1

中世：掘立柱建物5，柵3，溝9，井戸25

火葬施設・墓3，土坑476，鍛冶址1

平安：住居1，溝7？

弥生中期：土坑1，土器集中1

主な出土遺物

土器・陶磁器：弥生時代土器 土師器 須恵

器 灰・緑釉陶器 内耳鍋 かわら

け 青磁 珠洲・瀬戸美濃系陶器

石製品：石臼 石鉢 凹石 砥石 五輪塔

金属製品：煙管 小柄 銭貨

木製品：曲物 刳物 漆椀 下駄 鋤 糸車

その他：瓦 埴塙 火葬骨 獣骨 種子

E-8・9区は浅川扇状地の北東扇端部にあたり標高340m前後で、現況は宅地、果樹園であった。両地区とも東西2地点に分かれ、E-8区は宅地をはさんだ部分調査となった。いずれの調査区も中世遺構検出面が2面ないし3面あり、時期を違えて遺構も異なっている。

E-8区

西区は約150㎡を調査し柵跡、溝、井戸、土坑が検出された。土坑は114基を数え、そのうち第2面の8基が井戸であった。井戸はすべて素掘りで底部が重機でしか確認できないほど深い。溝は4条確認され、うち2条には柵跡が並行している。これらは区画溝であろう。出土遺物は比較的少なかったが、土坑や溝から内耳鍋やかかわらけ等の小破片、井戸からは曲物や五輪塔、木材等が出土した。東区は約120㎡を調査し溝、井戸、土坑等が検出された。土坑は井戸を含めて80基あり柱痕や柱の根本が残るものが幾つかあり、掘立柱建物が何棟か推定される。井戸は6基確認したが、いずれも素掘りで石組はなかった。井戸を切る土坑からは曲物が2点出土した。溝は2条あり調査区北端で検出したものは深さ1m以上になると思われ、東西方向に走るがE-9区では確認されていない。青磁やかかわらけ等の出土遺物から本区の遺構の時期は中世後半と思われる。



第85図 E-8・9区全景（上方は現浅川）



第86図 E-8東区第1面

E-9区

矢板を打設した地区を西区，その北東側を東区と呼んだ。西区は3面からなり，第1面：中世1，第2面：中世2，第3面中世3・平安の各時代の遺構を調査した。第1面は地表下約50cm，第3面は約1.6mである。後述の中世の大溝に区切られた部分は平安時代以降浅川の堆積によりわずかな高まりとなっており，多数の遺構が検出された。この高まりの範囲外は低湿地だったようである。東区は西区の第2・3面に相当する面を調査した。西区第3面の下層，地表下約2mの地点からは弥生中期前半を主体とする土器片を比較的多く採集した。

中世遺構群は東西・南北の大溝に区画された内側から重層的に検出された。西区の南北大溝(SD01)は幅5m・深さ3m以上の箱築研堀に近い形で，下層から16世紀代の陶磁器，内耳鍋のほか，冒頭に記した多量の石製品，木製品，獣骨，種子等を検出した。種子はモモが多く，ピート層からはクルミ，イネ，ソバ？，ウリ，ヒョウタン等が採集された。また埋土上層からは近世後期の陶磁器がまとめて出土した。東区の東西大溝(SD06)は南側の長野市埋蔵文化財センター調査地点から直角に方向を変えて本区にかかる。幅約7m，深さ約2.2mで遺物は少ないが断面観察では両側に土塁を伴っており，底部でも幅4m程もある。この2条の大溝に区切られた範囲では第1・2面でピット群(掘立柱建物?)や小溝，鍛冶炉，茶毘跡と近接した火葬墓，畝状遺構(畑?)等，第3面から柱穴に礎板を置き，縁がめぐる大規模な掘立柱建物跡，およびこれに切られる井戸群等が検出された。遺物としてはピット群には16世紀代の陶磁器，銭貨，井戸には中世前半のかわらけ等が伴う。調査面が異なっても掘立柱建物，溝等の方向は座標北から10度ほど東に傾くことは共通している。E-8区を含め，調査区内の溝に区画された集落は中世の方形館というより近世の計画村落の可能性が高い。

西区の第3面から中世遺構に切られた平安時代の住居址が検出され，10世紀前半の土器とともに緑釉陶器，瓦が出土した。ほかに土器をとまなう大小の溝があるが自然流路かどうかははっきりしない。この下層には弥生・古墳時代土器を包含する黒色粘土層があるが，東区では希薄となる。



第87図 E-9区SD01調査



第88図 E-9西区第2面



第89図 SD06調査状況

E-3区

所在地：長野市富竹

調査担当者：山中 健，上田 真

調査期間：平成6年9月5日～10月22日

調査面積：800㎡

遺跡の立地：扇状地扇端

主な検出遺構：溝，井戸，土坑

時代と時期：中世

主な出土遺物：弥生時代土器，すり鉢

本地区は試掘時点で表土直下に石組井戸が検出され、珠洲系すり鉢片が採集されたことから昨年度調査のE-1区のような中世集落の存在が予想された。しかし、本調査では前述の井戸以外に中世遺構は検出されず、新しい時期の遺構が調査されたのみであった。検出面からは弥生時代中期の土器も少量出土しているが、これらは砂礫層の上面から得られており浅川の押し出しにともなう流入遺物と考えられる。中世の井戸が集落を遠く離れた地点に存在するとは考えにくく、井戸の掘り込みもさほど深くないことから、本地区は構造改善等により削平を受けた結果、井戸以外の遺構は消滅してしまったものと思われる。

E-5区

所在地：長野市上駒沢

調査担当者：山中 健，上田 真

調査期間：平成6年10月25日～11月22日

調査面積：400㎡

遺跡の立地：扇状地扇端

主な検出遺構：溝，環濠？ 土坑

時代と時期：弥生時代中期

主な出土遺物：弥生中期土器

本地区は試掘時に表土付近から少量の弥生中期土器が採集され、この時期の集落の存在が予想された。ところが本調査では溝、土坑等から多少土器が出土したものの住居址等は検出されず集落域ではないとも思われた。しかし調査終了まぎわになって調査区北端部で堀状の大溝を検出し、この溝の底部からかなりの量の弥生中期土器が出土したため環濠ではないかとの期待をいだかせた。用地の制限から大溝の一部が調査できずに過ぎないが、環状に湾曲する状況が観察され、いよいよ環濠との可能性がたかまったものの、それ以上は何とも言えない状態である。本地区も農地の構造改善により、E-3区と同様に掘り込みの浅い遺構は削平されてしまった可能性が高い。

10 さんさい 三才遺跡

所在地：長野市上駒沢

調査担当者：山中 健，上田 真

調査期間：平成6年8月1日～8月11日

調査面積：340㎡

三才遺跡の試掘は北陸新幹線が駒沢川を跨ぐ地点から北東へ約200mの区間を8月1日から8月11日まで9日間行った。その結果、遺構は検出できなかったものの地表下約4mの砂礫層から五輪塔が出土した。これらは流木と共に出土しており、かつて駒沢川等の氾濫によって運ばれたものと思われ、本調査の必要はないと判断した。

11 西光寺(堂平)遺跡

所在地：上水内郡小川村大字小根山坂之瀬

調査担当者：市川隆之 出河裕典 白居直之 西嶋 力 西山克己

調査期間：平成6年4月13日～4月20日 調査面積：200㎡

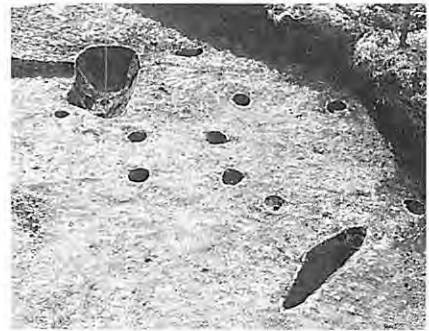
遺跡の立地：中山山地に属する小山を東流する土尻川の下位河岸段丘

検出遺構：縄文時代中期の陥し穴1基，弥生時代後期の土坑・小ピット17基，近世のピット1基

出土遺物：縄文中期・弥生中期～後期土器，内耳土器，近世陶磁器，磨石

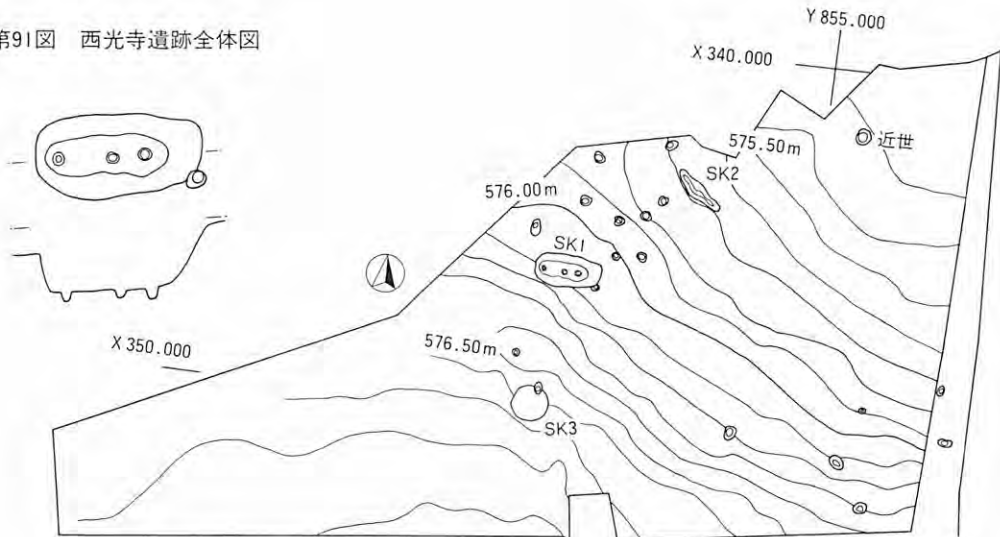
西光寺(堂平)遺跡は，県道長野大町線の改良工事に先立ち，埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的として発掘調査が実施された。土尻川を北に望む河岸段丘上に立地する本遺跡は，下位段丘と約15mの比高差をもち，緩やかに北に傾斜する。約40cmの表土下に，弥生中期・後期の土器片を主体とする黒褐色粘土層があり，この下層から遺構が検出された。検出された遺構は，遺物をあまり伴わない土坑，ピット群であったが，埋土の状況等から大半は弥生時代に属するものと判断した。

SK1は陥し穴であり，1.75×0.9mの楕円形で内部には3個の小ピットがある。縄文中期中葉の土器片が下層から出土した。弥生時代の土坑・ピット群は標高576.6～575.6mの比高差1mの間に斜面を取り巻く状況で検出された。これらピット群が建物址になる可能性は薄く，遺構の性格は判断しがたい。弥生時代の遺物は，竹管による沈線・刺突文様が残された中期土器，楡描文と刺突文様が残された後期土器がある。



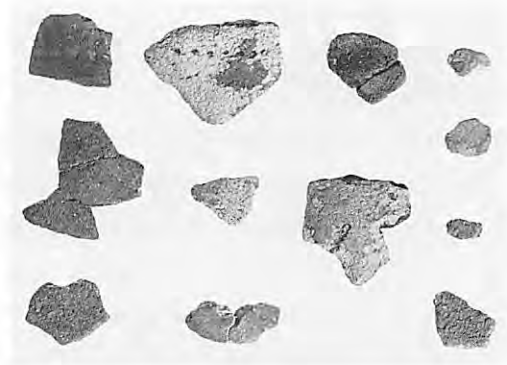
第90図 西光寺遺跡ピット群

第91図 西光寺遺跡全体図





第92図 西光寺遺跡出土土器



2) 整理作業の概要

発掘調査の延長としての冬期間の整理作業をのぞき、整理課が担当した整理作業について取り上げる。

a 石川条里遺跡（長野自動車道関連）

担当 白居直之 市川隆之 出河裕典

白沢勝彦 山本 浩（保存処理） 西嶋 力（写真）

水田部より出土した木製品は、実測・写真撮影を終了する。PEG処理は継続して実施中。微高地部分から出土した多量の古墳時代前期の土器群は、実測をほぼ終了し、復元作業に入り、写真撮影の準備中。

b 篠ノ井遺跡（長野自動車道関連）

担当 西山克己 青木一男 広田和穂 宮下裕治 徳永哲秀

白沢勝彦 山本 浩（保存処理） 西嶋 力（写真）

弥生時代から古墳時代前期、古代土器の実測を中心に行い、ほぼ終了する。写真撮影についても一部をのぞき完了。金属製品については、保存処理が終了。

c 松原遺跡（上信越自動車道関連）

担当 上田典男 増村香子 西嶋洋子 山極 充

白沢勝彦 山本 浩（保存処理）

縄文時代の土器については、接合・復元を実施する。弥生時代中期の4000箱をこえる土器については、注記を終了。金属器については、保存処理を実施中。



第93図 整理状況

(4) 中野調査事務所

発掘調査の概要

調査遺跡数：15遺跡 87,100㎡

調査面積：上信越自動車道関係 中野市牛出遺跡 (3,500㎡)，豊田村葦山遺跡 (2,000㎡)，風呂屋遺跡 (4,000㎡)，飛山遺跡 (1,000㎡)，大谷地遺跡 (4,800㎡)，八号堤遺跡 (3,000㎡)，信濃町七ツ栗遺跡 (700㎡)，日向林B遺跡 (5,000㎡)，大平B遺跡 (4,000㎡)，針ノ木遺跡 (4,000㎡)，裏の山遺跡 (8,500㎡)，東裏遺跡 (4,000㎡)，上ノ原遺跡 (3,500㎡)

上信越自動車道・国道18号野尻バイパス関係 貫ノ木遺跡 (26,600㎡)，西岡A遺跡 (12,500㎡)

調査期間：平成6年4月11日～12月15日

上信越自動車道関連の調査は、中野インターチェンジ以北の中野市・豊田村および信濃町において実施された。また、国道関連として信濃町で、上信越道関連の調査地に隣接して調査が行われた。昨年度に続き、野尻湖周辺での大規模調査が継続されたことにより、とくに旧石器時代の重要な遺構・遺物の発見が相次いだ。また、これら信濃町内の遺跡では、縄文時代早期から前期・平安時代の資料も多い。また、豊田村の縄文時代中期の土器や古墳の発見も注目されよう。

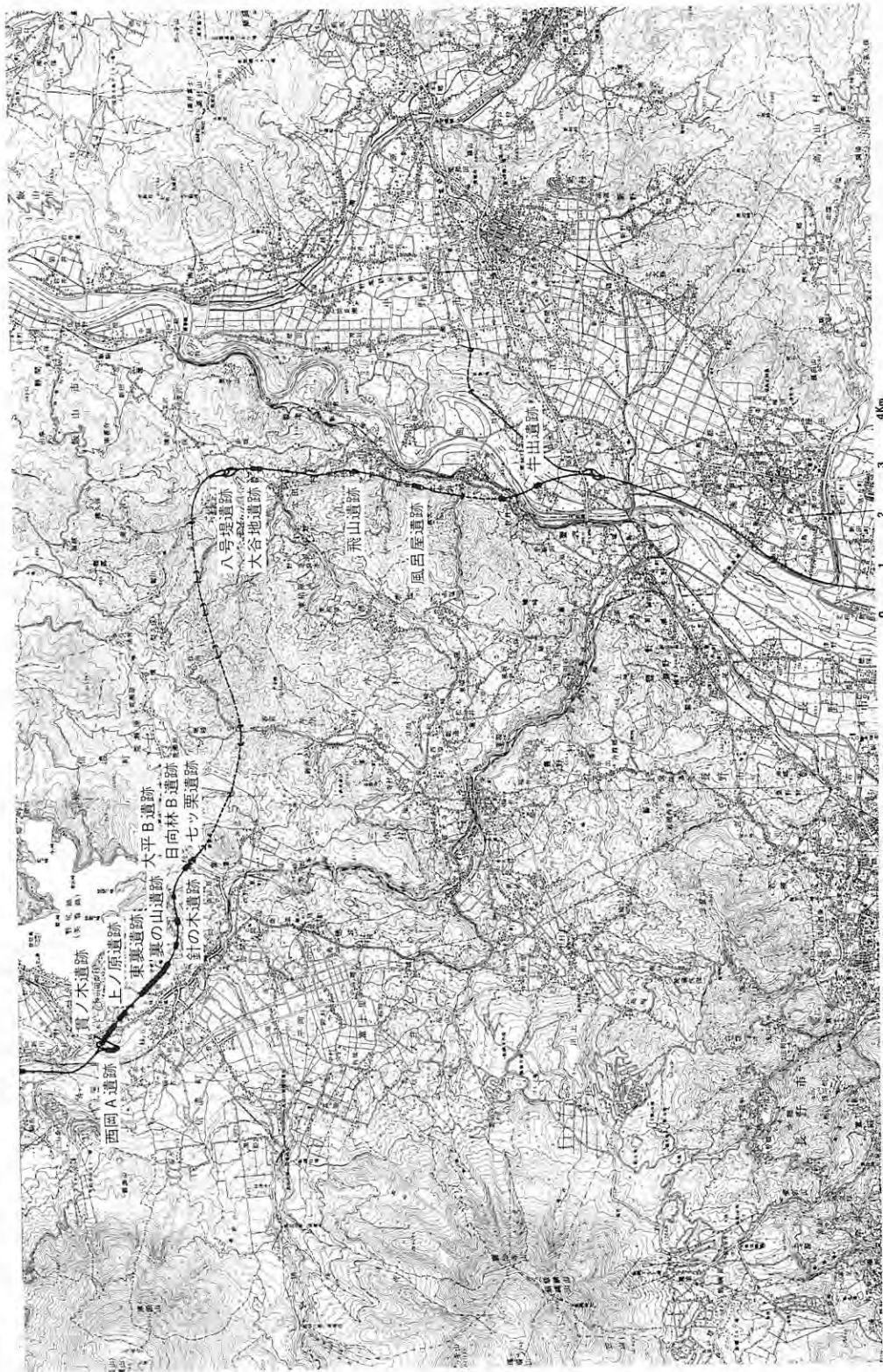
旧石器時代では、貫ノ木・西岡A・上ノ原・裏の山・大平B遺跡などにおいて、後期旧石器時代全般にわたる多量の遺物が出土した。なかでも貫ノ木遺跡における多数の砥石の発見・西岡A遺跡における横長刮片を主体とするナイフ形石器群・裏の山遺跡における多数のブロック群の全域調査などは、今後の研究に重要な位置を占めるであろう。また、5年度出土の日向林B遺跡の石斧3本について実施していた分析の結果、残留脂肪酸はナウマンゾウ・ニホンシカなどの可能性が高いとされた。石器の用途・遺跡の性格について考えるに重要な視点を提供した。平成5年度および7年度の資料とあわせて、野尻湖遺跡群の把握・地域編年への見通しが立ちつつあるといえよう。

縄文時代では、信濃町で早期から前期の資料が多い。日向林B遺跡では表裏縄文土器・諸磯式土器が多量に出土した。旧石器時代を中心とする他の遺跡でも押型文土器などを出土した遺物が多い。豊田村の遺跡では、周辺で資料の少ない中期の資料を得た。

平安時代の小規模集落跡が、貫ノ木・東裏・針ノ木・七ツ栗・風呂屋で調査された。ほぼ同時期のものであり、この時期の山間部の様相を把握するに重要である。

整理作業の概要

通常の冬期整理のほか、中野インター以南の窯跡群を中心として、報告書刊行に向けて整理作業を実施した。奈良時代須恵器窯跡群の実態があきらかにされつつある。これらは平成8年度報告書刊行予定である。



地図4 中野調査事務所関係調査遺跡 (1:100 000)

1 ^{うしま}牛出遺跡

所在地：中野市大字牛出字北原191ほか

調査期間：平成6年9月12日～10月24日

調査面積：3,500m²

遺跡の立地：高丘丘陵と千曲川の間に開けた自然堤防と後背地

遺跡の特徴：中世の掘立柱建物群

時代と時期：中世後期

検出遺構：掘立柱建物跡 13棟 井戸跡 12基

出土遺物：石製鉢，土師質土器，内耳土器，青磁

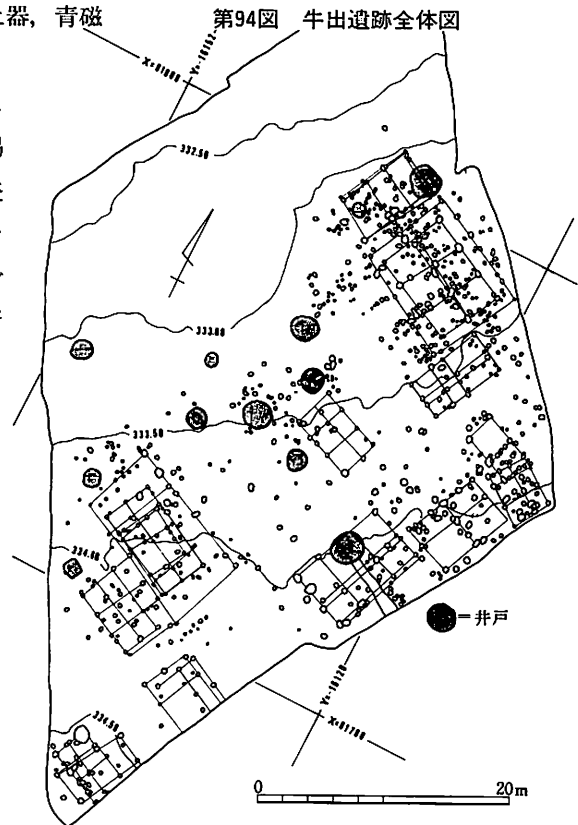
本遺跡は、大正末期の圃場整理事業により全面的に削平され、遺物包含層は、既に失われていた。表土を剥いだ段階で、黄褐色土に多数の柱穴跡を検出した。また調査区中央部で井戸跡12基を検出した。大きなものは直径2.5m近くあり、小さなものでも直径1mあった。調査の最後に重機で断ち割ったところ、深さ4m以上にも達し、底部から豊富な湧水が認められた。また、掘立柱建物は、高丘丘陵に沿う方向で建てられ、中にはかなりの規模の建物があったと思われる。約1,000基もの柱穴跡から、何回かの建て替えが推測される。建物跡と井戸跡との切り合いも見られ、井戸も何時期かにわたると推定される。柱穴跡より検出された青磁片等から、本遺跡は中世後期のものと思われる。

調査担当者：酒井健次

石原州一

中島英子

前田利彦



2 ^{ならやま}萑山遺跡

所在地：下水内郡豊田村大字上今井字萑山273ほか

調査期間：平成6年4月11日～4月15日

調査面積：2,000m²

遺跡の立地：千曲川左岸の丘陵斜面

中世の蔵骨器が出土したとの伝承があったが、水田の開墾、リンゴ畑の転作により斜面が掘削され、縄文土器・土師器の細片が数点出土したのみにとどまった。

調査担当者：酒井健次

石原州一

前田利彦

3 風呂屋遺跡

所在地：下水内郡豊田村大字上今井字風呂屋3012-1ほか

調査担当者：酒井健次

調査期間：平成6年6月22日～9月30日

石原州一

調査面積：4,000㎡

前田利彦

遺跡の立地：山麓裾部の凹地

時代と時期：縄文・古墳・平安時代

検出遺構：古墳1基（終末期）・竪穴住居跡1棟（平安）

出土遺物：縄文土器（絡条体圧痕文・諸磯C・勝坂・五領ケ台・新保・新崎式）、土製品（土偶、土製円盤・ハート形土製品）、石器（打製石斧・磨製石斧・石鏃・凹石・すり石・石皿・横刃型石器）、須恵器・土師器・灰釉陶器・鉄製品

風呂屋遺跡は、米山山塊の裾部と丘陵にはさまれた凹地に立地し、北から南へゆるやかに傾斜している。山の斜面は、現在、地すべり地帯に指定されており、表土のすぐ下は地すべりによってもたらされた黄褐色土が、遺物包含層上に堆積している。

縄文時代 調査区中央部の西端から東端にかけて、幅10mほどの自然流路が確認され、この流路の中から遺物がまとめて出土した。早期の絡条体圧痕文や中期初頭の五領ケ台・勝坂・阿玉台の関東系の土器、新保・新崎の北陸系の土器が多数出土した。しかし、遺構は確認されず、土器も断片的で復原できるものはなかった。当地域で中期初頭の土器がまとめて出土した例は、千曲川をはさんで対岸の姥ヶ沢遺跡（中野市）、北へ6km離れた深沢遺跡（飯山市）がある。風呂屋遺跡から出土した土器は、これらの遺跡の土器と極めて類似しており、当地域の土器研究に貴重な資料となろう。土偶も30点ほど出土し、この中には姥ヶ沢遺跡から出土した土偶に酷似したものもある。また、石器は打製石斧が多く、120本を数える。

古墳時代 調査区の北東部、自然流路の上層から横穴式石室をもつ古墳が検出された。盛土や蓋石は既になかったが、下半部の保存状態は良好である。石室の周囲には、人頭大の石を円形に並べ、直径約12mの円墳であることが確認された。玄室は長さ2.8m、最大幅は1.2mを測る。羨道部は長さ4.5mで開口部に向かって大きく開いている。玄室からは、須恵器の坏や土師器の小型壺・鉄製品が出土し、7世紀末から8世紀初頭の築造と推定される。なお、当古墳は豊田村教育委員会によって、替佐城跡公園に移転・復原された。



第95図 縄文土器出土状況



第96図 古墳

4 とびやま 飛山遺跡

所在地：下水内郡豊田村大字豊津字飛山2178-5ほか

調査担当者：酒井健次

調査期間：平成6年10月31日～12月15日

前田利彦

調査面積：1,000㎡

遺跡の立地：千曲川西岸の山地より張り出した尾根上平坦地

時代と時期：中世

遺跡の特徴：中世積石塚

主な検出遺物：銭貨（宋銭，明銭），須恵器片

本遺跡は千曲川西岸の山地の尾根上に位置する、直径約10mの円形の盛土遺構である。今回の調査により盛土の中にはほぼ四方に面する一辺約6m、高さ約1mの自然石を用いた方形の石積が確認され、古墳ではなく封土を伴う中世の積石遺構であることが明らかになった。積石は何段かに分けて積み上げられたものと思われるが、木の根等による攪乱が著しく構築時の規則性は認められなかった。遺物は盛土上部と積石下の地山面上から宋銭・明銭など中世の銭貨が出土し、盛土中には須恵器片がみられるが、全体的に量は少ない。またこの石積の南側に隣接して楕円形の輪郭を形造る配石遺構が確認されたが、遺構内からは遺物は検出されなかった。これらの状況から中世の祭祀遺構と思われるが、類例が少なく遺構の性格については今後の課題である。



第97図 調査前風景



第98図 積石出土状況

5 おおやじ 大谷地遺跡

所在地：下水内郡豊田村大字穴田字稲沢2680ほか

調査担当者：酒井健次

調査期間：平成6年4月18日～6月21日

石原州一

調査面積：4,800㎡

前田利彦

遺跡の立地：赤坂丘陵から西にのびる尾根

時代と時期：縄文時代早期・前期・中期初頭

遺跡の特徴：縄文時代の土器・石器，平安時代の土器を含む流路

出土遺物：縄文土器（絡状体圧痕文・羽状縄文・縄文・無文），石器（石鏃・凹石・すり石），土師器・須恵器・灰釉陶器



表土のすぐ下が，海底面の隆起による砂層となり，遺物は調査区の中央部から南にのびる自然流路から縄文時代の土器・石器，平安時代の土師器が出土した。縄文土器は羽状縄文・縄文・無文などで，早期から前期・中期のものと推定される。石器は，石鏃・凹石・すり石などである。

第99図 遺物出土状況

6 はちごうつつみ 八号堤遺跡

所在地：下水内郡豊田村大字穴田字稲沢2670-1ほか

調査担当者：酒井健次

調査期間：平成6年4月18日～6月21日

石原州一

調査面積：3,000㎡

前田利彦

遺跡の立地：赤坂丘陵から西にのびる尾根と大谷地遺跡に隣接する谷部

遺跡の特徴：平安時代の土器を含む流路

出土遺物：土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁

八号堤遺跡は，谷をはさんで大谷地遺跡の北に，表土の下は海底面の隆起による砂層となり，遺物はわずかに堆積した黑色土層から土師器が出土した。大谷地遺跡と隣接する谷部は，黑色土層が斜面に沿って厚く堆積し，土師器や須恵器，灰釉陶器が多数出土した。しかし，黑色土層も自然の流路と考えられ，遺構は確認されなかった。調査区の南の八号溜池の周辺からは，縄文土器や凹石，須恵器などが多数表面採集され，遺跡の中心はこの付近と推定される。



第100図 調査風景（尾根部）

7 ^{ななつぐり}七ツ栗遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字富濃字七ツ栗2351-3 他

調査担当者：谷 和隆

調査期間：平成6年10月3日～10月31日

常長虎徹

調査面積：約800㎡

竹内聖彦

遺跡の立地：段丘裾部・標高約650m

時代と時期：先土器時代後半・縄文時代早期～中期・弥生時代

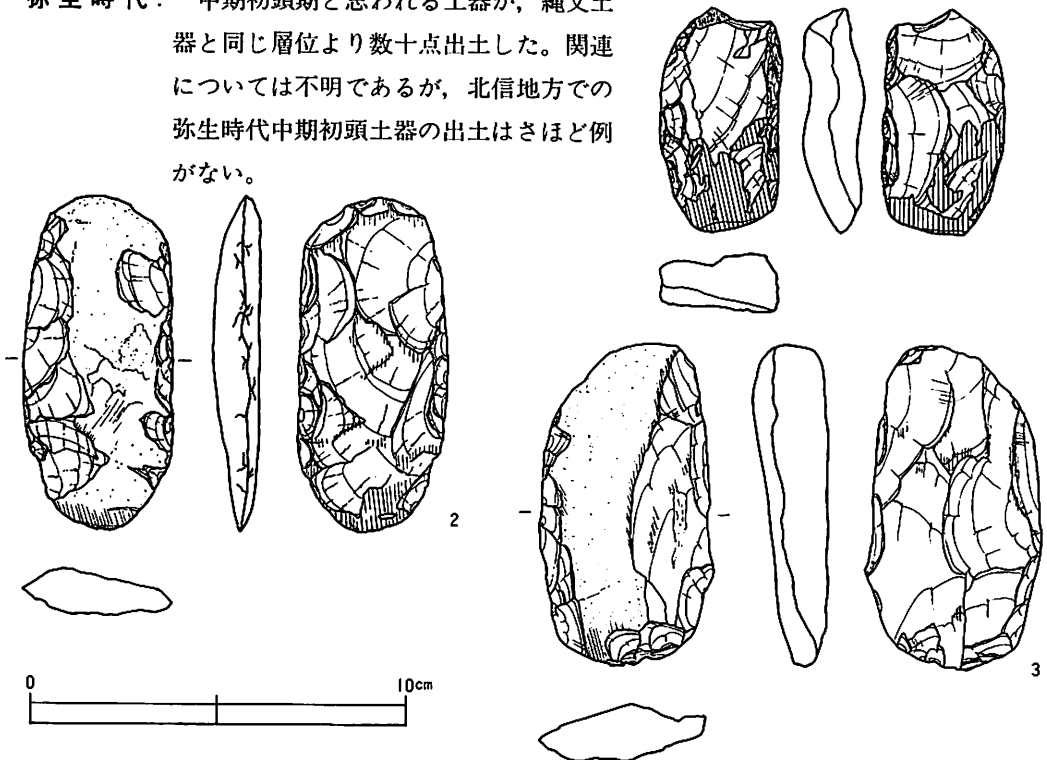
基本層序：日向林B遺跡とほぼ対比できる。

先土器時代： ブロックが2基ほど検出され石刃、彫器、ナイフ形石器（杉久保系）等が出土した。特に、石刃がまとまって出土したのは興味深い。石材は安山岩が圧倒的に多い。礫群も1基調査区内北西部より検出されている。

縄文時代： 縄文土器には表裏縄文・条痕文系の早期と羽状縄文・半截竹管文・無文の前期、及び中期の土器が出土している。

5基の陥し穴は形態の類似性から同時期存在と考えられる。昨年度も同じ形態、形状で6基検出されている。等高線の垂直方向に直線的に配列する。平面形は、120cm×80cm程の隅丸長方形で深さは検出面より約1～1.5m、底の中央に1カ所の柱痕が残っている。

弥生時代： 中期初頭期と思われる土器が、縄文土器と同じ層位より数十点出土した。関連については不明であるが、北信地方での弥生時代中期初頭土器の出土はさほど例がない。



第101図 日向林B遺跡出土脂肪酸分析をした石斧

8 ひなたばやし
日向林B遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字富濃字日向林2553-5他
調査期間：平成6年6月20日～12月9日
調査面積：約12,000㎡
遺跡の立地：旧湖（湿地）に面する丘陵頂部及び南側裾部
時代と時期：先土器時代・縄文時代
遺跡の特徴：先土器時代の環状ブロック群・縄文時代早期の土器群
主な検出遺物：ナイフ形石器・槍先形尖頭器・台形様石器
縄文土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙

昨年度は丘陵南側裾部の先土器時代の環状ブロック群から石斧が41点出土して注目された遺跡である。今年度は丘陵頂部の調査を行い先土器時代のブロックと縄文土器が発見された。

先土器時代 7ヶ所のブロックが発見され、ナイフ形石器7点、槍先形尖頭器4点、台形様石器3点、削器4点、搔器2点、揉錐器2点、彫器1点、局部磨製石斧1点が出土している。層序が薄く、ブロック内からの製品の出土が少ないことからブロック個々の時期や性格はつかみきれていない。しかし、台形様石器や槍先形尖頭器の存在から複数の時期が存在することは事実である。また、昨年度調査区との関係は台形様石器や局部磨製石斧が存在するものの石器形態が異なることから、直接関連するものとは思えない。

縄文時代 13,000点弱の土器片のほか、石器、礫も合わせて20,000点以上出土している。土器片は表裏縄文、条痕文、竹管文が量的に安定している。表裏縄文は最も数が多く、遺跡の広い範囲にわたって散漫に散っている。裏面の施文は口縁に1条のみ施されるもののみであり、条痕文は胴部上半に絡条体圧痕が見られ底部は尖る。竹管文は諸磯a式土器並行期と思われるものが多い。そのほかに数個体分の押型土器が発見されており、山形文、楕円文の土器が見られる。石器は石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、スクレイパー、くぼみ石、すり石、敲き石、石皿などが存在する。石鏃は小形で平面形が三角形を呈するものが多く、表裏縄文に伴うものが中心になると思われる。打製石斧、磨製石斧、石匙は前期の竹管文にともなうものであろう。また、有茎尖頭器などの石器も出土することから、今後草創期の土器が発見される可能性は高い。

土坑墓状の遺構が4基検出されている、その他に袋状の小竪穴2基が発見されている。時期は覆土中のため決定的ではないが、遺構内から発見される土器から表裏縄文の時期と思われる。他に礫集中が9ヶ所ある。集石といえるほどのまとまりはないが、焼け礫が集まっているものである。明確に伴う土器がないために時期はわからない。

残留脂肪酸分析の結果について 昨年度調査区より出土した3点の石斧について(株)ズコーシャに委託していた分析の結果がでた。第101図1と2の石斧からナウマンゾウ、3の石斧からニホンジカの脂肪酸が検出され、石斧がそれら動物の解体もしくは狩猟に用いられていたことが証明された。

9 おおだいら
大平B遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字富濃字大平3960-53他

担当者：谷 和隆

調査期間：平成6年4月18日～6月17日

常長虎徹

調査面積：4,000㎡

竹内聖彦

遺跡の立地：北向きの尾根上の南東部・標高703m前後

時代と時期：先土器時代・縄文時代・弥生時代

遺跡の特徴：先土器時代のブロック・縄文時代の土器群

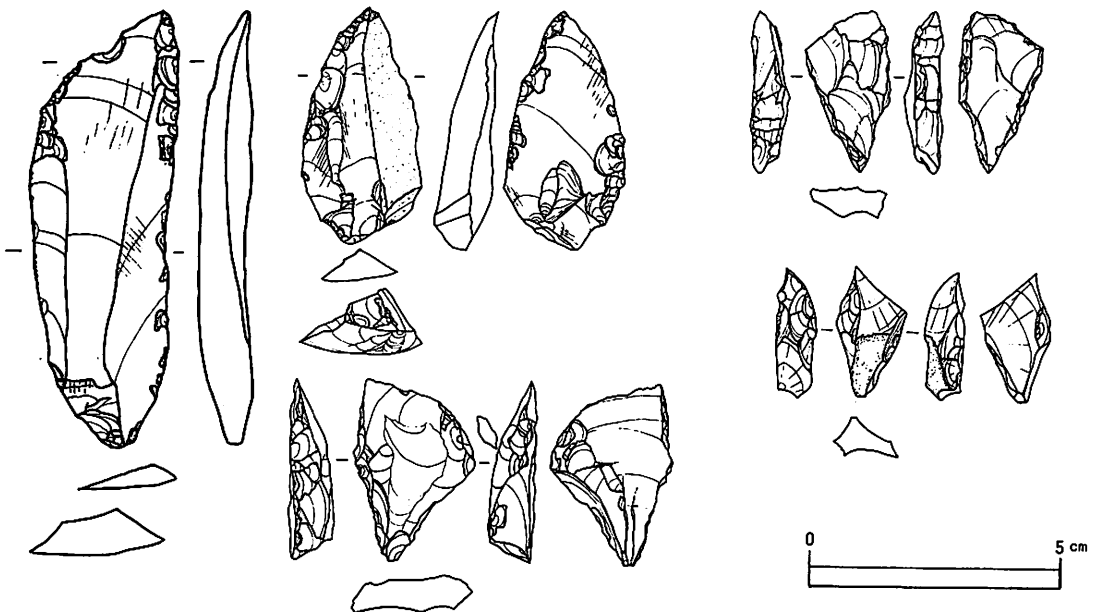
主な検出遺物：ナイフ形石器・搔器・石斧・縄文土器・弥生土器

先土器時代 遺物総数は約950点でナイフ形石器を中心とする石器群と神子柴系の石斧を中心とする石器群の2時期が存在する。前者はナイフ形石器15点、搔器12点、削器4点が5ヶ所のブロックから出土している。ナイフ形石器は不定形な剥片を素材として、急角度のブランディングを施す小形のもので石材にはチャート、黒曜石が用いられる。搔器は分厚い寸詰まりの剥片を素材としたもので平面は円形を呈する。また、礫群も1基検出されている。

神子柴系の石斧を中心とする石器群は3ヶ所のブロックが存在し、石斧2点以外には明確な器種が存在しない。1点には研磨が認められ刃部欠損後の調整が確認できる。もう1点は未製品と思われ周辺出土の剥片と接合する。石材は2点とも珪質凝灰岩である。

縄文時代 貝殻復縁文、羽状縄文、竹管文の土器片が約500点出土している。土器集中は3ヶ所確認できるが遺構は存在しないため、その内容は不明である。

弥生時代 直径約5mの土器集中1ヶ所から、後期の土器片が2～3個体分出土しているが遺構は確認できず、遺跡の性格はつかめない。



第102図 大平B遺跡出土のナイフ形石器

10 はりのき 針ノ木遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字富濃字針ノ木4065番地ほか

調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成6年10月3日～11月4日

遺跡の立地：小規模な盆地

調査面積：4,000㎡

時代と時期：平安時代

遺跡の特徴：平安時代の小規模集落

主な検出遺構

時代	遺構
平安時代	竪穴住居跡4・土坑4 ・火床2

主な出土遺物

土器：土師器・須恵器・灰釉陶器

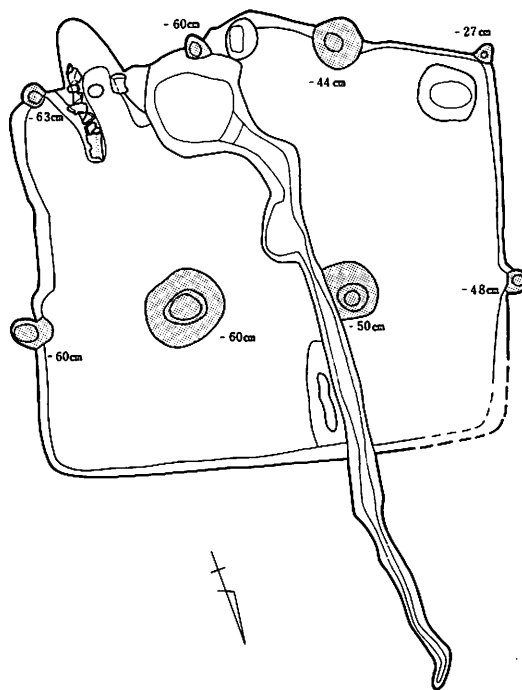
自然遺物：クルミ

針ノ木遺跡は、野尻湖の南約1kmに位置し、周囲を丘陵によって囲まれた播り鉢状の小規模な盆地の南側の北向き緩斜面に所在する。中央は湿地性で、腰近くまで泥に漬かりながら水田を作ったとの話も聞き、針ノ木の集落は北側の南向き斜面にこぢんまりと営まれている。

昨年度より試掘調査を実施し、本年度も遺跡の範囲を確定することから開始した。その結果、湿地際の水の湧き出しそうな北向き緩斜面からは平安時代の住居跡・土坑墓などを検出した。

検出した住居跡は10世紀と11世紀に2軒ずつ営まれ、背後の斜面からは10世紀のどちらかの住居跡に伴うものと思われる土坑墓を1基検出した。

10世紀の1号住居跡（第103図）は検出された中でもっとも深く掘り込まれているもので、住居跡内から水が湧き出したのか、排水溝が設けられていた。調査中にも柱穴内からは水が湧き出し、当時は現在よりも水位が高かったのだらうと思われる。また、この住居内には柱穴が8本も立てられ、近接する2号住居跡も同様に、柱穴が11本も設けられていた。信濃町内では現在20軒ほどの住居跡が確認されているが通常4本柱で、このように柱穴を多く設ける例は見当たらない。軟弱な地盤に対応し、かつ、豪雪に耐えるためこのようにしたのか珍しい例である。



第103図 1号住居跡（1：80）

11 ^{うら やま}裏の山遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字柏原字裏の山525-1番地ほか 調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成6年4月18日～11月11日

窪田秀一郎 神林忠克

遺跡の立地：伊勢見山南東の尾根頂上部

調査面積：8,500㎡

時代と時期：先土器時代・縄文時代早期

遺跡の特徴：後期先土器時代の大規模遺跡

主な検出遺構：ブロック30基余り

主な出土遺物：石器：局部磨製石斧・砥石・台形様石器・ナイフ形石器・搔器・彫器・槍先形
尖頭器・細石刃・細石刃核・石鏃など

土器：縄文早期土器（表裏縄文）

裏の山遺跡は信濃町役場の背後に位置する伊勢見山南東の尾根の頂上部（標高713m）に立地する。昨年度の試掘調査により新たに発見された遺跡で、当初は小規模な旧石器時代の遺跡だろうと考えられていた。伊勢見山の北西山麓から裾野一帯には東裏遺跡が広がり本遺跡と近接している。

現在の伊勢見山は山林となっているが、戦争直後には開墾され全面丸坊主となり畑作が行われた。本遺跡も例外ではなく現在まで畑が作られていた。

土層は他の遺跡（貫ノ木・上ノ原など）と同様の層順を成している。しかし、本遺跡は他の遺跡と立地が異なる尾根の山頂部であることから、耕土下で即IV層が現れVI層までは非常に薄い。IV・V・VI層が混在し、層位的に遺物を取り上げるのに困難をきたしたところもあった。四方に下るにしたがいIII～V層は徐々に厚さを増してゆく。

石器は尾根の頂上付近と南斜面を中心に、東斜面からも若干出土した。礫を含め7,900点余りの内トウールは約790点を数え、全体の1割をしめる。出土状況はIII～IV層では全体の8.5割以上が出土し、30程のブロックが認められた。ブロックはIII・IV層からそのほとんどが検出され、南斜面と西斜面には単独なものが多く、5～8mの直径を測る。頂上付近では多くのブロックが検出されたが、かなりの重複が認められたことからその数は不確定である。V層になるとその出土状況は一変し散漫となり、ブロックは確認することはできず、新たに東斜面からも局部磨製石斧・砥石・台形様石器等が出土した。この段階では東から北東斜面へも遺跡は広

裏の山遺跡 出土石器集計表（7年2月末、洗浄・注記終了段階）

層位	出土遺物総数	ナイフ	スクレイパー	台形様	二次・使用	その他	合計
I～III層	2,471	34	110	24	132	30	330
IV層	3,837	37	93	10	138	22	300
V層	928	14	35	7	41	19	116
攪乱	491	5	12	1	29	3	50
合計	7,962	90	250	42	340	74	796

その他の石器 敲き石31, 特殊磨石2, 尖頭器5, 石斧2, 石鏃4, 石刃12, 細石刃7, 細石核2, 擦り石3, くさび2, 砥石1, 彫器2, ドリル1, スタンプ型1, 礫235

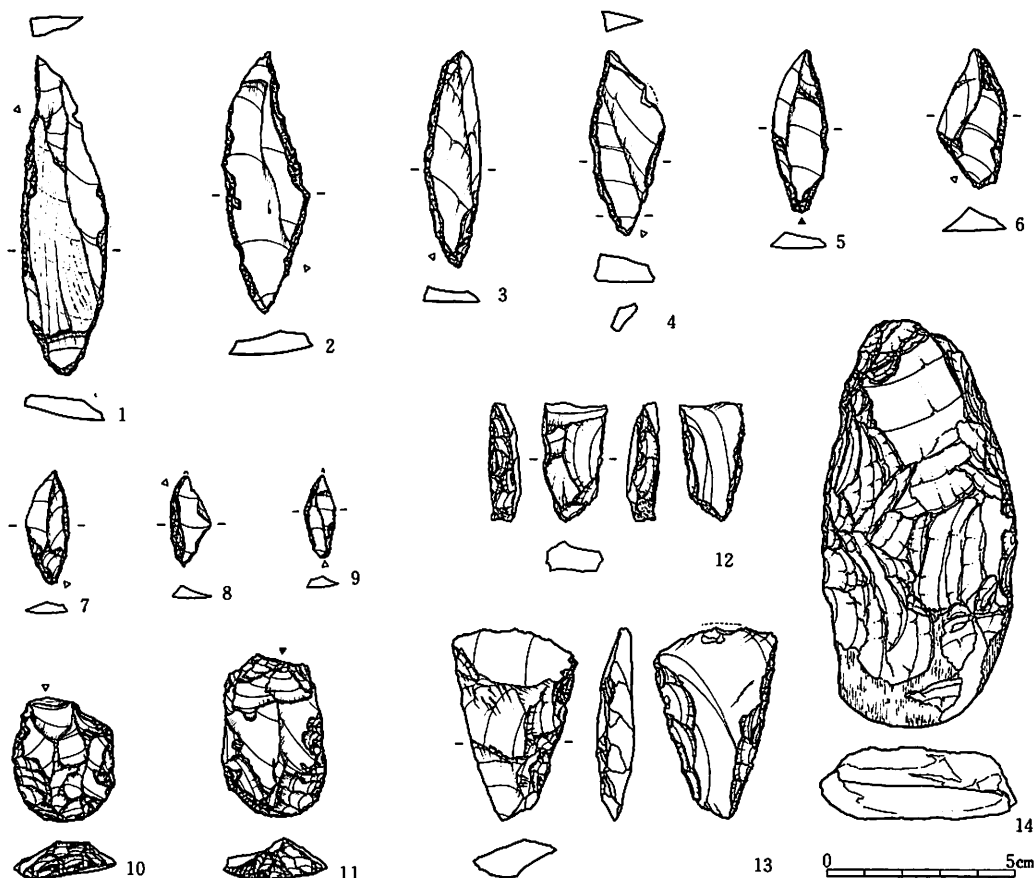
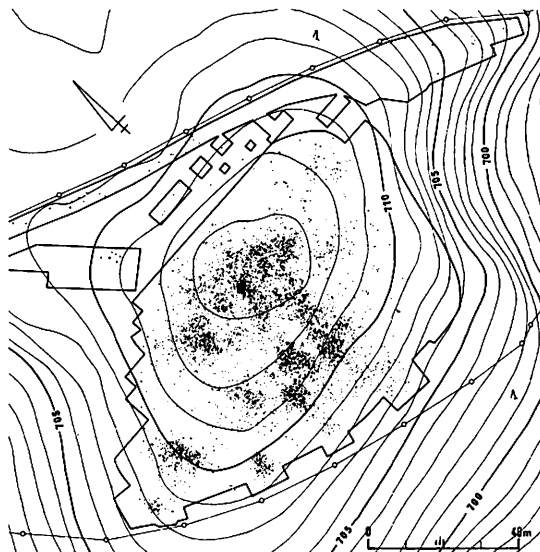
がるものと推測される。

時期的にはナイフ形石器と搔器を主体に検出されたが、局部磨製石斧から細石器・槍先形尖頭器まで検出され、長期にわたりこの地が利用されていたことが分かった。

石材は黒曜石・安山岩・チャート・凝灰岩・頁岩・砂岩・玉髓・蛇紋岩が使用されている。

現在は石器洗浄を終了した段階で、石器の数も今後変動すると思われる。詳細は来年度以降の整理作業を待たねばならない。

第104図 裏の山遺跡全体図 (1:2000)



(1~9 ナイフ形石器, 10・11 搔器, 12・13 台形様石器, 14 磨製石斧, △は素材剥片の打面位置を示す。▲は打面残置, △は打面除去)
第105図 裏の山遺跡出土遺物図 (1:2)

ひがしうら
12 東裏遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字柏原字上の原261・265番地ほか 調査担当者：寺島俊郎

調査期間：平成6年11月14日～12月13日 神林忠克

遺跡の立地：伊勢見山山麓の平坦部

調査面積：4,000m²

時代と時期：縄文時代早期・平安時代

遺跡の特徴：平安時代の小規模集落

主な検出遺構

時代	遺構
縄文時代	土器集中1
平安時代	竪穴住居跡4

主な出土遺物

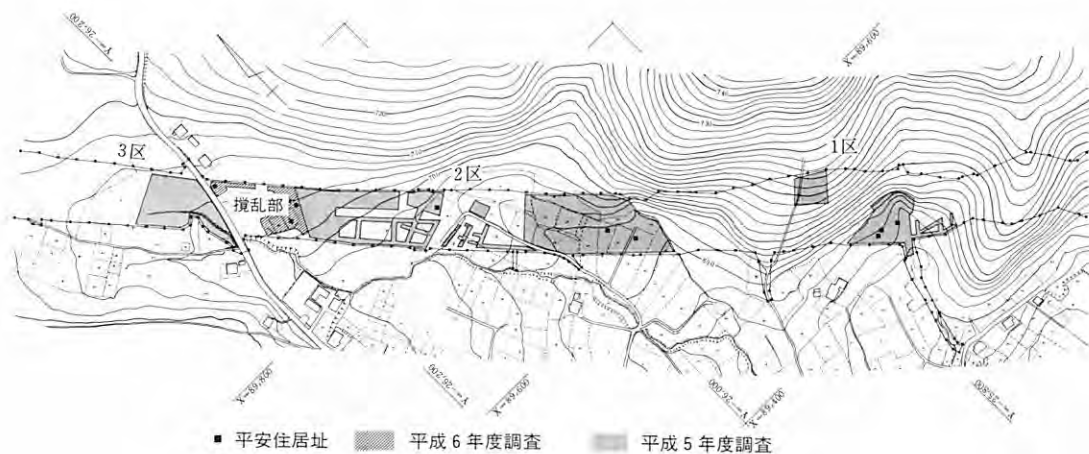
土器：縄文土器（絡条体圧痕文・前期末）・古墳時代前期土師器・平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器

その他：鉄製品・黒曜石剥片・安山岩剥片

野尻湖の南東約1kmに北西から南東に延びる尾根状の伊勢見山（離れ山）がある。その南西側山麓から裾野一帯に広く展開しているのが本遺跡である。本年の調査は2年目に当たり、その対象地は2区の北西端部に相当する。

調査の結果、調査対象区は削平され表土下即褐色ローム層が表れた。昨年度調査で多く検出された先土器時代の遺物は検出されなかったが、平安時代（10世紀）の竪穴住居跡4軒を検出した。また、2区北西端から3区へと延びる河川による凹地の縁辺では黒色土・柏原火山灰層の堆積が確認された。黒色土層からは古墳時代前期の土器が散在して出土し、柏原火山灰層の下方からは縄文時代早期の絡状体圧痕文の土器が一個体分集中して検出された。

平安時代の竪穴住居跡は昨年からの調査を通じて10軒が検出されたが、それらは1軒から3の軒まとまりをもって点在している。今回検出した5号住居跡からは、黒色土器碗3個体内部に漆がべったりと付着しており、当時の信濃町では生業の一つとして漆の栽培（採取）が行われていたものと推測される。



第106図 東裏遺跡調査範囲図（1：8000）

13 上ノ原遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字柏原字上ノ原204ほか

調査担当：鶴田典昭

調査期間：平成6年10月24日～12月9日

石原州一

調査面積：3,500㎡

久保田秀一郎

遺跡の立地：低湿地に臨む南向きの緩斜面

時代と時期：先土器時代，縄文時代前期，奈良・平安時代

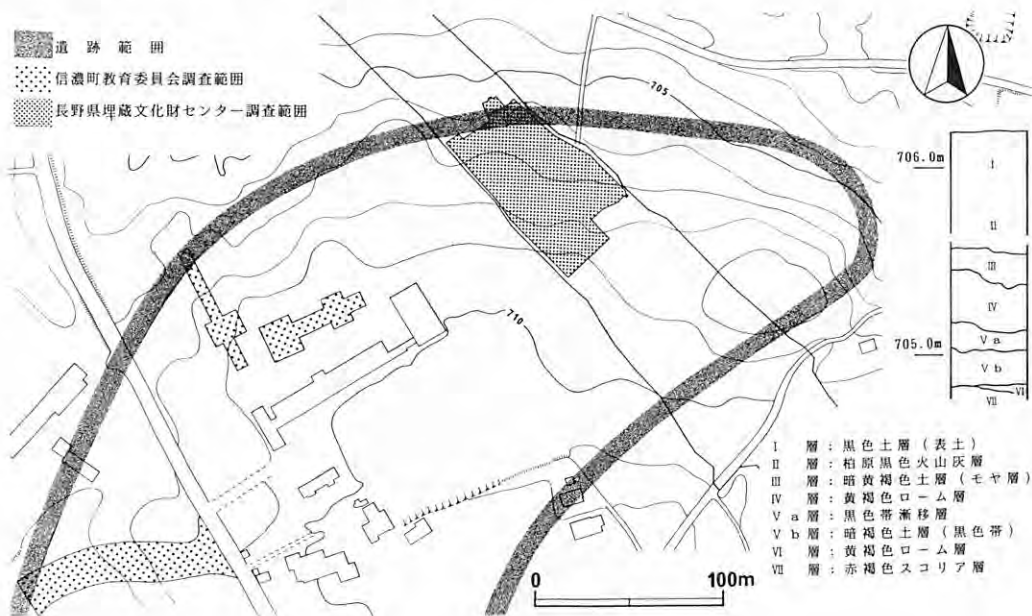
遺跡特徴：先土器時代のブロック，縄文時代の陥し穴

主な検出遺構：ブロック5（先土器時代）陥し穴3（縄文時代？），炭窯1（近世以降）

主な出土遺物：ナイフ形石器，槍先形尖頭器，縄文時代前期土器

調査結果 基本土層は第107図に示したとおりで，周辺の貫ノ木遺跡などに対応する。古代の遺物は長胴甕が一個体出土したのみである。縄文時代前期の土器片が調査区南西側にまわって出土したが，それに伴う遺構は検出されない。陥し穴と思われる土坑が3基検出された。土坑内の遺物は無く，何時ものかは明言できない。

先土器時代の遺物は，剥片，礫などを含めて505点である。今回の調査で出土した石器は，槍先形尖頭器12点，搔器・削器2点，石錐1点，ナイフ形石器2点，台形様石器1点などである。5つのブロックが確認され，その他に単独で出土した石器が数点ある。これらの石器群は，出土層位から大きく3つの時期に分けられる。ひとつは主にIII層から出土する一群で槍先形尖頭器が含まれる。次は主にIV層から出土する一群で，安山岩製ナイフ形石器が含まれる。最後は，主にVa層から出土する一群で，台形様石器が含まれる。



第107図 上ノ原遺跡調査区位置図（1：4,000）

14 貫ノ木遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字柏原字貫ノ木1461他

担当者：大竹憲昭・白田広之

調査期間：平成6年4月21日～12月9日

奥山宗春・片山 徹

調査面積：上信越自動車道分 29,900m²

小田切清一・代田 孝

妙高・野尻バイパス分 2,200m²

鈴木孝則

遺跡の立地：丘陵の緩斜面部

時代と時期：先土器時代・縄文時代・弥生時代・平安時代

遺跡の特徴：先土器時代のブロック群

主な検出遺構：先土器時代：遺物集中地点（ブロック）25カ所，礫群40カ所

縄文時代：土坑 35基，集石 5カ所

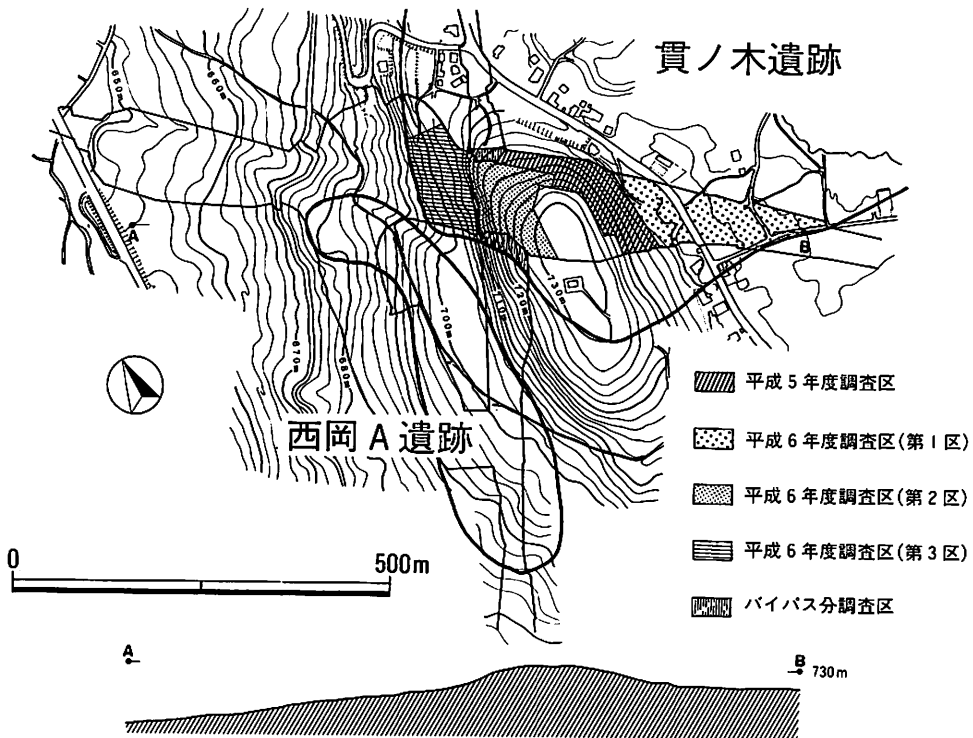
平安時代：竪穴住居跡 1軒

主な出土遺物：先土器時代：台形様石器，ナイフ形石器，槍先形尖頭器，石斧，砥石，搔器，削器，彫器

縄文時代：表裏縄文土器，押型文土器，石鏃，石匙，磨石

弥生時代：中期土器

平安時代：土師器



第108図 貫ノ木遺跡全体図 (1 : 100,000)

貫ノ木遺跡は、野尻湖の西に広がる仲町丘陵の最南端の高台に位置する。遺跡の標高は700~730mあり、細かい地形をみると何段ものテラスを形成しており、各テラスに遺物の集中がみられた。今年度調査したそれらのテラスは、以下の4地区に区分される(第108図)。

第1区：国道18号の両脇、標高710m前後で東向きにやや傾斜しているテラスである。

第2区上位面：遺跡内ではもっとも標高が高い丘陵の頂部平坦地である。

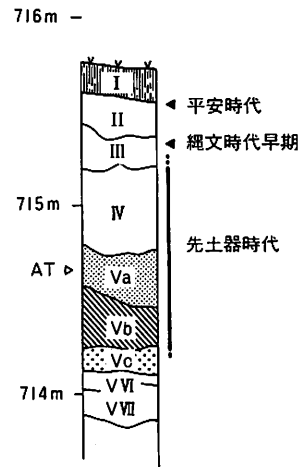
第2区下位面：上位面の北西部、頂部から一段下がった標高720m前後の北西向の緩斜面である。

第3区：2区上位面の頂部から西側は約50mの比高差を持つ斜面が展開するが、その中腹部分標高700m前後に東向きのテラスがある。

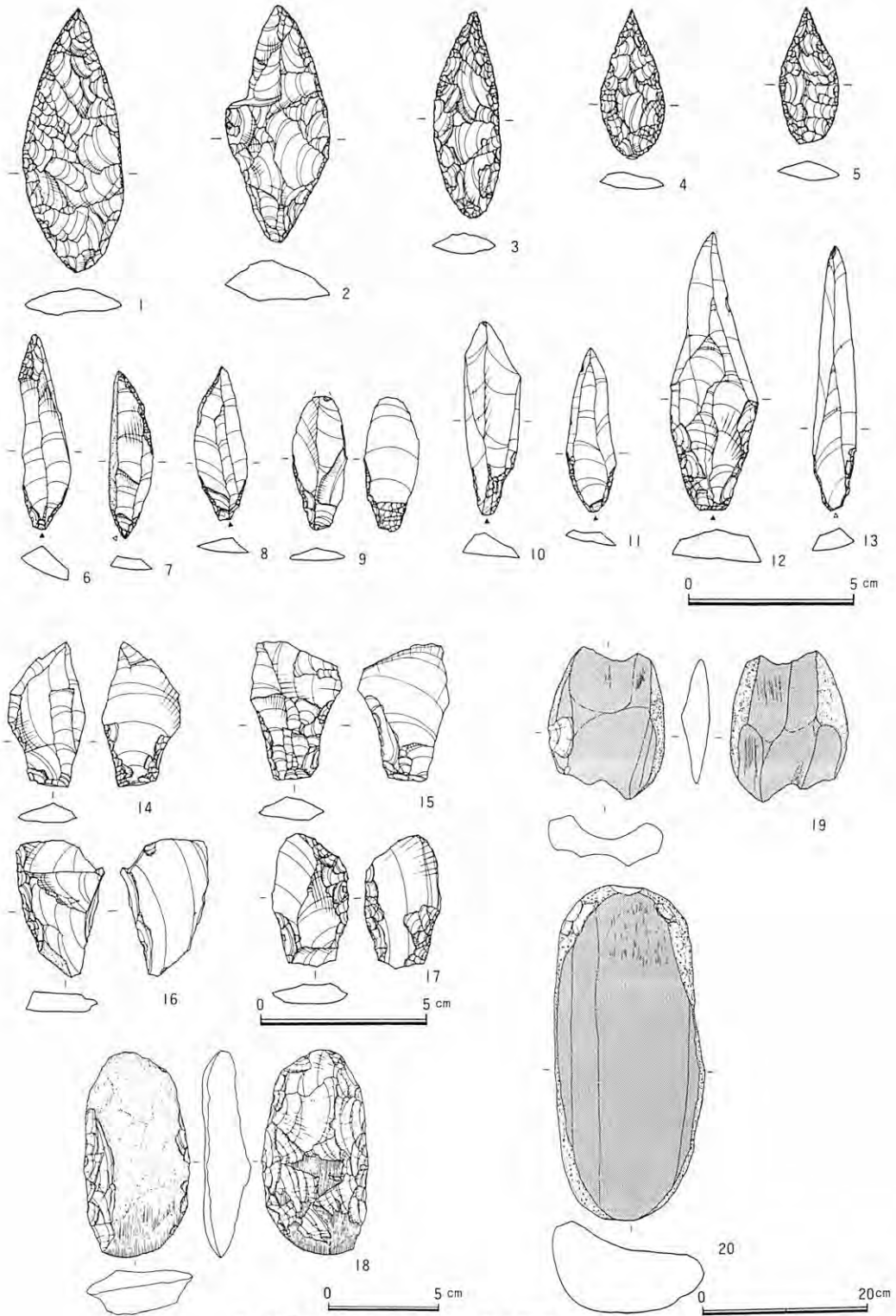
基本層序と遺物の出土層位は以下の通りである(第109図)。第I層：表土。第II層：黒色細粒火山灰層、平安時代の遺構と遺物は本層上面で検出された。第III層：漸移層(上部野尻ローム層IIモヤ)、縄文時代早期の遺構と遺物は本層中に検出された。第IV層：黄褐色細粒火山灰層(上部野尻ロームII)、第1・2区上位面を中心に、ナイフ形石器、槍先形尖頭器の石器群が出土している。礫群の多くも本層に帰属する。第Va層：暗黄褐色細粒風化火山灰層(上部野尻ローム層II)、層厚の厚い第3区ではAT(始良・丹沢火山灰層、25,000y. B. P. 降灰)の純層がブロック状に確認された。第2区下位面・第3区では遺物の出土量は多いが下層の第Vb層との分離は困難で、本層を主体とした石器群の有無は今後の整理にゆだねたい。第Vb層：暗褐色風化火山灰層(上部野尻ローム層II黒色帯)、台形様石器、ナイフ形石器、石斧、砥石等をもつ石器群である。遺物の平面分布は、Va層と重複する部分が多い。第Vc層：暗黄褐色風化火山灰層(上部野尻ローム層I黒色帯)、本層以下、遺物は発見されなかった。第VI層：黄褐色風化火山灰層(上部野尻ローム層I)、第VII層：赤褐色スコリア質火山礫層。

今年度の成果は以下の3点に集約される。

- 1) 第1区において、ナイフ形石器と槍先形尖頭器が伴出する良好な石器群を検出した。
- 2) 第2・3区から出土した石器群は、AT(始良・丹沢火山灰)降灰以前に時間的位置づけがあたえられる。砥石6点、石斧20点以上という出土量の多さは特筆される。ただし第2区・第3区の台形様石器・ナイフ形石器・石斧を比較してみると、その特徴には違いが指摘できそうであり、時期差を示す資料になる可能性が大きい。
- 3) 遺跡で使用されている石器石材は、黒曜石・蛇紋岩・安山岩・凝灰岩・頁岩・チャート・砂岩と多様だが、遺跡周辺に上記の石材はなく、かなりの遠隔地からもたらされたようであり、入手過程が興味深い。



第109図 貫ノ木遺跡基本層序



第110図 貫ノ木遺跡出土 先土器時代の石器

(1～5 槍形尖頭器, 6～13 ナイフ形石器, 14～17 台形様石器, 18 石斧, 19～20 砥石)

15 にしおか 西岡A遺跡

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字傳九郎1521-1他 担当者：大竹憲昭・白田広之
調査期間：平成6年4月21日～12月9日 奥山宗春・片山 徹
調査面積：上信越自動車道分 6,900㎡ 小田切清一・代田 孝
妙高・野尻バイパス分 11,000㎡ 鈴木孝則

遺跡の立地：丘陵の緩斜面部

時代と時期：先土器時代・縄文時代

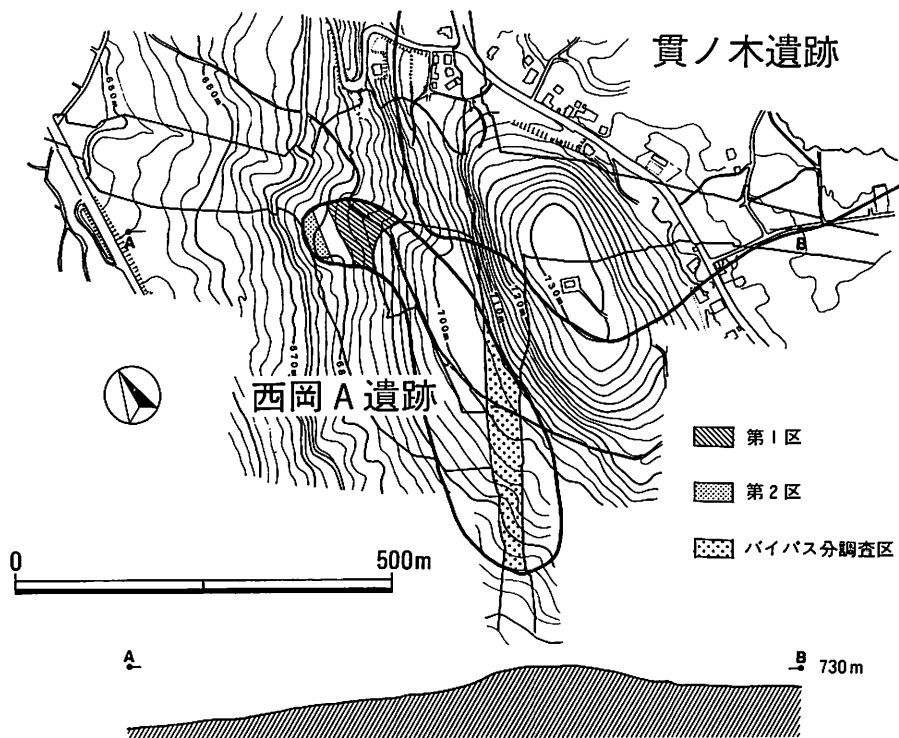
遺跡の特徴：先土器時代のブロック群

主な検出遺構：先土器時代：遺物集中地点（ブロック）10カ所，礫群16カ所

主な出土遺物：先土器時代：ナイフ形石器，槍先尖頭器，角錐状石器，搔器，削器，彫器
縄文時代：土器，石器

西岡A遺跡は，貫ノ木遺跡の南西部に接するように位置する。遺跡の標高は685m前後で，貫ノ木遺跡3区より一段低い西方向にやや傾斜している。基本層序は貫ノ木遺跡と同様で，先土器時代の遺物は第III層～第IV層にかけてみられ，第V層にはいと遺物は出土しない。高速道関係で1区・2区を，バイパス関係で3区をそれぞれ調査した。

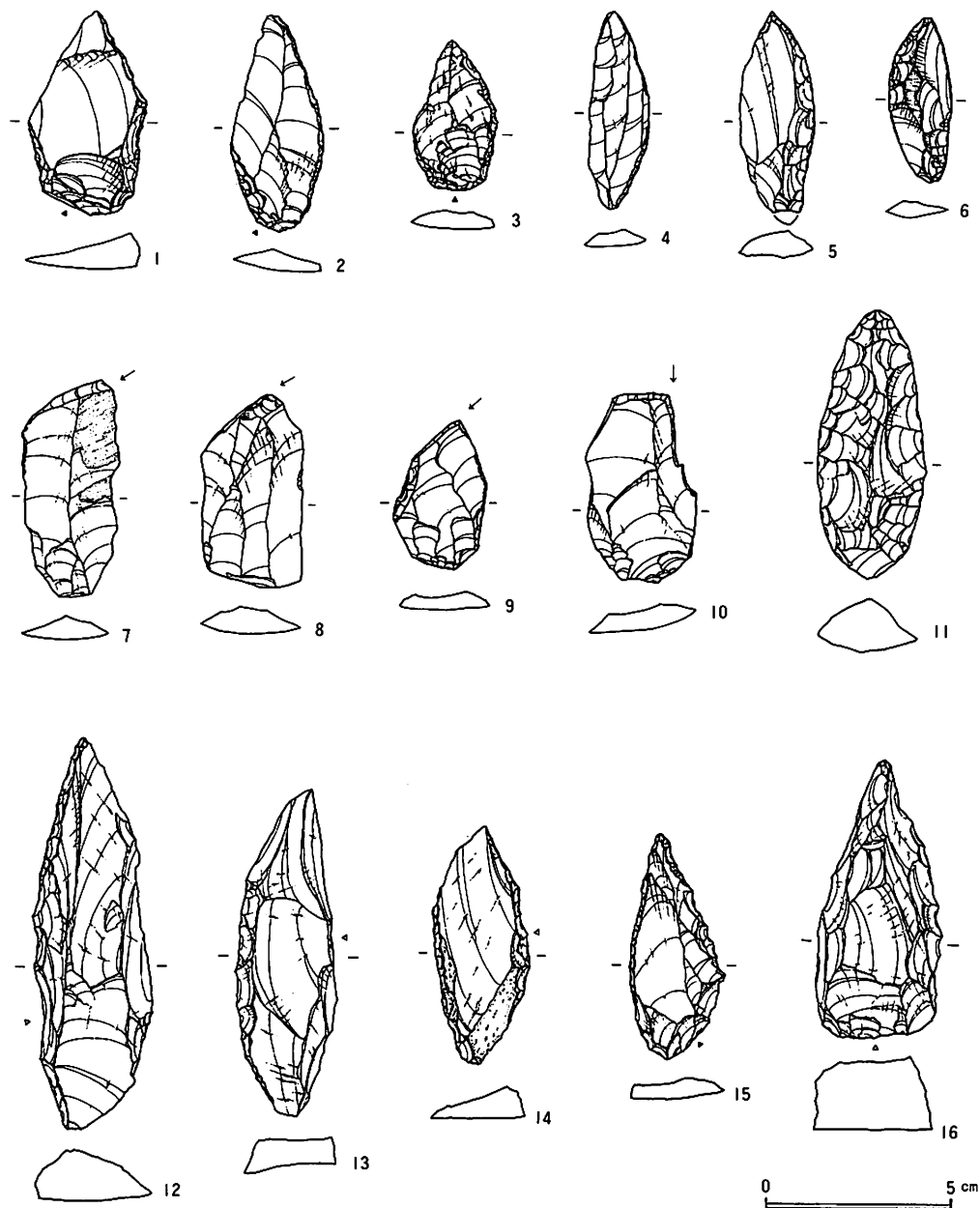
2区から出土した石器群は，安山岩を主たる石材とし，約500点が出土した。ナイフ形石器は横長剥片を素材としており，石核，剥片からも横剥ぎ技法が看取され，国府系の石器群と関



第111図 西岡A遺跡全体図 (1 : 100,000)

連が強いと考えられる三国技法に酷似している（註）。従来、信濃町では国府系石器群が比較的よく看取される地域であったが、この西岡A遺跡の資料はなかでも充実している。さらに他の形態のナイフ形石器や槍先形尖頭器との共伴関係も石器群の時間的位置づけを考える上で興味深い。

（註）平口哲夫氏より御教示いただいた。



第112図 西岡A遺跡出土 先土器時代の石器
 (1～4・12～15ナイフ形石器, 5・6・11槍先形尖頭器, 7～10彫器, 16 角錐状石器)

II 普及・公開活動の概要

1 現地説明会・速報展・遺跡調査発表会

(1) 佐久調査事務所

ア 郷土遺跡（小諸市）

本遺跡の発掘調査も3年目を迎え、地域社会にも我々の調査活動が広く知られるようになってきた。その現われとして今年も5月21日(土)に、地元小諸市の野岸小学校の6年生3クラス120名が、地域の歴史学習の一環として見学に訪れた。メモ帳片手に熱心に質問する小学生に対し、説明に当たった職員も熱弁をふるってこたえていた。

その翌日の5月22日(日)には道路公団・JVなどが共催した上信越道小諸工事区の一般公開のイベントが開催され、郷土遺跡も終日公開し、家族連れを中心に137名の見学者が訪れた。遺跡見学は初めての方も多かったが、前日見学に来た小学生数名のグループの姿も見られた。

さて、今年の普及・公開活動の中で特筆すべきものは、長野県の生涯学習推進の一環として7月29日(金)に開催されたボランティア養成講座への協力である。小諸青年の家職員・小諸高校教諭に引率された9名の参加者は全員若い女性で、社会人1名の他は東信の高校生であった。午前中は現場での遺構検出作業、午後は土器洗い、遺物への注記、遺物の接合と盛りだくさんの内容を短時間の中で体験して頂いた。小諸ケーブルテレビの取材もあり、指導に当たる職員も、いつになく張り切っているようであった。



第113図 ボランティア養成講座

8月21日(日)に本年度最初の、そして足かけ3年にわたる発掘調査で最後となる正式の現地説明会が開催され、小雨まじりの天気にもかかわらず、102名の参加者があった。

イ 砂原遺跡及び中平・田中島遺跡（浅科村）

7月10日(日)に行われた第1回砂原遺跡現地説明会には、地元浅科村の皆さんを中心に201名の参加者があった。千曲川右岸に位置する本遺跡は、名前通り洪水による砂におおわれていたが、砂の下から姿を現わした周堤をもつ竪穴住居跡（平安時代）や牛耕の足跡の残る水田跡などを目の当たりにした地元の皆さんは、先人の生活ぶりに思いをはせていた。

8月21日(日)に実施された第2回砂原遺跡現地説明会は、中平・田中島遺跡の現地説明会と併せて実施され、この日も地元の皆さんを中心に100名の参加者があった。



第114図 砂原遺跡第1回現地説明会

(2) 上田調査事務所

ア 大日ノ木遺跡（上田市殿城）

平成6年7月17日(日)の午前・午後の2回現地説明会が実施された。見学者は地元の上田市を中心にして235名を数えた。同じ日に上田市宮平遺跡の現地説明会も行われたが、開始時刻を1時間30分ずらして、見学者が移動できるように考慮した。実際50名程の人が双方を見学したようである。「一日で2つの遺跡を知ることができてとてもよかった」と好評で、上田の弥生時代から古代にかけての見識を深めるには有効であったと考える。

当日は晴天で、厳しい暑さの中で調査研究員の説明が行われたが、弥生時代末の焼失住居の話には、多くの見学者が熱心に聞きいていた。その住居から発掘された多くの完形遺物にも視線が集中した。

イ 宮平遺跡（上田市住吉）

平成6年7月17日(日)の午前・午後の2回現地説明会が実施された。大日ノ木遺跡の説明会から移動した人も多く、216名の見学者が集まった。古墳時代に大陸から伝わったかまどの説明や当時の時代考証に関心を寄せていた。出土した円面硯にはその価値に驚きの声が上がった。また、スライド上映による説明も同時に行われた。

平成6年11月16日(水)、地元自治会の要請で第2回目の説明会が実施された。116名の見学者があった。当日と翌日には神科小学校の学級単位の見学もあって、児童を含めると約400名を数えた。現場に竪穴住居が復原され、かまどを使った煮炊きも実演された。

ウ 真行寺遺跡（東部町祢津）

平成6年8月7日(日)に現地説明会が実施され、81名の見学者があった。午前中の1回だけの説明会でも熱心な見学者が集まった。強い日差しにもかかわらず興味深く調査研究員の説明に聞きいていた。特に中世の火葬墓から出土した青磁に関心を寄せていた。

エ 国分寺周辺遺跡群（上田市下堀）

平成6年12月4日(日)の午前・午後2回の説明会が実施された。近隣の住民を中心に196名の見学者を集めた。国分寺と直接関係する遺構は少なかったが、弥生時代の住居跡や完形土器が床上に原位置を保つ古墳時代後期の住居跡に多くの人が集まり、考古学に対する関心の深さを示した。「私の家の下にこんなすごいものが埋まっていたなんて……」という驚きの声があった。今後の説明会では、遺跡近隣の人達に直接案内を出すことで、より多くの見学者を集めることができ、普及公開にもっとも有効な手段ではないかと思われる。

(3) 長野調査事務所

ア 築地遺跡（長野市篠ノ井岡田） 6月26日（日） 184名

時おり小雨のちらつく天候であったが、大勢の見学者でにぎわった。周辺住民へのPR活動がゆきとどき、「北陸新幹線関連では初の現地説明会」とのマスコミの事前報道もあって、いわゆる考古学ファン以外の参加が多かった。現地説明会の初参加者は58.2%（107名）にも上った。平安時代及び中世の集落と出土遺物が展示公開され、見学者からは、「ここを遺跡として保存できないか？」という声もあった。

イ 篠ノ井遺跡群（長野市篠ノ井塩崎） 7月31日（日） 167名

気温30度をゆうに越す猛暑にもかかわらず、遠く千葉県からの参加も含め、熱心な見学者でにぎわった。発掘現場では、弥生時代後期の円形周溝墓群を中心に、合口土器棺や、人骨、銅釧・鉄釧の出土状況が公開された。遺物では、箱清水式土器、古墳時代後期の土器、古代の瓦塔・蹄脚硯などが公開され、見学順路の計画もよく、充実した説明会であった。

ウ 浅川扇状地遺跡群 W-2B区（長野市鶴賀） 10月16日（日） 187名

市街地の発掘現場では初めての現地説明会であった。古墳時代前期の方形の竪穴住居10軒を中心に現場が公開され、栗林式土器等の展示のほか、発掘された土器片から土器の復原までの過程がわかるような工夫もされていた。後日訪れて、補足説明を求める方もあり、地元住民の関心の高さがうかがわれた。

エ 屋代遺跡群（更埴市雨宮） 10月30日（日） 367名

「奈良時代の国府木簡発掘」のニュースが流れたばかりでもあり、県内外から多数の見学者が詰めかけた。矢板に囲まれた発掘現場は次の順序で見学できるよう工夫されてあった。①縄文時代中期後葉の集落 ②縄文時代中期初頭から現代の地層断面 ③弥生時代?の千曲川とそれが埋る過程 ④飛鳥から奈良時代の自然流路と施設（木樋など）⑤平安時代の水田

出土品では注目目の国符木簡・郡符木簡をはじめ、祭祀遺物（斎串・人形・馬形など）、縄文土器などが展示公開された。当日の配布資料もわかりやすく好評であった。

オ 浅川扇状地遺跡群 E-9区（長野市上駒沢） 12月21日（水）午後のみ 23名

地元の方々の強い要望で現地説明会が行われた。小雪の舞う悪コンディションであったが、熱のこもった説明会となった。中世の2つの大溝を含め、発掘調査の様子そのものが公開され、遺物展とともに見学者の興味をひいた。

今年度は速報展が中止となった。県立歴史館開館に伴う企画展の実務を当事務所が担当したためであるが、来年度は、今年度の成果を交えての展示会の開催が期待されている。



第115図 篠ノ井遺跡群現地説明会

カ 県立歴史館開館記念企画展“赤い土器のクニ”

平成6年11月3日、森將軍塚古墳を南東に眺望できる更埴市屋代に長野県立歴史館が開館した。当センターは、この歴史館開館を記念する企画展の開催を要請され、計画、実施した。

県立歴史館は、善光寺平に位置するという地理的条件のなかで、この地域を特徴づける弥生土器“赤彩された土器”とその文化（約1800年前）に焦点をあてた展示概要が立案され、当センター所有の記録、遺物を主体とした展示を行った。

展示は“赤い土器のクニ”と題し、歴史館企画展示室において、平成6年11月3日～12月11日まで33日間実施された。歴史館の開館ということもあり約2万5千人の見学者が訪れ、盛況を博した。また企画展に合わせ、奈良国立文化財研究所、工楽善通学芸室長による『稲作の始まりと人々の交流』と題した講演会を開催した。

企画展の計画準備は、8月中旬から長野調査事務所が中心となり展示、図録の作成を行った。遺跡の発掘・整理作業に従事する業務のかたわらで準備・実施をすることとなり、展示台、展示・解説パネル、復元住居等大半を自前で制作することを余儀なくされた。また歴史館自体企画展開催が初めてで不手際もあり、開館前日になって展示作業を終了するという慌ただしいものであった。

展示は、千曲川流域一帯の遺跡から数多く出土する“赤い土器”をメインに、同時代の木製農具・鉄製品など約250点余の遺物を紹介した。内容は、弥生時代後期に花開いた『赤い土器のクニ』（箱清水式土器の文化）の誕生から終焉まで稲作技術、金属器、墓地、住居等の状況を解説し、また赤い土器を再現する実験過程の様子も紹介した。会場では様々な驚きの声が囁かれ、質問して来る見学者が数多く見受けられた。また遺跡が身近にあることを、再認識した人も少なくなかった様子であった。ささやかなイベントであっても、調査成果を還元できたことは喜びでもあった。

この企画展が盛況であった陰には、多くの機関・方々からの援助・助言、そして何より熱っぽく展示にかかわった担当者、整理補助員の努力がありました。



第116図 企画展“赤い土器のクニ”

(4) 中野調査事務所

ア 貫ノ木遺跡・裏の山遺跡・日向林B遺跡（信濃町）

平成6年7月31日、3遺跡合同の説明会が行われた。貫ノ木遺跡現場事務所に出土品を集めて展示し、各遺跡では時間をずらして現地の説明を行った。また西岡A・大平B遺跡の出土品も合わせて展示された。貫ノ木遺跡の丘に立ち、地形の変化に富んだ広範囲な遺跡を目の前にして、160名の見学者からは驚きの声が上がった。

イ 風呂屋遺跡（豊田村）

平成6年8月27日、遺跡現場事務所において風呂屋古墳を中心にした説明会が行われた。展示は、すでに調査が終了している大谷地・八号堤遺跡の出土品を合わせて行った。村の有線テレビ報道により130名の見学者となった。「村の古墳」ということで、真夏日に照らされ汗を拭きながらも熱心に見入っていた。古墳は、村によって移築復元されている。

ウ 出土品の現地公開（信濃町）

平成6年12月10日、貫ノ木遺跡現場事務所において信濃町9遺跡（七ツ栗・日向林B・大平B・針ノ木・裏の山・東裏・上ノ原・貫ノ木・西岡A）の出土遺物約300点を公開した。使いこなされた砥石やナウマンゾウなどの脂肪酸の付着した石斧の前には、どの見学者も立ち止まり関心の高さを窺わせた。年末を迎え多忙な時期であったが56名の方々が見学に訪れた。

エ 速報展

平成7年2月2日～19日までの実質16日間、県立歴史館において、当センターの企画展として同館との共催で上信越自動車関連遺跡速報展を開催した。「野尻湖周辺の先土器文化」と題し、信濃町7遺跡（日向林B・大平B・裏の山・東裏・上ノ原・貫ノ木・西岡A）で出土した石器の様相から「石斧文化」「ナイフ形石器文化」「石槍文化」の3つのテーマに分け、石器約300点及び復元模型等を展示した。又展示解説スライドを各日曜日に上映した。

まず豊富な展示内容には、多くの見学者から驚きの声がかかれた。ナウマンゾウを解体した石斧や大きな砥石は、環境復元模型と合わせて現実感に溢れ強い関心が示された。石器製作実演コーナーは常時ひとだかりがし大好評であった。スライド上映も平均50名の方々に見ていただいた。

事務所・事務局・歴史館の三者間で打ち合わせたり、整理作業と並行した準備で忙しい面もあったが、県内外から、4,837名の参観を得られたことは大きな意義があった。

オ 遺跡調査発表会（豊田村）

平成7年3月5日、豊田村教育委員会の後援により、村農協多目的施設において平成6年度埋蔵文化財発掘調査遺跡発表会を開催した。豊田村の遺跡（大谷地・八号堤・風呂屋・同古墳・飛山）および中野市の牛出遺跡について、スライド発表と出土品の展示を行った。見学者は51名。



第117図 歴史館における速報展

2. 指導・研究会・学習会

期 日	講 師	指導内容ほか
6. 7. 4～ 7. 5	国立歴史民俗博物館 平川南教授	屋代遺跡出土木筒について
6. 9. 16～ 9. 17	明治大学 安蒜政雄教授	信濃町の旧石器時代遺跡について
6. 9. 29～ 9. 30	大阪市立大学 辻誠一郎講師	屋代遺跡群出土植物質資料の取り扱いについて
6. 10. 21	岡山大学 稲田孝司教授	信濃町内出土の旧石器時代の石器について
6. 10. 24	国立歴史民俗博物館 平川南教授	屋代遺跡出土の木筒について
6. 11. 24～11. 25	” ”	”
6. 11. 28	信州大学 赤羽貞幸助教授	長野盆地の地形形成について
6. 12. 13	信州大学 笹本正治助教授	中世城館跡の調査方法
7. 2. 16～ 2. 17	新潟県立豊栄高校 川村浩司教諭	篠ノ井遺跡出土の弥生～古墳時代の土器について
”	群馬県箕郷町教委 田口一郎調査員	”
”	群馬県埋蔵文化財事業団 関根慎二主任調査員	縄文時代前期後半の土器の整理方法
7. 2. 23～ 2. 24	明治大学 山田昌久講師	石川条里遺跡出土の木器整理方法
”	郡山女子短大 柳田俊雄助教授	信濃町出土の旧石器と東北地方の旧石器について
7. 2. 27	長野県立歴史館 福島正樹専門主事	律令制度と木筒
7. 3. 1～ 3. 2	野尻湖博物館 中村由克学芸員	石器の石材について
7. 3. 6～ 3. 7	国学院大学 吉田恵二教授	中野市内窯跡出土の須恵器について
7. 3. 27～ 3. 28	明治大学 矢島國雄教授	信濃町内出土の石器と関東地方の旧石器時代石器について

3. 刊行物

「長野県埋蔵文化財センター 年報」11

「長野県埋蔵文化財ニュース」40～41

「赤い土器のクニ」（長野県立歴史館開館記念企画展図録）

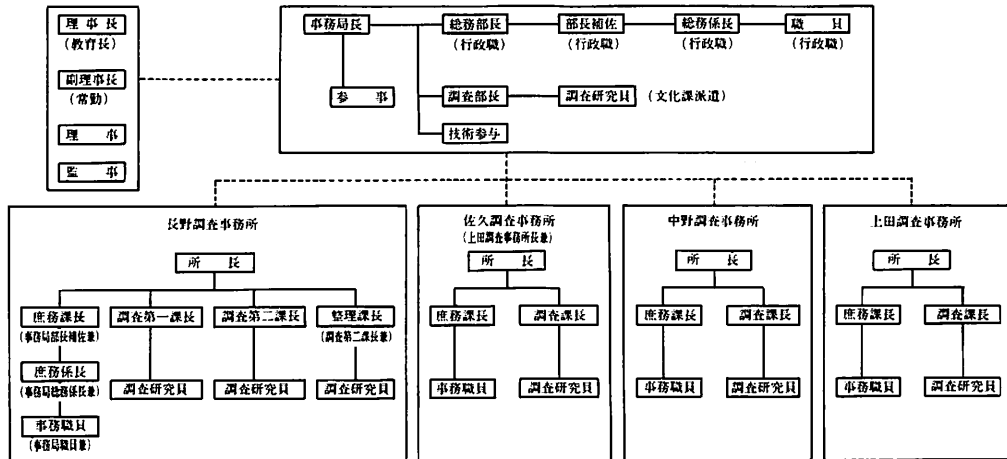
III 機構・事業の概要

1. 機構

(1) 組織

【理事会】	理事長(県教育長)	理事(県北陸新幹線局長)	理事(市町村教育長代表)
	副理事長(常勤)	理事(県教委文化課長)	理事(考古学研究者代表)
	理事(県企画局長)	理事(県考古学会長)	監事(県会計局会計課長)
	理事(県高速道局長)	理事(市町村長代表)	監事(県教委総務課長)

〔助〕長野県埋蔵文化財センター組織図



(2) 事務所所在地

本 部 長野市大字南長野字幅下692-2 長野県教育委員会事務局文化課内

事 務 局 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4

〔助〕長野埋蔵文化財センター長野調査事務所内

長野調査事務所 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4

中野調査事務所 中野市大字立ヶ花字西原55-1

佐久調査事務所 佐久市大字安原字蛇塚1367 (平成7年3月31日 閉所)

上田調査事務所 上田市大字下塩尻936-3

(本部・事務局・長野調査事務所は、平成7年3月30日、更埴市屋代清水260-6に移転)

2. 事業

(1) 理事会および会計監査

理事会

- 第28回理事会 平成6年5月30日 会場 長野市 ホテル信濃路
 - 第1号議案 平成5年度事業報告書について
 - 第2号議案 平成5年度決算報告書について
- 第29回理事会 平成7年3月28日 会場 長野市 山王共済会館
 - 第1号議案 平成7年度事業計画書(案)について
 - 第2号議案 平成7年度収支予算書(案)について
 - 第3号議案 平成6年度収支補正予算書(案)について
 - 第4号議案 寄附行為の一部変更(案)について

会計監査

平成6年5月27日実施 平成5年度事業報告書および収支決算書について

(2) 調査事業

長野自動車道および上信越自動車道にかかる埋蔵文化財発掘調査－長野県教育委員会からの委託。県道大町バイパスにかかる発掘調査－長野県長野建設事務所からの委託。北陸新幹線にかかる埋蔵文化財発掘調査－長野県教育委員会および長野市・上田市からの委託。国道野尻バイパスにかかる発掘調査－建設省関東地方建設局からの委託。

ア 調査遺跡および面積()内は側道)

- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町・更埴市・中野市・豊田村・信濃町各地域内計30遺跡, 114, 250㎡
- 北陸新幹線関係 佐久市・御代田町・浅科村・上田市・更埴市・長野市内計16遺跡, 115, 280㎡ (7, 474㎡)
- 国道野尻バイパス関係 信濃町内2遺跡, 11, 400㎡
- 県道大町バイパス関係 小川村内1遺跡, 200㎡

イ 整理事業

- 長野自動車道関係 長野市の2遺跡の整理事業
- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町・更埴市・長野市・中野市・豊田村・信濃町内計32遺跡の整理事業
- 北陸新幹線関係 御代田町・佐久市・浅科村・上田市・更埴市・長野市内計16遺跡の整理事業

(3) 事業費

長野自動車道関係	212, 539千円	国道バイパス関係	67, 181千円
上信越自動車道関係	1, 709, 716千円	県道関係	340千円
北陸新幹線関係	1, 107, 552千円		

(4) 普及活動(83ページ参照)

(5) 職員研修

ア 講師招へい及び来所による指導・講習会等(88ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 日	日 数	課 程	参 加 者
平成 6. 7. 5～8. 10	29	一般課程	上 沼 由 彦
6. 6. 14～6. 28	15	保存科学基礎課程	水 沢 教 子
6. 8. 17～9. 13	28	文化財写真課程	前 田 利 彦
6. 11. 29～12. 16	19	環境考古課程	川 崎 保
6. 10. 25～10. 28	4	製鉄遺跡調査課程	柳 沢 亮
7. 3. 7～3. 13	10	人骨調査課程	若 林 卓

ウ 海外研修

期 日	内 容	参加者
平成 7. 3. 2 ～ 3. 11	<p>我国の古代文化の源流となった韓国の古代文化遺跡の研究</p> <p>①遺跡・博物館等の見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天馬塚古墳, 西宗面方面の積石塚古墳, 仏国寺, 古墳, 寺院跡, 公山城等 ・国立慶州博物館, 釜山市立博物館, 国立扶余博物館, 仁川国立博物館, 国立中央博物館等 <p>②大学研究室等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東亜大学, 慶北大学, 釜山大学等 	西山克己 市川隆之 河西克造 出河裕典

エ その他の学会関係研究会・研修会

期 日	内 容	参加者
6. 6. 4～6. 5	シンポジウム「近江系土器の実態とその移動」(米原市)	青 木 一 男
"	「考古学と中世史研究」	河 西 克 造
"	帝京大学山梨文化財研究所(石和町)	
"	「古文化財研究会」	白 沢 勝 彦
"	国立歴史民俗博物館(佐倉市)	
6. 11～6. 12	「日本文化財科学会」 昭和女子大学	白 沢 勝 彦
7. 7～7. 8	「農耕開始期における石器データの収集」	山 本 浩
"	国立歴史民俗博物館	百 瀬 長 秀
8. 6～8. 7	「全国城郭研究者セミナー」 白鷗大学	町 田 勝 則
11. 26～11. 27	シンポジウム「古代における農具の変遷」	河 西 克 造
"	静岡県埋文研究所	白 居 直 之
11. 25～11. 27	シンポジウム「関東の国分寺」 国分寺市	川 崎 保
12. 17～12. 18	「東日本の水田を考える会」 仙台市	河 西 克 造
7. 2. 1～2. 2	シンポジウム「古代に挑戦する自然科学」 東京都	白 田 武 正
7. 2. 4～2. 5	シンポジウム「縄文セミナー」 水上町	賛 田 明
"	"	綿 田 弘 実
"	"	水 沢 教 子
7. 2. 18～2. 20	シンポジウム「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代の編年」	大 竹 憲 昭
"	沼津市	谷 和 隆
※この他各種シンポジウム, 日本考古学協会, 学会, 大会等参加多数		

オ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察および資料調査

期 日	視 察 ・ 調 査 他	参加者
7. 2. 24～2. 26	山梨県立考古博物館他	依田謙一ほか
この他、他県埋文センター・博物館・大学研究施設・発掘調査現場の視察・資料調査などを行った。		

カ 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
6. 4. 20	全埋文協中部・北陸ブロック会議	新 潟 市	田 村 治 夫 神 林 幹 雄 小 林 秀 夫
6. 5. 11	全埋文協役員会	長 野 市	事 務 局
6. 6. 16～6. 17	全埋文協総会	大 阪 府	田 村 治 夫 小 林 秀 夫 越 清 登 下 平 正 彦
6. 9. 13～9. 14	関越自動車道関係等四県連絡会議	伊香保町	百 瀬 長 秀 篠 原 教 雄 堀 正 治
6. 10. 6～10. 7	全埋文協研究会	宇都宮市	関 孝 一 青 沼 博 之 磯 野 道 子
6. 10. 20～10. 21	関東甲信越静埋文行政担当者会議	村 上 市	土 屋 積 二 玉 井 昌
6. 10. 27～10. 28	全埋文協中部・北陸ブロック会議	石 和 町	田 村 治 夫 羽 生 田 博 行 広 瀬 昭 弘 石 坂 裕
6. 11. 7～11. 8	全埋文協役員会	東 京 都	田 村 治 夫 神 林 幹 雄 小 林 秀 夫
6. 11. 24～11. 25	関東甲信越静埋文行政担当者共同研修会	石 和 町	岡 田 正 彦 白 田 武 正
7. 2. 16～2. 17	全埋文協中部・北陸ブロックOA委員会	富 山 市	原 明 芳

キ 長野県教育センター・産業教育センター研修

期 日	分 野	講 座 名	参 加 者	
教育センター（※企画研修・△公開講座）				
平成 6.6.2～6.3	一般	社会・地歴公民	追求力を育てる社会科の授業	五十嵐敏秀
6.7.5～7.6	一般	学校図書館	学習情報センターと利用指導の実際	白鳥喜一郎
6.7.19～7.20	一般	理 科	自然観察	山本 浩
6.8.3～8.5	一般	社会・地歴公民	地域と教材開発	上沼 由彦
"	"	"	"	山崎 光顕
"	一般	図工・美術	絵を描くところ	奥山 宗春
6.8.30～8.31	一般	理 科	大地の生いたちを探る	川崎 保
6.9.8～9.9	一般	理 科	地質分野の野外観察と教材化	柳 沢 亮
6.10.4～10.5	一般	教育相談	小学校の教育相談	月原 隆爾
6.10.19～10.20	一般	理 科	中学・高校の地学	町田 勝則
"	"	"	"	前田 利彦
6.10.20～10.21	一般	保健・安全	思春期の指導	山岡 一英
6.9.29	※	教職教養	自然の神秘を探る	竹内 聖彦
"	"	"	"	前田 利彦
"	"	"	"	和田 進
6.11.1	※	教職教養	自然環境と身近な生活	山崎 光顕
"	"	"	"	和田 進
6.12.1	※	教職教養	自己を見つめて	山岡 一英
"	"	"	"	依田 茂
6.12.15	※	教職教養	道一筋に生きる	山崎 光顕
産業教育センター				
6.6.20～6.21	情報処理		ワープロ入門	依田 茂
6.7.4～7.5	"		パソコン入門(2)	広瀬 昭広
6.8.4～8.5	"		パソコン入門(3)	五十嵐敏秀
6.9.29～9.30	"		パソコン入門(4)	月原 隆爾
6.12.15～12.16	"		パソコン入門(5)	川崎 保
6.7.27～7.29	"		MS-DOS応用(1)	前田 利彦

ク 姉妹校研修

調査事務所名	期 日	訪問学校名	研修内容	参加者
佐 久	6.10.4	佐久市立東中学校	授業参観・談話等	青沼博之・征矢野安政
	6.11.16	佐久市立東小学校	授業参観・談話等	征矢野安政
長 野	6.12.5	長野市立篠ノ井西中学校	同和教育研究授業参観・授業研究会参加	白沢勝彦・山中 健・山本 浩・依田 茂
	7.2.15	長野市立通明小学校	授業参観・談話等	青木一男・出河裕典・月原隆爾・鳥羽英継・宮下裕治・山崎光顕・山本 浩
中 野	7.2.14	長野県中野西高校	授業参観・談話等	常長虎徹・神林忠克・奥山宗春・石原州一・小田切清一・寺島俊郎・竹内聖彦・鈴木孝則

ケ 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協 力 ・ 指 導 内 容 等
6. 4. 1～9. 30	飯田市	国道153号線関係発掘調査等
6. 7. 7～7. 29	佐久市	蛇塚A遺跡群の調査
6. 10	中野市	安源寺遺跡の調査
この他、松本市、波田町、高山村等県内12市町村及び県外6関係機関から発掘調査、整理作業、保存処理等協力・指導の要請があり対応した。		

コ 平成6年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会

一 県教育委員会・長野県立歴史館と共催

1 日時 平成7年2月2日(木) 9時45分～16時

2 会場 長野県立歴史館

3 研修会要旨

9:15 受 付

9:45 開会行事

主催者あいさつ

日程説明

10:00 講 演

於 講 堂

10:00-11:40 「埋蔵文化財写真の現状と問題点」

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

佃 幹 雄 専 門 官

11:40 質 疑

12:00 昼 食

12:30 歴史館諸施設及び館内展示等見学 (希望者)

13:30 実 習

於 実習室, 作業室

13:30-15:30

「遺物写真の基礎知識と撮影実習」

講 師 奈良国立文化財研究所

佃 幹 雄 専 門 官

助 手 当センター

西 島 力 調 査 研 究 員

15:45 開会行事

主催者あいさつ

諸連絡

16:00 終 了

平成6年度役員及び職員

理事会

理事長	佐藤善處 (県教育長)
副理事長	田村治夫
理事	花岡 勝明 (県企画局長)
	北沢 享一 (県高速道局長)
	宮島 和夫 (県北陸新幹線局長)
	木船 智二 (県教委文化課長)
	宮坂 博敏 (更埴市長)
	森嶋 稔 (県考古学会長)
	滝沢 忠雄 (長野市教育長)
	神村 透 (考古学研究者)
監事	手塚 勝友 (県会計局会計課長)
	湯沢 角雄 (県教委総務課長)

事務局

事務局 長	峯村 忠司	参 事	樋口 昇一
総務部 長	神林 幹生	調 査 部 長	小林 秀夫
総務部長補佐	羽入田博行		
総務係 長	磯野 道子		
職 員	堀川 正子 (主査) 篠原教雄 (主査) 下平 正彦 (主事)		
派遣職員	岡村 秀雄		

調査事務所

	長野調査事務所	佐久調査事務所	中野調査事務所	上田調査事務所
所 長	岡田 正彦	青沼博之(兼)	関 孝一	青沼博之
庶務課長	羽入田博行(兼)	玉井 昌二	高野 幹郎	越 清登
庶務係長	磯野 道子(兼)			
事務職員	主査 堀川 正子(兼) 主査 篠原 教雄(兼) 主事 下平 正彦(兼) 原田 和男	小島みき子	主査 堀 正治 鈴木 仁	主事 石坂 裕 神田まさみ
調査課長	百瀬 長秀 原 明芳(兼整理課長)	白田 武正	土屋 積	広瀬 昭弘
調査研究員	上田 真 綿田 弘実 田中正治郎	白鳥喜一郎	常長 虎徹	寺沢 政俊
	市川 隆之 青木 一男 伊藤 友久	征矢野安政	白田 広之	西村 政和
	宮島 義和 上田 典男 河西 克造	宇賀神誠司	久保田秀一郎	若林 卓
	宮下 裕治 澤谷 昌英 出河 裕典	依田 謙一	鶴田 典昭	川崎 保
	依田 茂 渊井 英知 月原 隆爾	藤原 直人	酒井 健次	柳澤 亮
	徳永 哲秀 増村 香子 水沢 教子	桜井 秀雄	谷 和隆	豊田 義幸
	西嶋 力 吉江 英夫 広田 和穂	山岡 一英彦	前田 利彦	井口 章
	山中 健 寺内 隆夫 市川 桂子	上沼 由彦	石原 州一	五十嵐敏秀
	寺内 貴美子 鳥羽 英継 西山 克己		奥山 宗春	柳沢 秀一
	白居 直之 白沢 勝彦 賛田 明		代田 孝	和田 進
	山崎 光頭 山本 浩 両角 英敏		片山 徹	相沢 秀樹
	平出潤一郎 山崎まゆみ 西嶋 洋子		大竹 憲昭	田村 彬
			寺島 俊郎	藤森 俊彦
			竹内 聖彦	町田 勝則
		鈴木 孝則		
		神林 忠克		
		小田切清一		
調 査 員	山極 充 島田 正夫	尾台 昇		

長野県埋蔵文化財センター年報Ⅱ 1994

発行日 平成7年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒387 更埴市屋代清水260-6

TEL 0262-74-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野市西和山470

TEL 0262-43-2105